

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年10月28日(No.650)～2005年5月17日 (No.819)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

[再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

819 国家と諸権力、そして教会

[山谷](#) - 2005/05/17 13:16 -

東京基督教大学宣教学教授の倉沢正則博士が、フラァ神学校留学中に懸賞論文として執筆された「国家と諸権力、そして教会—聖書による一考察」が、1988年発行の『福音主義神学』第19号に収録されています。

倉沢氏が、新約聖書神学に根拠して、バルト、クルマン、ベルコフ、ケアードらを参照しつつ論じておられるその内容は、これまで当掲示板で論じてきた「中間時の中間領域における天使的国家権力論」というテーマと、ちょうど重なっているように思われます。

倉沢氏はその論文の末尾を、クルマンの『キリストと時』を引いて、次のように結んでおられます。

「『異邦の国家も正当な国家となりうる。それは、その与えられた領域を尊重し、神のしもべとして、善悪を判定し、悪を罰し善に報いることをもってである。異教の国家は、確かに、その国家がキリストの王国の成員であることを知らない。イエス・キリストの教会はこれを知っている。教会は、つねに、このことを告げ知らせねばならない。特に、国家が神に聖定された務めより逸脱する危険のある時には、なおさらのことである』というクルマンの指摘にわれわれは耳を傾けたい」

[倉沢正則「国家と諸権力、そして教会」『福音主義神学』第19号、福音主義神学会、1988年、pp.165-184. \(PDFファイル\)](#)

818 結論として

[山谷](#) - 2005/04/09 00:10 -

以上述べてきたことの結論として、こういう命題が立てられるでしょう。

1. 世界は「福音宣教」のために維持され、管理され、保全されている。
2. 世界の管理の任務にあたっているのは、「多数の世界管理者」としての多様な諸国家・諸言語・諸民族・諸文化・諸宗教である。
3. 「福音宣教」が完了するまでは、多様な諸国家・諸言語・諸民族・諸文化・諸宗教は、尊重され、保存され、維持され、発展させられなければならない。

オイクメネー（世界）におけるエコノミー（経

□817 済)とエキュメニズムとエコノミー (神の経綸)
(7)

山谷 - 2005/03/15 16:52 -

下記のような世界観的パラダイムに立つならば、世界史の中心は「キリストの贖罪のみわざ」であり、世界史のベクトルは「キリストの初臨から再臨へ」と方向付けられており、世界が管理され維持されている理由は「福音宣教」による「キリストのからだの形成」のためである、ということになります。

「福音宣教」のために維持されている世界においては、**世界の第1項である「国家」**が、社会の秩序と安寧の維持のために、神から付託された暴力装置の権能(剣)を行使し、また、地球環境と生態系を保全し、社会的弱者を保護・救済します。

また、**世界の第2項である「社会」**が、諸言語・諸民族・諸文化・諸宗教によって、社会生活の秩序と安寧を保障し、また、そのようにして人類を分散管理することにより、「全人類規模の集団的な『神への反抗』」を未然に防止します。

そうして、**世界の第3項である「教会」**が、福音宣教を進めることによって、キリストの贖いに招かれている人類を集めて、キリストのからだを形成すると共に、キリスト者の世界的な連帯と監視により、世界の第1項である「国家」と第2項である「社会」の悪鬼化を抑止するのです。

このような世界観的パラダイムにおいては、相互に異なる多様な文化や文明は、お互いに闘争し滅ぼし合う関係にあるのではなく、<「贖いの秩序」の前提条件をなすものとしての「創造の秩序」を維持管理する「世界管理者」としての任務>を協力して担うべき関係にあります。

かくして、言語の多様性、民族の多様性、文化の多様性、宗教の多様性は、<贖いの秩序のための前提条件>として、保障され、保全され、維持されなければならないことになります。

このようにして、英語だけではなく、ウェールズ語、イロカイ語、ケチュア語、イディッシュ語、アイヌ語、気仙沼方言が保存され、使用され、発展させられなければなりません。

また、ファーストフードだけでなく、スローフード、民族料理、郷土料理が保存され、食べられ、発展させられなければなりません。

また、コンピューターネットワークで動く国際金融経済だけでなく、ローカルな通貨やコミュニティ通貨による地方経済、さらには、交換経済が保存され、使用され、発展させられなければなりません。

このような「多様性」が喪失されるならば、それは、全人類規模による集団的な「神への反抗」である、「バベルの塔」の再来を意味することになります。

あの「バベルの塔」は、黙示録においては「バビロン」という名前で登場することになりますが、幸いにも、「中間時」にあっては、「福音宣教」によって、その出現、すなわち、バベルの塔の出現は、抑止されているのです。

オイクメネー (世界) におけるエコノミー (経

□816 済)とエキュメニズムとエコノミー (神の経綸)
(6)

山谷 - 2005/03/15 16:24 -

「福音中心的世界観」(Ecumeno-Evangelical Cosmology)に立脚して世界を眺めたときに、「宗教文化多元主義」は、どのように評価されることになるのでしょうか？

従来のアプローチですと、キリストの福音の卓越性を強調して、宗教文化多元主義を拒否するか、あるいは、キリストの福音の包括性を強調して、宗教文化多元主義を肯定するか、ふたつの選択肢しかなかったように思われます。

しかし、「第三の選択肢」を考えることが可能であろうと思われます。それは、次のようになります。

1. 創造において、神は「世界管理者」に、世界管理の任務を付託した。
2. 人類の墮落後において、「世界管理者」が、世界管理の任務を適正に行わなかったために（あるいは放棄したために）、地に暴虐が満ち、神の裁きとしての「宇宙的災忌」（ノアの洪水）を招来した。
3. 洪水後、神は「世界管理者」に、暴力装置としての権能（剣）を付与して、社会の秩序と安寧の維持に専心してあたるよう命じた。
4. しかし、人類は、単一の言語、単一の民族、単一の文化、単一の宗教であったために、容易に結束して「全人类的規模による『神への反抗』」（バベルの塔）を行うに至った。
5. 神は、人類を、多数の言語、多数の民族、多数の文化、多数の宗教に分散させ、「多数の世界管理者」の支配と監督のもとに置いた（人類の後見人・養育係・管理人としての「この世を支配する諸霊」）。
6. キリスト初臨と再臨の間の「中間時」にあっては、人類は、後見人・養育係・管理人としての「この世を支配する諸霊」の支配から脱却して、キリストの贖いの恵みに入り、「新創造としてのキリストのからだ」の肢体となる。
7. しかし、キリストの贖いの恵みへの招きが行われ続けている「中間時」にあっては、多くの「いまだ贖われていない人々」が世界に居住しており、このため、引き続き、「多数の世界管理者」が、人類の後見人・養育係・管理人としての任務を行わなければならない。このため、キリストのからだに参与した人類としての「キリスト者」は、くもはや・この世の諸霊には支配されていないが・しかし・この世の支配と秩序に対して「自己の良心のため」と「主イエス・キリストのため」に服従すべきである>という、「中間時の中間倫理」を命じられている（ローマ13章、ペテロ前書2章）。
8. かくして、「宗教文化多元主義」とは、（1）神が「多数の世界管理者」に付託しているところの「中間時における世界管理のミッション」であり、（2）それは、創造における神の主権に由来するものであり、（3）かつ、人類墮罪後における神の経綸的・摂理論的な支配に基くものであり、（4）さらに、全宇宙的な贖いの秩序としてのキリストの王権的・頭首権的支配に従属しており、（5）それ自体は人類を救う能力を持たないが、（6）人類を分散管理することによって「全人类的規模の集団的な『神への反抗』」を未然に防止する機能となり、（7）そうすることにより、贖いの恵みへと招かれるべき人類を、秩序ある安寧な生活の中に生存させ、（8）こうして、贖いの恵み（特殊恩恵）に対する前提条件としての「創造の秩序」（一般恩恵）の一部を構成しているが、（9）しかし、永続するものではなく、キリストの再臨をもって、その使命を完了し、解消されることになる。

以上の見方によって、「宗教文化多元主義」を、キリストの福音の卓越性を強調するゆえに否定するのでもなく、キリストの福音の包括性を強調するゆえに肯定するのでもなく、キリストの福音の中心性を強調するゆえに、<十字架のしるしをつけられた世界管理者>としての「正しい位置」を与えることが出来るであろうと考えられます。

オイクメナー（世界）におけるエコノミー（経

□815 済)とエキュメニズムとエコノミー (神の経綸) (5)

山谷 - 2005/03/09 12:52 -

それでは、世界の第3項である「教会」は、どのようにしたら、「世界管理者」の悪鬼化を抑制することが出来るのでしょうか？

「教会」が、キリスト者の世界的連帯を行うことを困難にさせている理由として、これまで、「聖書靈感」「信仰と職制」「教皇首位権」という、三つの大きな見解の相違が存在してきました。

「聖書靈感」を中心に連帯しているのが、世界福音同盟。
「信仰と職制」を中心に連帯しているのが、世界教会協議会。
「教皇首位権」を中心に連帯しているのが、ローマカトリック。

・・・という構図に整理することも可能でしょう。上記のそれぞれの間には、越え難い問題が存在していますが、一致を目指す神学的対話は粘り強く続けられています。

こうした状況にあっても、故フランス・A・シェーファー博士は、キリスト者が一致出来る点において結集して「共同戦線」を張るべきである、と提唱しました。

「聖書靈感」「信仰と職制」「教皇首位権」をめぐる越え難い相違が存在してはいるものの、世界の第1項である「国家」と第2項である「社会」の＜世界管理者としての任務からの逸脱と悪鬼化＞に対しては、キリスト者は相違を棚上げして、「共同戦線」を張ることが可能ですし、事実、そうした共同戦線の試みがなされて来ています。

こうした「共同戦線」の具体例として、日本キリスト教協議会(NCC)、日本福音同盟(JEA)社会委員会、日本キリスト教会、日本キリスト改革派教会東部中会社会問題委員会、日本カトリック正義と平和協議会が共同で運営主体となっている「平和を実現するキリスト者ネット」を挙げることが出来るでしょう。ここには「聖書靈感」「信仰と職制」「教皇首位権」といった相違を乗り越えた、キリスト者の連帯が見られます。

さて、では、そのようにしてキリスト者が世界的連帯による監視と抵抗を行うとしても、どのような抵抗が可能なのでしょうか？

この点で示唆を与えてくれるのが、最近、米長老教会(PCUSA)が検討している、問題のある多国籍企業に対する「教会投資資金」の引き上げ措置です。

これは、人権や人道に対する深刻な侵害、破壊的な武器の開発製造と輸出、大規模な自然環境破壊など、問題を起こしている多国籍企業に対して、教会が抗議を行い、問題の是正が見られない場合には、教会が資金運用のために投資している「教会投資資金」を、段階的あるいは全面的に引き上げる、という対抗手段です。

もし、世界教会協議会系諸教会、世界福音同盟系諸教会、ローマカトリック系諸教会が、世界的な「共同戦線」を形成して、「世界管理者」の逸脱と悪鬼化への対抗手段として「教会投資資金」を武器にすることができるなら、「世界管理者」の逸脱傾向に対してかなり有効な抑制になるであろうと考えられます。

諸教会の合意さえ形成されれば、諸教会の投資資金を結合して運用することは、現代のコンピュータ技術では簡単に出来ることでありましょう。

このようにして、ヘッジファンドの悪鬼化を抑制する「地の塩としての教会ファンド」という

21世紀的な可能性が、米長老教会の試みによって示されているのです。

○814 オイクメネー（世界）におけるエコノミー（経済）とエキュメニズムとエコノミー（神の経綸）（4）

[山谷](#) - 2005/03/08 17:07 -

さて、「福音中心的世界観」（Ecumeno-Evangelical Cosmology）においては、世界の第1項である「国家」と、第2項である「社会」が、「世界管理」の任務を遂行し、そのようにして維持されている世界において、第3項である「教会」が、「福音宣教」の任務を遂行することになります。

そうして、「国家」あるいは「社会」が、「世界管理」の任務から逸脱して、悪鬼化しようとする場合。たとえば、破壊的な長期総力戦の遂行、ヘッジファンドによる中小国の破壊、地球温暖化防止に対するコミットメントの欠如、など、が見られた場合。

世界の第3項である「教会」は、キリスト者の世界的連帯に基く監視と抵抗を行って、「国家」と「社会」の悪鬼化を抑制しなければなりません。

○813 オイクメネー（世界）におけるエコノミー（経済）とエキュメニズムとエコノミー（神の経綸）（3）

[山谷](#) - 2005/03/08 16:59 -

現代に生きるファンダメンタリストにとっては、「信教の自由」と「国家権力」の問題、そうして、「キリストの独自性」と「宗教文化多元主義」の問題が、取り組まなければならない目下緊急の課題となっています。

「信教の自由」と「国家権力」の問題にしても、「キリストの独自性」と「宗教文化多元主義」の問題にしても、二項対立的思考法によって捉えてしまいがちですが、むしろ、オイクメネー（世界）の中心に「福音宣教」を位置付けることによって、すっきりと整理ができるのではないかと思います。

それは、次のように考えられます。

1. 神は、「世界管理者」に、世界を適切に維持管理する任務を与えた。
(創世記1:28)

2. 墮罪後・洪水後に、「世界管理者」の任務遂行のために、暴力装置の権能（剣）が付与された。
(創世記3:24,9:5-7,10:8-12 申命記32:8 ローマ13:1-7)

3. 「世界管理者」は、（1）単に勧善懲悪をなすだけでなく、（2）すべてのいのちあるものとしての生態系を保全し、（3）搾取され抑圧されている貧困者と社会的弱者を擁護し救済するという、神から付託された任務を負う。
(詩編72)

4. 悪鬼化した「世界管理者」は、キリスト高举の出来事によって打破され、武装解除されて、キリストの王権的・頭首権的支配のもとに従属させられている。これが、現経綸である。
(エフェソ1:20-21 コロサイ1:16,2:10,13b-15)

5. キリスト初臨と再臨の間の「中間時」である現経綸においては、キリストのからだなる教会が「福音宣教」を行う。福音宣教が完了するまでは、世界は「世界管理者」によって維持され続けなければならない。

「主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」(2ペトロ3:9)

6. キリストの王権的・頭首権的支配のもとにある「世界管理者」は、「世界の維持管理」の使命を果たすために、(1) 国家権力、(2) 世界の管理運営の法としてのエコノミー（経済）、(3) 諸民族・諸言語・諸文化・諸宗教の「各法領域」において、キリストの王権的支配のエージェントとして奉仕する。

(1ペトロ2:13-17)

以上のように考えれば、世界の存在理由の中心に「福音宣教」が据えられることになります。

そして、福音宣教の場（Sphere）としての「世界」を維持管理する「世界管理者」の働きが、国家権力でありエコノミー（経済）であり諸民族・諸言語・諸文化・諸宗教である、ということになります。

(「人類の養育係・後見人・管理人としてのストイケイア」ガラテヤ3:31-4:11)

そうなりますと、国家権力も、エコノミー（経済）も、文化多元的社会も、宗教多元的社会も、いずれもが、「福音宣教の前提としての世界」を維持するために専心奉仕している「キリストのしもべ」にほかならない、ということになります。

もちろん、国家権力・経済・諸文化・諸宗教が「悪鬼化」という事態が常にあるわけだし、過去にもあったわけです。

しかし、この中間時においては、「不法の力」は「抑えるもの」によって、抑えつけられているのです。

(2テサロニケ2:7)

オスカー・クルマンは、この「抑えるもの」を「福音宣教」にほかならないと考えているわけですから、構図としては、国家権力も経済も諸文化も諸宗教も、キリストの王権的・頭首権的支配のもとで、「福音宣教」に対して従属させられており、「福音宣教」の前提条件である「世界」の維持管理のために働いており、「福音宣教」によってその悪鬼化を抑制されている、ということになります。

このような、＜福音宣教を中心とする世界観的パラダイム＞を、従来の「世界福音主義」(World Evangelicalism) に代る、「福音中心的世界観」(Ecumeno-Evangelical Cosmology) とでも言うことが出来るでしょう。

オイクメネー（世界）におけるエコノミー（経済）とエキュメニズムとエコノミー（神の経綸）
(2)

[山谷](#) - 2005/03/07 22:39 -

それでは、「人間の生活する全領域を管理運営するための法」としてのエコノミー（経済）は、どのような特徴を持つのでしょうか。

まず、「人間の生活する全領域」とは、人間の生存を可能にさせている条件としての「創造の秩序」がすべて包含されていなければなりません。この場合の「創造の秩序」とは、政治・経済・社会・文化のみならず、神が創造した地球と、その自然環境、すべての生命からなる生態

系を指します。

それゆえ、「人間の生活する全領域を管理運営するための法」としてのエコノミー（経済）は、神が創造した地球と、その自然環境、すべての生命からなる生態系を保全するものでなければなりません。

つまり、神が人間に与えた「世界管理者」としてのコミッション（委任）には、人間のみならず、すべての生命あるものの保全という任務が含まれている、ということになります。

次に、神が人間に与えた「世界管理者」としてのコミッション（委任）は、旧約聖書においては、常に、王権的支配の概念との関わりで捉えられているということです。特に、詩編72編には、「世界管理者」の任務が、王権的支配の概念を使いながら、貧しい者と弱者の保護および救済に焦点をあてて叙述されています。経済的に搾取され、虐げられ、暴力にさらされている、貧しい人々や社会的弱者を救済し、その人たちのいのちを守ることが、「世界管理者」の任務であると言われているのです。

以上のことから、「人間の生活する全領域を管理運営するための法」としてのエコノミー（経済）は、単なる「市場原理至上主義」であってはならないのであり、人間の生活の豊かさと利便性の追及が、必ず、貧しい人々や社会的弱者の救済、社会正義の実現、人権と人道の擁護、自然環境と生態系の保全などと、両立するものとならなければならない、ということになります。

これが、「創造の秩序」と「王権的支配」の概念に沿った「世界管理者」としてのエコノミー（経済）の、本来的なあるべき姿なのです。

そうして、エコノミー（経済）が、この「あるべき姿」から逸脱して悪鬼化しているのであれば、世界の第三項としての＜教会＞が、キリスト者の世界的連帯による監視と抵抗権の行使によって、悪鬼化を阻止しなければなりません。こうして、キリスト再臨前の中間時においては、神の経綸によって、まだ決定的な出現を許されていない「不法の力」が、教会によって抑え込まれ、キリストの王権的・頭首権的支配のもとに服従させられることになります。

この使命のために働くキリスト者の世界的連帯が＜エキュメニズム＞であるわけです。ですから、悪鬼化する＜エコノミー（経済）＞を、＜エキュメニズム（教会）＞が是正して、＜エコノミー（中間時の経綸）＞に引き戻す、という動きになります。

このようにして、オイクメネー（世界）は、創造の秩序として、神の経綸の中で、その墮落と悪鬼化にもかかわらず、十字架のしるしをつけられて、キリストの王権的支配の下に置かれ、一般恩恵として、特殊恩恵の前提をなし、そのことにより、キリストのからだの形成に寄与しつつ、主の再臨を待ち望んでいるのです。

オイクメネー（世界）におけるエコノミー（経済）とエキュメニズムとエコノミー（神の経綸）
□810 (1)

[山谷](#) - 2005/03/07 22:38 -

今日は、エキュメニズム研修会で、聖公会東京教区主教・植田仁太郎師の講演を伺ってきました。お話を聞きながら、次のような発見を与えられ、また、思索と課題を頂戴いたしました。主教様の刺激に富んだ講演に心より感謝いたします。

エキュメニズム（エキュメニカル運動）とは、「オイクメネー」すなわち「人間の生活する全領域」を視野に入れて福音宣教を考えるムーブメントである、ということでした。そうして、「オイクメネーをマネジメントするためのノモス」すなわち「人間の生活する全領域を管理

運営するための法」が、「オイクメネー+ノモス」としての「オイコノモス（エコノミー）」である、ということでした。

エコノミーは、「人間の生活する全領域を管理運営するための法」としての＜神の経綸＞を意味する場合と、＜人間の経済活動＞を意味する場合とがあるわけですが、非常に興味深いことに、「エキュメニズム」と「神の経綸」と「経済」とは、非常に密接な関係にある、ということです。

現在問題となっているのは、＜グローバリズムによる自由経済システムの悪鬼化＞ということです。

為替と金融の自由化によって、ヘッジファンドと呼ばれる高機能金融商品が登場し、ひとつの会社が十数兆円以上もの巨額な資金を運用して、中小国の国家権力を凌駕する強大な存在となっています。90年代のIMF通貨危機では、こうしたヘッジファンドに狙い撃ちされたアジア諸国が、実際に破綻へと追い込まれました。核兵器のボタンではなく、ヘッジファンドを操る複雑なコンピューターシステムのキーを押せば、標的とした国家を一瞬のうちに破滅させることが可能になっているのです。

20世紀においては、世界の第一項としての＜国家＞の悪鬼化が問題となったわけですが、21世紀においては、世界の第二項としての＜社会＞の悪鬼化が、グローバル経済の領域において、特に顕著になってきているわけです。これに対して、世界の第三項としての＜教会＞は、キリスト者の抵抗権を行使して、悪鬼化するグローバル経済に対して抗議し、グローバル経済を、キリストの王権的・頭首権的支配の下における「あるべき在り方」に軌道修正させる必要がある、ということです。

それは、「市場原理至上主義としてのエコノミー」が、エコノミーそれ自体の本来あるべき姿である「人間の生活する全領域を管理運営するための法」へと、軌道修正されなければならない、という課題になります。

□ 809 Theologiaさまの論点

[山谷](#) - 2005/03/05 11:55 -

Theologiaさまのブログでは「剣の権能としての国家権力」について、詳細な聖書釈義に基いた考察が行われています。

＜天使的秩序＞によって政治的一般恩恵を考えようとする小生の「摂理論的アプローチ」と対照的に、Theologiaさまは＜創造の秩序＞によって政治的一般恩恵を考えようとする「創造論的アプローチ」を採っておられます。

その綿密な釈義的研究への目配りには、信服させられます。

小生が注目したのは、Theologiaさまが、政治的一般恩恵を、＜世界創造前から神によって制定され委任された「世界管理の機能」＞と、＜墮罪後・洪水後に神によって制定され委任された「暴力装置の機能」＞と、二つに区別して考えておられる点です。

つまり、世界管理者としての国家権力は「創造の秩序」に由来するものであり、暴力装置としての国家権力は「墮罪後の秩序」に由来するものである、ということになります。

そうしますと、暴力装置としての国家権力の権能は、おのずから、次のように規定されることになるでしょう。

（１）暴力装置としての国家権力の権能は、＜人類が、その墮落した性質にもかかわらず、平穏で安寧な生活を過ごすことが出来るよう、社会秩序の維持を保障すること＞に限定される。

(2) 暴力装置としての国家権力が、実際に暴力を行使するにあたっては、国家権力の第一義的存在理由である<世界管理者としてのミッション>が、暴力の行使を規制する。

国家権力においては、「世界管理者としてのミッション」が第一義的に優先されなければならないわけですから、世界管理の任務に矛盾する・あるいは・世界管理の任務を妨げる・あるいは・世界管理の任務を破壊するような暴力の行使は、不法であるということになります。

ここから、人道に反するような仕方での国家権力の行使の「不法性」、核兵器の使用の「不法性」、社会と文明を破壊する長期総力戦の「不法性」、特定の人種や民族を根絶することを目論むジェノサイドの「不法性」が、導き出されます。

国家権力が、上記に類する暴力を行使する場合、国家権力は、神によって与えられた「世界管理のミッション」に背いていることになります。小生の「天使的国家権力論」で言うところの<国家権力の悪鬼化>という状況は、まさに、このことを言うのであらうと思います。

さらにまた、国家権力による暴力の行使は「社会の秩序と安寧の維持を保障する限りにおいて」正当性を持つものです。

ところで、墮罪後の経綸において、なぜ社会の秩序と安寧が維持されなければならないのかと言えば、それは、福音宣教によって社会の中から招き出された人たちが、キリストのからだなる教会を形成するためであるのです。

ここから、「社会の秩序と安寧の保障」は「福音宣教」と一体不可分の関係にある、ということが言えます。これは、ジョン・マーレーが言う「特殊恩恵の前提条件をなすものとしての一般恩恵」という考え方に一致するでしょう。

それゆえ、国家権力が、福音宣教を妨害する目的で暴力を行使する場合には、国家権力が「墮罪後の安全保障者としてのミッション」に背いている、ということになります。

かくして、国家権力の悪鬼化とは、「世界管理者としてのミッション」に背く場合と、「墮罪後の安全保障者としてのミッション」に背く場合と、二種類ある、ということになるであります。

キリスト者は、国家権力に服従するようローマ書13章において命じられているわけですが、しかし、国家権力が「世界管理者としてのミッション」と「墮罪後の安全保障者としてのミッション」とに背く場合には、キリスト者の抵抗権の理由が発生することになります。

808 キリスト集中論的な天使的照明の必要性

[山谷](#) - 2005/03/02 15:02 -

このところ、一般恩恵としての天使的照明、すなわち、<神による最初の被造物として、天地創造の前から存在した、人格的存在としての知恵>ということ、を考えて来たわけです。

東方教会では、箴言がこの天使的存在を「女性」として描写していることから、<ハギア・ソフィア>という呼称をつけて、アイコンにも描いていたようです。

ところが、この<ハギア・ソフィア>の概念は、通常の「一般恩恵」や「創造の秩序」の概念が<自然神学の根拠>として濫用されやすい（例：ナチス時代のドイツ民族主義に迎合した自然神学）のと似ていて、現代において次のような使われ方がされているのが見られます。たとえば：

(1) 女神としての<ハギア・ソフィア>が、権能と栄光において<ヤハウェ>と同等である

と見る、女神と男神の二元論的世界観。

(2) 女神としての<ハギア・ソフィア>が、子宮として神および万物を生み出したと見る、フェミニスト神学的・汎神論的世界観。

(3) 女神である<ハギア・ソフィア>が、諸宗教・諸文化・オカルティズムの一切の根源であると見る、グノーシス的・包括論的世界観。

以上のような誤謬を避けるためには、<ハギア・ソフィア>の概念を使って一般恩恵を説明するよりは、最初からすべて<イマゴ・デイの残滓>の概念だけを使って一般恩恵を説明すればよいわけです。

しかし、箴言の擬人法を字義通り受け取って「天使的照明」を採用するのであれば、予想されるであろう各種の神学的逸脱を未然に防止する安全策として、以下の強調点を必ず保持しなければなりません。すなわち：

(1) 三位一体の第二位格であるキリストが、<ハギア・ソフィア>を無から創造した。

(2) <ハギア・ソフィア>は、キリストに仕えるために、キリストによって創造され、キリストによって保持され、キリストによって統治されている天使的存在である。

(3) キリストの十字架・復活・昇天という「キリスト高挙」の出来事によって、<ハギア・ソフィア>は天使的諸力と共に打ち破られ、武装解除され、キリストの頭首権に対して従属させられた。

(4) キリストの初臨と再臨の間の「中間時」においては、<ハギア・ソフィア>は、他の天使的諸力と共に、キリストの頭首権的支配のもとにあって、「世界の保持」の働きのために奉仕しているが、キリストの再臨によって、<ハギア・ソフィア>もまた、他の天使的諸力と共に、その役割を終え、解消される。

上記のような「キリスト集中論的限定」を加える、という条件が満たされるのであれば、<ハギア・ソフィア>の概念を神学的に安全に使うことが可能であろうと思われます。

■807 ペテロのクティシス問題 (2)

[山谷](#) - 2005/02/27 22:27 -

—引用続き—

ペテロの第一の手紙は、国家権力の叙述において、ローマ人への手紙13章におけるパウロの場合より、より具体的かつ厳密である。「王」というのはギリシア語圏における皇帝の呼び名であるが、この著者は「王」とならんで、上に立つものとしての「総督」をあげている。これは皇帝が諸属州に派遣した最高の管理職であり、彼らは皇帝の名において支配を行ったのである。国家がその代表者において姿を現している場合、いずこにおいても国家は尊重され、その指令は守られなければならない。従って、皇帝の全権で任命され、国家の至上権によって権威を賦与されている官吏は、皇帝自身と同様に尊敬されるべきである。総督に言及されていることは、皇帝がすべての支配領域において、支配者としての要求と権威をもって現在する、ということも併せて明示している。14節によれば、皇帝の官吏たる者の決定的任務は、裁判を行うことである。裁判は、法の倫理的理念に基づいて考えるならば、悪人を罰し、善良な市民の功績を認めて公に報奨する、という課題をになっている。従って、国家は正しい判断を下すこと、その行動に対する基準は正しいものであること、また国家に付与されている権力を正義の遂行に役立てることを、期待されているのである。キリスト者は、当局の倫理的業績を承認し

なければならない。こう述べることによって、法治国であることが国家の本質だ、という命題から出発した発言を、行っているのである。事実法治国であることによってのみ、国家は個人を超えた存在であり、権威を要求する秩序維持の権力であることができる。国家自身が法を破り、正義の守護者たる任務を遂行しない場合にはどうすべきかという問題は、この考察の視野の外にある。そのような場合について、著者は何の指示も与えていない。国家がその権能を越えて、キリスト者に皇帝礼拝への参加を要求した後の時代には、事情は異なったものになった（黙示録13、17:5-6）。この手紙が書かれた時代には、キリスト者の集会が国家を原則的に承認していても、否応なしに国家と衝突せざるを得ないというような経験は、まだ存在しなかったのである。ペテロの第一の手紙の著者が、パウロの場合と同じく、異教の国家に対して肯定的発言をしていることは、注目すべきことである。異教国家もまた法治国たり得るのである。なぜならば、法の理念は異教世界にも存在するからである。

—引用終り—

上記の論述の最後の部分が、わたしたちの議論に直接関係するものです。すなわち、「**ペテロの第一の手紙の著者が、パウロの場合と同じく、異教の国家に対して肯定的発言をしていることは、注目すべきことである。異教国家もまた法治国たり得るのである。なぜならば、法の理念は異教世界にも存在するからである**」という部分。

旧約律法を持たない異教世界に、どうして、法の理念が存在するのか？

考え方としては、「天使的照明」すなわちく天地創造に先立って創造された人格的存在としての知恵が、法の理念を異教徒に与えている、と考えるのか、あるいは、「イマゴ・デイの残滓」が、法の理念を異教徒に与えていると考えるのか、ということなのです。

806 ペテロのクティシス問題（1）

[山谷](#) - 2005/02/27 22:23 -

NTD新約聖書註解で、ヨハネ・シュナイダーは、「ペテロのクティシス」の問題について、次のように記しています。（『NTD新約聖書註解 公同書簡』pp.155-157.）

—以下引用—

ペテロの第一の手紙2章13から17節は、異教の政府と社会に対するキリスト者のとるべき態度を規定するものであるが、＜クティシス＞というギリシア語をどう理解するかによって、13節の意味が変わってくる。聖書の語法において、これはいつも「創造」または「被造物」を意味する。この意味から出発するとすれば、著者は各論に入る前に一つの一般的原則を立て、すべての隣人に対して謙遜なれということを、すべての基本として要請した（ローマ12:10）、と見なければならない。だがそうだとすると、上なる権威に従えと言っている以下の発言が、困難をもたらす。なぜなら、著者は人間一般に対するキリスト者の関係を規定しようとしているのではなく、国家に対する彼らの立場を明らかにしようとしているからである。以上の理由に基づいて、＜クティシス＞という言葉は（ギリシア語にはそういう語法はないのだが）、権威を要求する「秩序」という意味に理解すべきであろう。著者は国家を人間の制度として規定しているのである。パウロはローマ人への手紙13章1節において、上なる権威は神から出たものだと言明しているが、この著者は基本原則の叙述において、そこまでは行っていない。しかしこの「人間の」制度を、その根源は明示していないが、やはり肯定しているのである。われわれはこの13節から、上なる権威は神の望まれたもの、だが神が直接立てられたものではない、という思想を読み取ることができよう。国家の秩序に対する服従は、ただ国家が自分の意志として服従を要求するというだけの理由ではなく、「主のために」という宗教的理由から、なされるべきである。主がそれを命じたもう。主の御意によって、国家に対するキリスト者の内的義務づけが生じるのである。またその故に彼は、国家の要求をいやいやながら、または無関心

な消極的態度で行うのではなく、信仰に基づいた賛意をこめて行うのである。

■805 Theologiaさまへのレス

[山谷](#) - 2005/02/26 21:49 -

「ペテロのクティシス」についての小論、たいへん興味深く読ませていただきました。

小生は今回、「知恵」の重要な意義について、特に箴言から多くのことを学ばせられました。これまで箴言は、単なる格言集のようにしか思っていなかったことから、自分でも意外な発見でした。

聖書研究者の中には、「箴言の持つ非律法的性格」を指摘している人もいるようであり、ますます興味が深まりつつあります。それらの人たちの論によると、箴言は知恵を「天地創造の前から存在し、世界創造のために用いられた」として、非常に高い地位を知恵に与えている一方で、律法については、ほとんど言及していないのです。ここから、神の世界創造と世界支配の経緯において、知恵と律法が対等の場所に置かれている、あるいは、ことによったら、知恵の方が優位している、というような事態が、箴言において起きてしまっている。

おもしろいのは、それらの人たちに言わせると、「知恵に対して、律法の優位を主張して、バランスを回復させるために書かれたのが、シラ書であり知恵の書である」というのです（！）

確かに、シラ書でも知恵の書でも、知恵を律法に対して従属させるような書き方が行われています。

小生にとって愉快なのは、シラ書も知恵の書も外典であるわけですから、頑強なファンダメンタリストをもって自認する再建主義者は、箴言を攻撃して自説を補強したくとも、シラ書も知恵の書も、絶対に使えないということです。

今回もつくづく感じたことは、聖書というのは、本当にどこを取っても、再建主義者の都合の良いようには書かれていない、ということでありました。

■804 1ペテロ2：13人間が立てた制度について

Theologia - 2005/02/25 23:33 -

小論「聖書釈義に基づいた政治的一般恩恵について」ありがとうございます。非常に分かりやすかったです。

1ペテロ2：13において山谷氏が「人間が立てた制度に過ぎない政治的統治者」と理解されていることについて、[山谷氏とはことなる釈義](#)を考察しました。ご一考いただけますと幸いです。

示唆に富む組織神学的視点を与えてくださり、感謝いたします。

<http://theology.exblog.jp/>

■801 聖書釈義に基いた政治的一般恩恵について

[山谷](#) - 2005/02/25 10:51 -

政治的統治者と政治制度と一般恩恵の関係について、聖書の釈義に基いて考えた小論を作成しました。お読みいただければ幸いです。

「聖書釈義に基いた政治的一般恩恵について」

■799 独裁教

HN - 2005/02/24 20:52 -

きょうのミレニウム新着情報を見ると・・・。
もう、めちゃくちゃ書いてますね。

■798 Theologiaさまへのレス

山谷 - 2005/02/23 22:31 -

ご指摘のように、ホッジが引証している聖句は、聖書の文脈で見ると、未信者のための一般恩恵についてではなく、信者のためのカリスマについて、述べているところですね。

確かに、一般恩恵としての聖霊の照明を「命題的真理」として言明している聖句は、なかなか、見つけるのが難しいようです。あのカルヴァンも、理性の光としての一般恩恵を、聖霊の賜物と関連付けて述べているくんだり及びその前後においては、脚注では聖書を引照しておらず、引いているのはキケロとかプラトンなど古代異教の著作家ばかりです。

この詰め甘い部分を狙って出て来ているのが、再建主義者の「一般恩恵否定論」である、ということなのかもしれません。

あと、ホッジの一般恩恵の定義では、人間の理性能力及び道徳的能力は、聖霊の照明・あるいは・聖霊の賜物と関連付けられていますが、大陸系改革派諸信条を見ますと、人間の理性能力及び道徳的能力は、むしろ、「自然の光」と関連付けられて、述べられています。

これをそのまま受け取ってしまいますと、聖霊の照明＝理性の光＝自然の光、ということになってしまいます。

そうしますと、人間の理性能力において、あの「恩恵」と「自然」の分割境界線をめぐる激しいせめぎ合いが起きる、ということになってしまいます（！） 古代教会においては、キリスト論の文脈において、キリストの人格の中における「恩恵」と「自然」の分割境界線をめぐる激しいせめぎ合いが起き、長く過酷な神学論争が戦わされたわけでした。

結局のところ、西方教会の神学というのは、どこまで行っても、「恩恵」と「自然」の分割境界線をめぐる議論の呪縛から、逃れることが出来ないのかもしれない（苦笑）

そう考えますと、カール・ラーナーの「ケノーシス・キリスト論的超自然的実存規定」という考え方は、未信者の理性能力・道徳的能力・福音に対する責任応答能力（結合点）としての＜一般恩恵の問題＞における「恩恵」と「自然」の分割境界線を、「キリストの受肉における恩恵と自然の調和」という観点で簡単に超克して、議論を終わらせてしまう、たいへん魅力的な提案なのです。

もうひとつの可能性としては、聖霊の照明＝理性の光＝自然の光、となってしまうのを回避するために、アレクサンドリアのクレメンスに倣って、天使的照明の概念を導入し、「理性の光＝自然の光＝天使的照明」という命題を立ててしまうことです。

これであれば、天使的秩序は＜被造物＞なのですから、上記の命題の立て方であっても、組織神学全体とは矛盾しないことになりそうですし、その上なお、「恩恵」と「自然」の直接衝突をも、回避することが可能になります。

□797 コリントー12:11

Theologia - 2005/02/23 19:15 -

カルヴァン、ホッジ、マーレーの抱いた一般恩恵の考え方を引用してくださり、ありがとうございます。カルヴァンとホッジは聖霊の働きによる一般恩恵という概念を強く持っていたんですね。ホッジがコリントー12:11を証拠聖句にしているとは残念です。当時の組織神学者は聖書釈義に厳密でなくてもよかったのかなあ。

モルトマン、パネンベルグの終末論の影響により、ここ15年弱米国の改革派神学者の幾人かが「天職でなく、カリスマとしての職業観」を強調しています。そこには「職業に関する信者への聖霊のカリスマと、未信者の職業の関係」を類比する考えがあります。カルヴァン、ホッジ時代の一般恩恵体系が聖霊論・終末論・宣教学あたりと連動して復興しているのかもしれませんが。近々ブログにまとめて批評するつもりです。

あと「照明」の定義も重要な、と思いました。聖書とは別ルートでの聖霊の照明があるのかどうか……。これもまた今後の宿題になりそうです。

再建主義に直接関係のない話題の書き込みをお許してください。

<http://theology.exblog.jp/>

□796 一般恩恵と特殊恩恵の関係

山谷 - 2005/02/23 16:31 -

一般恩恵と特殊恩恵の関係について、ウェストミンスター神学校の組織神学教授、ジョン・マーレーは次のように述べています。マーレーもまた、改革長老教会の伝統に立つ神学者です。

ジョン・マーレー「一般恩恵論」より

この世界は、神の恩恵によって支えられ、維持されている。
特殊恩恵は、この世界を「舞台」「活動の場」として働くことにより、神の救いの目的を達成して、選ばれた者たちからなるキリストのからだを完成する。

このことから、一般恩恵について、少なくとも、こう説明することができる。

つまり、一般恩恵は、特殊恩恵に対する前提条件となっており、特殊恩恵は一般恩恵を「活動の場」として働く、ということである。

一般恩恵を抜きにしては、特殊恩恵は成り立たない。なぜなら、もし一般恩恵が存在しなければ、特殊恩恵は、建物を作る材料に事欠くことになるからである。

一般恩恵は、特殊恩恵が働く「活動の場」を提供するだけではない。主の聖なる神殿として組み合わされ、建て上げられるところとなる「材料」をも提供するからである。

人間は、神によって保たれ、神からさまざまな賜物を受け、こうして、神によって世界が支えられ、豊かにされ、人間は、さまざまな労働や探求を通して生存できるようにされている。このことが、救いと贖罪の恩恵に対して（人間という）「材料」を提供するのである。

もちろん神は、石ころからでも、アブラハムの子孫を生み出すことができる。しかし、神は、その方法をお取りにならなかった。むしろ事實は、神は、キリストのからだなる教会を、贖わ

れた「人間」たちから作り出される、ということなのである。

■795 一般恩恵・聖霊の照明・理性の光（3）

[山谷](#) - 2005/02/23 09:36 -

下記に引用したようなカルヴァンの考え方に基いて、ホッジの、次のような「一般恩恵の定義」が出てくることになります。

チャールズ・ホッジ『組織神学』における一般恩恵の定義

「一般恩恵とは、真理を聞く者すべてに対して、多く、あるいは少なく与えられる、聖霊による影響である」

「聖霊、すなわち、真理の御霊、聖潔の御霊、あらゆる生命を生かす御霊が、すべての人間の精神に臨み、聖霊が良しとする程度に従って、人間を強いて真理に向かわせ、悪を抑制し、善を行わせ、知恵と力とを分与する。この働きにおいて、聖霊は『望むままに、それ（賜物）を一人一人に分け与える』（コリントー12:11）。これが、神学における一般恩恵の定義である」

※チャールズ・ホッジは、プリンストン神学校の組織神学教授であり、米長老教会の神学的伝統を代表しています。

■794 一般恩恵・聖霊の照明・理性の光（2）

[山谷](#) - 2005/02/23 09:31 -

理性の光と聖霊の照明について、カルヴァンは、続けてさらに、次のように述べています。

カルヴァン『キリスト教綱要』第2編2:15-16（抜粋）

われわれは、異教徒の著作家において、このこと（理性の光）に出くわすごとに、かれらのうちに輝いているおどろくほどの真理の光によって、次のことに注意をうながされる。すなわち、人間の精神は、たといどんなにその完全さから墮落し、よこしまになっているとしても、しかもなお、神の特別な賜物をまとい、これによって整えられているのである。

もし、われわれが神の御霊こそ真理の唯一の源泉だ、ということを考えているならば、神の御霊を侮辱したい人でないかぎり、真理そのものの現われるところ、どこにおいても、これをしりぞけたり・軽んじたりしてはならない。なぜなら、御霊の賜物は、これをあなどり・はずかしめることなしには、けなすことができないからである。

あのような立派な公正さをもって市民的秩序と規律とを後世に残した古代（ギリシャとローマ）の法律家たちに、真理が現われていることを、われわれは否定するのであるか。また、哲学者たちも、自然（の秘密）についての緻密な瞑想において、また精巧な叙述において、盲目であったといえるであろうか。論述の方法を確立し、理性にもとづいて語ることをわれわれに教えた人（異教徒）たちが、理解力をもっていなかったといえるであろうか。医術をつくりあげ、われわれのためにその労をささげた人を狂気だといえるであろうか。数学的な諸問題についてはどうであろうか。われわれはこれを狂人の妄想だといえるであろうか。いな、である。われわれはこれらのことについて古代の人々のあらわした書物を、大いなる讃嘆をもって読まずにはおれない。なぜ讃嘆するかといえば、かれらを非常にすばらしいと認めざるをえないからである。

われわれはこれら（古代の異教徒に与えられた理性の光）が、神の御霊のもっとも卓越した恵

みの賜物であることを忘れてはならない。神は、人類の公共の福祉のために、かれの欲したもう人々にこれをわかち与えたもうのである。

■793 一般恩恵・聖霊の照明・理性の光（1）

[山谷](#) - 2005/02/23 09:27 -

一般恩恵論の範疇において、人間の理性能力と、聖霊の照明とを、先人たちがどのように考えていたか。カルヴァンとホッジの考え方を、ご紹介します。

カルヴァン『キリスト教綱要』第2編2：13-14（抜粋）

その（人間の理性が研究する）努力は何の効果もないほど無益なのではない。

人間は生来「社会的動物」なのであるから、自然的衝動によって、その社会を支え・保つように傾向づけられている。

したがって、われわれはすべての人のたましいのうちに、市民としての公正な秩序についての普遍的な印象が植えつけられているということを認める。

ここから、どの人間集団も「法」によって制約されねばならないことを理解しないもの、また、これらの法の原理を精神のうちに把握しないものは、ひとりも見出されないのである。ここから、すべての民族、また個々人の間に「法」における変わらぬ一致が由来する。

すべての人のうちに、ある種の政治的秩序の種がまかれているという事実は動かせない。そしてこのことは、この世の生活を整えるにさいして、何人も**理性の光**を欠いていないことの大きい証明である。

（理性の）光は、すべての人に生まれながら与えられていて、それは神のいつくしみによって、めいめいに価なしに贈られている神の賜物である。・・・これは不敬虔なものにも無差別に与えられているのであるから、正当に、自然的な賜物の中に数えられている。

■792 Theologiaさまへのレス（追伸）

[山谷](#) - 2005/02/21 23:27 -

そこで、この問題：

「市民的善行を可能にする一般恩恵においても、文化的創造を可能にする一般恩恵の場合と同様、聖霊の何らかの照明的な働きが介在するのかどうか」

・・・を考えて行くにあたっては、『聖霊の神学』を書いているヘンドリクス・ベルコフか、<キリストの贖罪・復活・高挙により、聖霊の働きを通して、キリスト化された世界>を言っているファンルーラーか、あるいは、<キリストの受肉（ケノーシス）によって全人類に与えられた、超自然的実存規定としての一般恩恵>を言うカール・ラーナーか。この方面を読んで、考えてみないとならないのではないかと思います。

これは、刃物のようにとがった峰の上に登山するようなもので、少しでも足がずれると、絶対恩恵の世界に落ちて死ぬか、自然神学の世界に落ちて死ぬか、という話しであろうと想像しています（バルトとブルンナーの「イマゴ・デイ論争」のように）

小生としては、カール・ラーナーの示した解決案が、自然と恩恵の二項対立の図式を「キリストの受肉」において超克しているので、最も有望視している解決案なのですが、まだ、ファンルーラーをまったく読んでいないので、ファンルーラーの「キリスト化された世界」にも、大変関心を持っているところです。

791 Theologiaさまへのレス

山谷 - 2005/02/21 23:09 -

ご指摘のように、一般恩恵と先行的恩恵の境界線について、自分でも曖昧な部分があったかな、と認識しております。

おそらく、議論において、自分の思考が「改革派モード」に入っているときと、「ウェスレアンモード」に入っているときとで、＜境界線＞が右に動いたり、左に動いたりしていたのかもしれない。

改革派の一般恩恵の定義であると、「市民的善行を可能にする一般恩恵」という概念に代表されるように、「墮落し、かつ、救いに選ばれていない人々が、罪のために自滅してしまうことがないように、秩序ある社会生活を送ることを可能にするが、救いを与えはしない、神によって普遍的に与えられる恩恵」という定義になると思います。

この定義での一般恩恵において、きつとなんらかの自由意志というものが想定されることになるはずだと思います。つまり、人をして、自己の良心に基づいて、国家の法に従って生きる選択をすることを可能にさせる意志能力、というような意味での自由意志、ということです。

（それを想定しないと、個々人の人格に基づく法的責任能力というものが、成り立たなくなる可能性があります）

もちろんこれは、キリストによって提供された救いを選び取ることを可能にさせる能力ではありませんから、正確には「限定的自由意志」あるいは「市民的自由意志」とでも呼ぶべきかもしれません。

この場合の市民的自由意志であっても、本人の意識に先立って、つまり、アプリーオリにその能力が与えられて働いているわけですから、「アプリーオリに与えられている」という意味では、聖霊の照明としての先行する恩恵の概念に類似しているのではないかと思います。

カルヴァンの『キリスト教綱要』でも、異教徒の文化的才能を「聖霊の賜物」とであると言っていますが、確か、人間全般の社会的能力・政治的能力についても、御霊の賜物という表現で記述されていたように、記憶しています。

もちろん、これが聖霊の照明の一種類だとしても、救いにまでは導かないわけですから、正確に言えば、**「市民的善行を行うことを可能にするが、救いにまでは導かない、聖霊の照明としての先行的恩恵」**と呼ばなければならないことになるでしょう。

そうすると、（１）**「救いに至らせる先行的恩恵」**としての特殊恩恵と、（２）**「救いには至らせないが、市民的善行を可能にさせる先行的恩恵」**としての一般恩恵と、二種類を考えると可能になるのだらうと思います。

しかし、「先行的恩恵」という用語を「回心に先立って働き、救いに至らせる、聖霊による照明としての恩恵**だけ**を意味する」として、オールド・サルティスの枠組みのみで縛りをかけて、厳密に定義してしまうのであれば、上記のような二種類の先行的恩恵を考える考え方は、出来ないことになります。

そうなりますと、「市民的善行を可能にする先行的恩恵としての一般恩恵」というような概念は、不適切ということになりますから、むしろ、Theologiaさまが神学ブログで指摘されていたような、「創造の秩序としての」一般恩恵、あるいは、「イマゴ・デイの残滓」としての一般恩恵、という表現をすることになるであらうでしょう。

いずれにせよ、この問題は、「市民的善行を可能にする恩恵においても、文化的創造を可能にする恩恵の場合と同様、聖霊の何らかの照明的な働きが存在するかどうか」という、聖霊論の議論に入ってくるのだらうと思います。

□788 訂正

HN - 2005/02/21 21:18 -

>ま、ミレニアムは、ひどい言葉が多すぎるので、
>彼らがいかに善人のごとくふるまっても、私は
>信用しませんが・・・。

ミレニアムも含みますが、「再建主義にはひどい言葉が多すぎるので・・・」に訂正します。

□787 権威

HN - 2005/02/21 21:16 -

ミレニアムHPに以下のように書かれていました。

もしその牧師の言っていることややっていることが間違いであれば、謙遜になって悔い改めを求めるべきだ。
それでも言うことを聞かないならば、平和のうちに出るべきだ。砂をかけて出てはならない。
聖書では、権威に逆らう人間を神の敵として扱っている。

私は、この考え自体は間違っていないと思います。

だったら、福音派の牧師に関して何か呪いごとを言うようなことは控えるべきだと思うのです。

私は富井氏が、日本の福音派に対してあまりにもひどいことを書いているのが気になるところです。

ところで、カトリックの場合はどうなるのでしょうか？

それは聖書的権威ではないから、権威として認めない
といえば、それまでですし、プロテスタントはみなそうだと思いますが、再建主義者はこのやり方を自分以外のすべての権威に当てはめて、キリスト教自体に反逆しそうな気がします。

ま、ミレニアムは、ひどい言葉が多すぎるので、
彼らがいかに善人のごとくふるまっても、私は
信用しませんが・・・。

□786 一般恩恵について

Theologia - 2005/02/21 21:04 -

はじめて書き込みさせていただきます。再建主義に対して組織神学的にしっかりと向き合う働きを見させていただき、感謝します。私はDispensationalistなので政府に関する神学的枠組みについては山谷氏に同意する点が多い者です。

ただ、通常「先行的恩恵」といわれるべきであろう箇所において「一般恩恵」という言葉を使用され、認識論的側面と存在論的側面が区別されることなく語られている点が気になりました。この点に関して「聖書が語る一般恩恵 -その根拠と本質-」というエントリ

(<http://theology.exblog.jp/d2005-02-21>) を書かせていただきました。ウェスレアン・アルミニウス主義にたっておられる山谷氏とは異なる立場からの意見ですが、ご一考いただけますと幸いです。

再建主義に直接関することではなく、申し訳ありません。

<http://theology.exblog.jp/>

■784 再建主義を30秒で終わらせる道

[山谷](#) - 2005/02/21 13:15 -

再建主義者の次の声明：

1. ノンクリスチャンが作り出したものでも、クリスチャンが神の栄光と主権のために用いられれば「聖められる」のである。
2. 要するに、心の問題なのだ。
3. クリスチャンが作ったものでも、ノンクリスチャンが作ったものでも、自分が神の主権を認めて、神の国の国民として行動することによって、すべては聖められる。

これを次のように書き換えるなら：

1. ノンクリスチャンが作り出した「**法律**」でも、クリスチャンが神の栄光と主権のために用いられれば「聖められる」のである。
2. 要するに「**法律を用いる者の心**」の問題なのだ。
3. クリスチャンが作った「**法律**」でも、ノンクリスチャンが作った「**法律**」でも、自分が神の主権を認めて、神の国の国民として「**法を遵守する**」ことによって、すべては聖められる。

上記のような書き換えが可能であるなら、「異教徒オスマントルコ皇帝が定めた国家の公法と言えども、神の絶対主権に由来する以上は、キリスト者は服従せねばならぬ」と述べたカルヴァンは、必ず再建主義にアーメンと言うはずでありましょうし、小生も喜んでそれに唱和いたしましょう。

特に重要なのが、書き換えられた第2項：

<要するに「法律を用いる者の心」の問題なのだ>

この「法律を用いる者の心」が、自然法としての聖書律法が裁判官及び陪審員の良心に示す善悪真偽の法感覚としての「一般的衡平法」(General Equity)であるとするなら、これはもう、『ウェストミンスター信仰告白』の立場そのもの、ということになります。

けれども、こうした書き換えが本当に可能なのであれば、そもそも再建主義は、最初から再建主義という看板を掲げる必要などなかった、ということになります。

つまり、再建主義が再建主義を終わらせてしまったことになるわけです。

■781 ははは・・・

HN - 2005/02/20 22:22 -

惑星「ドミニオン」とは、面白いですネ！

それにしても、四万年後のキリスト教界がどうなっているか、想像もつきません。そのころになると、ヴァンティルやラッシュドゥーニーなどは忘れられているのでは？

それこそ、パウロの言うように「信仰・希望・愛」だけが残っているような世界だったりして。。。

■780 SF的な提案

[山谷](#) - 2005/02/19 11:11 -

再建主義社会としての後千年王国の実現までに、最低でも、あと四万年、長く見積もった場合で数十万年、という膨大な時間がかかるということです。

数万年もの時間が経過すれば、科学技術を（一般恩恵に助けられて）日進月歩させている人類は、亜光速航行（あるいは、ことによったらワープ航行）が可能な宇宙船を開発し、また、他の惑星を地球の環境に準じたものに改造する「惑星改造技術」を完成しているにちがいありません。

そこで提案ですが、数万年後に、なお再建主義を唱え続けている人たちを集めて、恒星間宇宙船に載せ、地球から数十光年あるいは数百光年離れた惑星に移住させ、そこで、聖書律法とコモン・ローだけを使って再建主義社会を建設させたらどうでしょうか。

この目的のために選定された惑星は、「ドミニオン」と名付けるのが適当であるかもしれません。

惑星ドミニオンの社会が、再建主義者が言っているような「理想世界」になったならば、ヴァンティル弁証論的な意味で、聖書啓示の真理性が＜間接的に証明される＞ということになるであります。

このような壮大な実験が可能となる環境が整うまでは、人類が滅亡しないことを願います。

もちろん、「盗人のように来る」と予告しておられた主が、突然来られて、前千年王国論者の期待が正しかったことが＜直接的に証明される＞というような事態は、再建主義者が信じる限りにおいては、絶対に起きないのであります・・・

■779 異端の恐ろしさ

HN - 2005/02/19 01:48 -

やはり異端なんですね、再建主義は。
悪魔的恐ろしさが煮え立っています。
まともではありません。

■778 こんなひどい話は、初めてだ。

HN - 2005/02/19 01:46 -

山谷先生。
興味深く読ませていただきました。

続いてチルトンは、古代ローマ時代のキリスト教迫害者の身の上に起こった不幸を列挙し、現

代の再建主義者は、敵に対して「呪いの祈り」をすることにより、敵を発狂させ、殺害し、盲目にし、目を両眼から飛び出させ、溺死させ、絞殺し、獄死させ、墜落死させ、自殺させ、暗殺させ、病死させ、戦死させるべきである、と言っています。

いやァ、ひどい学者がいたもんだ。
こんなことを言って、クリスチャンと言えるんでしょうかね？
一般の福音派教会で、牧師がこんな説教をしたら、大騒ぎですよ。
「あの牧師は辞めさせよ」となるでしょう。

私は、ゾッとするのを乗り越えて、腹が立ってきました。（笑）

「こんなひどい考えを抱いているから、チルトンは、早死にしたのだ」と思いたくなってきました。

再建主義に立つ教会は、その兄弟の交わりも、ひどいものなんだろうね。

どこの教会にも、それなりに人間関係の問題がありますが、再建主義の教会では、お互い兢兢として日曜日を過ごすことになるかもしれません。

チルトンは、キ●●イです。

こんな指導者には、絶対について行きたくありません。

良識ある大多数の福音的アメリカ人が、こんな馬鹿げた教えについていくとは思えません。

□777 デイヴィッド・チルトンについて（2） [山谷](#) - 2005/02/18 22:32 -

もっと驚かされるのが、チルトンの言う「四万年の後千年王国」です。

神は「主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られる」という申命記の聖句を出発点として、一世代を約40年として計算し、千世代は四万年になるから、後千年王国としての再建主義社会の完成には、最低でも四万年は要する、と言うのです。

もっとも、申命記が記されたのが今から3400年前ですので、それを引きますと、＜再建主義社会＝後千年王国が完成して、主イエス・キリストが御国の嘉納のために再臨されるまでに、最低でもあと、36600年かかる＞ということになります。

つまり、キリスト再臨は、西暦38605年以降ということになるわけですが、チルトンは「四万年は最小限の数字にすぎない。キリストの再臨前に何万年、ことによると何十万年も信仰が前進していく時代が待っている」と言っています。（p.153）

先のログでも触れたことですが、ヴァンティルの前提主義を出発点とする再建主義にとっては、現代文明の繁栄と存続は「聖書啓示の真理性が否定される」ことになるわけですから、再建主義者は必ず「現代文明の滅亡を待望する」ということになるわけです。

残念ながら、ゲイリー・ノースの「Y 2 K問題」による現代文明滅亡は、杞憂に終わったわけですが、しかし、だからといって、再建主義者は、現代文明の滅亡をあきらめたわけではないのです。なんといっても、まだまだ、最低でも四万年、長く見積もると何十万年もの時間が、再建主義社会到来のために残されているのですから！

コンピューター・チップのバグがだめでも、人種間戦争がある。人種間戦争がだめでも、地球

温暖化がある。地球温暖化がだめでも、小惑星の衝突がある。小惑星の衝突がだめでも、地軸の転倒がある。それがだめでも・・・
とにかく、最低四万年、最大でも何十万年の時間のうちに、原因がなんであれ、現代文明が完全崩壊してくれて、その後に、聖書律法とコモン・ローによる再建主義社会が建設されればよいのです。

確かに、あと数年のうちに核戦争が起きて、地球全体が熱死することを待ち望んでいる、狂信的な前千年期王国論者に比べれば、これらからの四万年から何十万年かの間に、何らかの原因で現代文明が崩壊してくれればよい、と、気長に待ち続けている再建主義者の方が、狂信の度合いは薄いのでありましょう・・・

しかし、その間、つまり、何万年もの間、再建主義者は、いったい、何をするつもりなのでしょう？

おそらくは、チルトンの勧めを受けて、再建主義に反対する「敵対者」が悲惨な死を遂げるように、「呪いの祈り」を捧げ続けるのでありましょう。これからの何万年・何十万年にもわたって・・・

これから何万年にもわたってささげられる（と再建主義者が信じているところの）「呪いの祈り」に対して、再建主義を憂慮するキリスト者は、どう対処したらよいのでしょうか。

次の聖書の約束に、抛り頼みましょう。

「キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、『木にかけられる者は、すべてのろわれる』と書いてある。それは、アブラハムの受けた祝福が、イエス・キリストにあって異邦人に及ぶためであり、約束された御霊を、わたしたちが信仰によって受けるためである」（ガラテヤ3:13-14）

それにしましても、再建主義者の聖書解釈を受け入れた場合、あらゆる点で、キリスト教が、今あるキリスト教の在り方とは根本的に異なったものに変質してしまうことは、確かなようです。「赦し」と「愛」のメッセージは、完全に消滅してしまうのです。まさに、キリスト教の革命の変貌です。

■ 776 デイヴィッド・チルトンについて（1）

[山谷](#) - 2005/02/18 22:25 -

再建主義の論客のひとりであり、「解釈学的最大主義」を提唱しているデイヴィッド・チルトンが書いた『複楽園—聖書全体の読解から導き出された聖書の終末論への入門書—』という興味深い本を読んでいます。その、あまりにも混乱した内容に、驚愕させられること、しばしばでした。

まず驚かされたのは、チルトンの「置換神学」です。

神がイスラエルに与えた祝福は、イスラエルが約束のメシアを拒絶したことによって、イスラエルの手を離れ、完全に異邦人へと移行した、しかも、イスラエルに対して紀元70年にく最終的裁き>が執行され、それをもって、イスラエルは完全に神から捨てられた、というのです。（pp.55-58）

すると、いったい、パウロがローマ書で述べている次の言葉は、どうになってしまうのでしょうか？ パウロはこう言っているのです。

「福音について言えば、彼ら（イスラエル）は、あなたがたのゆえに、神の敵とされている

が、選びについて言えば、父祖たちのゆえに、神に愛せられる者である。神の賜物と召しとは、変えられることがない」（ローマ11:28-29）

おそらく、再建主義者は、再建主義社会が到来したら、『改定版新約聖書』を刊行して、上記箇所を「神の賜物と召しとは、紀元70年までは、変えられることがない」と修正するのでありましょう。

次に驚かされるのは、チルトンの言う「教会の礼拝における呪いの務め」です。

神は、教会の指導者に＜呪いの権能＞を授けており、教会は、再建主義に敵対する者たちに対して、聖日の礼拝において「呪いの祈り」をささげなければならない、というのです。

チルトンは、こう言います。「迫害を受けたとき、教会はまず第一に礼拝において反応を示し、それについて祈るべきです。個人、家庭はもちろんのこと、教会の秩序ある集合礼拝の中でも祈らねばなりません。教会の役員は裁きをもたらす権能を神から付与されているからです。当然ですが、教会は神の敵に対する裁きを求める＜呪いの詩篇＞を歌ったり祈ったりする正統的な慣習に戻るべきなのです。教会の役員は迫害者に宣告を下すべきであり、信徒はそれに続いて迫害者が悔い改めるか、もしくは滅ぼされるように忠実な祈りを捧げなければなりません」（pp.148-149）

続いてチルトンは、古代ローマ時代のキリスト教迫害者の身の上に起こった不幸を列挙し、現代の再建主義者は、敵に対して「呪いの祈り」をすることにより、敵を発狂させ、殺害し、盲目にし、目を両眼から飛び出させ、溺死させ、絞殺し、獄死させ、墜落死させ、自殺させ、暗殺させ、病死させ、戦死させるべきである、と言っています。

このチルトンの勧めの通りに、再建主義者が敵に「呪いの祈り」をしているのであるとしたら、当然、小生なども、その対象とされているのかもしれませんが・・・ますますゾッとさせられる話です。

しかし、いったい、再建主義者は、次のようなパウロの言葉を、どう受け止めているのでしょうか？

「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない」（ローマ12:14）

おそらく、再建主義社会で発行される『改定版新約聖書』では、上記の節は「あなたがたを迫害する者を呪いなさい。呪うのであって、祝福してはならない」と書き換えられることになるのでありましょう。

■773 最近ぞっとすること

[山谷](#) - 2005/02/17 23:19 -

ついさっき

>そのような「文明の崩壊」と「暗黒時代」を経なければ「後千年王国」が実現しないというのであれば、それは、悲観的前千年王国説よりも、もっと人生に希望が持てない、「最も悲観的な世界観」ということになるのではないのでしょうか・・・

・・・と、書いたばかりなのですが、再建主義者が待望する「現代文明の崩壊」と、崩壊後の「再建主義社会の建設」を、コーネリアス・ヴァンティルの前提主義の弁証論と合わせて考えると、思わず背筋がぞっとしてしまうのです。

ヴァンティルの弁証論は、理性否定から出発しているので、神・世界・霊魂・啓示について、理性能力で直接的に証明するのは不可能である、という「前提」に立って「前提」をしています。

そこで、どちらもその内容の真偽について理性による直接的証明が不可能なく聖書的社会システム>とく非聖書的社会システム>とを用意して、どちらが社会システムとして上手く作動するかを客観的に観測し、その観測結果で優位となった方を「真」とする、という、間接的証明方法を採用わけです。

このヴァンティルの弁証論が再建主義と合体しますと、こういうことになります。

<非聖書的社会システム>としての現代文明が、上手く機能して繁栄すると、聖書啓示の真理性が「偽」であることが、間接的に証明されることになってしまう。

そこで、聖書啓示の真理性が「真」となるためには、<非聖書的社会システム>としての現代文明は、必ず崩壊し滅亡しなければならない、ということになる。

ゲイリー・ノースの「Y2K問題」や、ウィルキンス牧師の「人種間戦争」による「現代文明崩壊待望論」は、ヴァンティルの弁証論の構造の欠陥に宿命的に由来しているものではないか、と思われるのです。（「人種間戦争」によって世界が滅亡し、その後、聖書に基づいた社会が再建されるというシナリオは、アメリカのキリスト教極右武装団体「ミリシア」が<教典>とする『ターナーの書』のあらすじと酷似しており、そこがまた、ぞっとさせられるところであるわけなのですが）

そうであればこそ、なぜ、再建主義者が「現代文明全般」にあれほどの敵意を抱くのか、わかるような気がします。現代文明が社会システムとして少しでも上手く機能してしまうと、それによって、<聖書啓示の真理性>が「偽」と判定されることになってしまうのです。

小生などは、「現代文明の社会システムは、キリストの王権的・頭首権的支配に従属する天使的秩序によって統治されているので、システムとして上手く機能するのは、当然である。上手く機能する現代文明の社会システムは、ほかならぬ、キリストの王権的支配の栄光を現している。しかし、中間的エージェントとしての天使的秩序は、ときに反逆して悪鬼化することがあるから、ナチスやポルポトのような悲惨な事態も起こり得る」と見ています。ですので、別に、現代文明が立つか倒れるかで、聖書の真偽が判定される、などとは、思ってもみないわけなのですが・・・

771 最近思うこと

[山谷](#) - 2005/02/17 22:44 -

コモン・ロー的再建主義の主張を考えてみるにつけても、思うことは、再建主義者は、本当に、再建主義社会が到来することを信じているのだろうか、ということです。

現代社会は巨大な複雑なシステムです。統治システムの中の「司法」のセクターだけを見ても、非常に複雑に入り組んだ構造になっており、細かく専門領域に分化されているわけです。

これを、再建主義者は、聖書律法とコモン・ローだけで、ゼロから全部再構築するのだ、と言う・・・

それが本当に実現可能なことなのかどうか、このところいつも考えているのですが、どう考えても、これは無理なのではないかという思いを深くしつつあります。

たとえば、警察官職務規定について、労働組合について、道路交通法について、食品添加物規制法について、排他的経済水域を規定する国際法について、地球温暖化防止に関する京都議定書について・・・などなど。

そのひとつひとつを、聖書律法とコモン・ローで決疑論的に思考してゼロから作り上げることが、いったい出来るのだろうか？

どう考えても無理なのです。

そうしますと、思い出されるのが、「聖書に書いていないことは、すべて自由である」という再建主義者の言葉です。

もしかして、これには、「聖書に書いていないことについて、法律を作るのは、自由である」ということも、暗黙のうちに含まれているのだろうか・・・

もし必要に応じて、聖書に関わりなく、自由に法律を作ることが出来るのだとしたら、どうでしょう。

もちろん、自由に法律を作ると言っても、なんでも自由であるわけがなく、『ウェストミンスター信仰告白』が述べるように、自然法としての聖書律法が示す善悪真偽の法感覚に根拠したく一般衡平法（General Equity）によって、国家の公法も国際法も批判され、制限されることになるわけですが。

そういう常識的前提があった上で、「聖書に書いていないことについて、法律を作るのは、自由である」と再建主義者が考えているのであれば、再建主義者が再建主義社会を実現し得る可能性は、少しはある、ということになるであらうでしょう。

しかし、「聖書に書いていないことについては、すべて自由であるが、聖書に書いていないことについて法律を作るのは、絶対禁止である」と再建主義者が考えているのであれば、再建主義社会が実現する可能性は、ほぼゼロであると断定しても、さしつかえないであらうと思っています。

もちろん、ゲイリー・ノースの「外れた予言」のごとく、コンピューターチップの誤動作で世界各地の核ミサイルが誤発射され、現代文明が完全に崩壊して、技術文明が廃れ、蛮族の跋扈する暗黒時代が到来するのであれば、聖書律法とコモン・ローだけで、ゼロから社会を作ることとは、可能であらうと思うのです。

しかし、そのような「文明の崩壊」と「暗黒時代」を経なければ「後千年王国」が実現しないというのであれば、それは、悲観的前千年王国説よりも、もっと人生に希望が持てない、「最も悲観的な世界観」ということになるのではないのでしょうか。

769 再建主義政権もまた・・・

HN - 2005/02/17 01:45 -

ミレニアム掲示板には次のように書いてありました。

スターリンに粛清された「同志」たちは、自分たちが始めた運動が誰かほかのものに乗っ取られて、あらぬ方向に引っ張られていくのをただ指をくわえて見ているほかはなかった。

晩年にスターリンによって軟禁状態に置かれていたレーニンは次のように述べた。

「我々が期待するとおりに国は機能していない。...人間が運転席に座って動かしているように見えるのだが、クルマは彼の期待する方向に動かない。何か別の力が動かしているのだ。」
(<http://tak0719.hp.infoseek.co.jp/qanda2/17K4pyO9hPXE44812.htm>)

再建主義政権が誕生しても、結局は、スターリン時代のソ連邦と大差ない結末を迎えるだろうと思います。

山谷先生の解説を読んでおりますと、もう・・・
再建主義は、狂気の沙汰ですね。

私も、ノンクリスチャンのように「くわばら、くわばら」と唱えたくくなります。(笑)

■768 明るく前向きに生きられる終末論？(2)

[山谷](#) - 2005/02/14 00:24 -

これを実行しますと、成功する人は、どんどんお金持ちになり、失敗する人は、とことんまで貧乏になって行きます。社会が貧困層と富裕層に二極分解することになるわけです。

ですが、困窮層となった人たちは、社会的に見捨てられるわけではなく、再建主義社会における唯一の税制である<十分の一税>によって、教会が救貧院を運営して、そこで必要な手当てを受けることになります。

忘れてならない点は、再建主義者は、「キリスト者は神の祝福を受けているのだから、必ず成功して、富裕になるはずである」という<繁栄の福音>を信奉していることです。

再建主義社会においては、神の祝福を受けた人は、富裕になり、それによって、自分で医療費を全額負担し、介護も全額負担し、教育もすべて自前で・つまり・ホームスクーリングによって、行います。それを可能に出来るだけの「富」を神から与えられているからです。

そのように信じている再建主義者にとって、自分が困窮して、その結果、教会の救貧院の世話を受けることは、「神から見放された」ことを意味することになります。

一方、どんなに貧困層が生活に窮しようとも、富裕層にとっては、ただ、十分の一税を納めるという義務が存在するだけです。神から与えられた「富」を社会に公平に再分配するなどというチェスタートンの教義は、「悪魔的人本主義」ということになります。

このような再建主義社会では、富裕層だけが神の祝福を楽しみ、困窮層は神の祝福を受け損ねている、と見なされることになる・・・。19世紀の資本主義的・カルヴァン主義的・社会ダーウィニズム的社会観の再来です。

さらに悪いことに、再建主義社会が経済への諸規制を全廃してしまう結果として、長時間労働、劣悪な職場環境、工場廃水・排煙による環境汚染と自然破壊、無規制の食品添加物による健康被害など、19世紀的な無数の「公害」が再び社会に蔓延することになります。再建主義社会は、そうした前々世紀の遺物をも、再建してくれることになります。

公害が蔓延すると、富裕層は、汚染の影響の少ない、偏西風が吹く方向に対する風上に高級住

宅地を構え、困窮層は、汚染の影響をもろにかぶることになる、偏西風が吹く方向に対する風下のスラム街に押し込められることとなります。こうして、都市の姿もまた、19世紀に逆戻りすることになります。

当然、貧困層からは、文句が出るでしょう。「政府が対策を取るべきだ！」と。

しかし、再建主義社会の政府は、刑法犯を逮捕して処罰することだけが、唯一の仕事なのです。政府は言うでしょう。「わたしは救済者ではありません。問題は、自力で解決してください」

そうすると、貧困層は、富裕層に文句を言うでしょう。「神の祝福を受けている富裕層が、ノーブル・オブライジュ（高貴な者の社会的責務）を果たして、パターンリズムの諸活動を行うべきだ」と。

しかし、再建主義社会の富裕層は言うでしょう。「わたしは十分の一税をきちんと払っている。問題があるなら、教会の運営する救貧院に行けばいい」。

そのような社会で生きる覚悟を、再建主義者は本当に決めているのでしょうか？

□767 明るく前向きに生きられる終末論？（1）

[山谷](#) - 2005/02/14 00:24 -

再建主義の描く「社会の青写真」が、本当に「明るく前向きに生きられる」ものであるならば、再建主義者はそれを本当に生きることが可能かどうか、そして、それを本当に生きる覚悟が自分にあるのかどうかを、自ら示さなければならないではありませんか？

再建主義社会においては、国家は、聖書律法に基づいて刑罰を与えるだけの存在です。再建主義セオリーでは「国家は救済者となってはならない」という鉄則がありますから、公的な社会保障制度や医療制度、社会福祉、介護保険、学校教育などは「全廃」されることになります。すべては個人の自助努力によるのです。

これら「社会のセーフティーネット」を全廃する結果、政府は、司法と国防以外には、お金を必要としなくなります。ですから、所得税と相続税は、廃止されることになります。この「所得税と相続税の廃止」こそが、再建主義思潮がアメリカにおいて富裕階級にアピールする、主要な理由でありましょう。

再建主義セオリーのもうひとつの鉄則は、「政府の経済不介入」の原則です。

もちろん、聖書律法には、不正な秤を使用してはならない・利子を取って貸してはならない・土地は一定期間を経たら最初の所有者に返却しなければならない・生産物の一部は無償で困窮者に提供しなければならない、などなど、「聖書の経済規制条例」が、いくついくつも存在しています。しかし、これらはほとんどすべて、再建主義思想家たちの「決疑論的思考」によって骨抜きにされ、彼らの結論としては、「聖書律法には経済規制は存在しない」ということにされてしまっています。つまり、聖書は利子を禁止しているにもかかわらず、再建主義社会では、利子を取って貸してもよいことになっている（！）これによって、国際金融システムは救済されることになるわけですが、聖書が禁じている利子が、なぜ再建主義アジェンダでは許可になるのか？ このあたりは、高度な国際金融商品「デリバティブ取引」が使っている超高等数学のように、常人の理解を超えています。

こうして、とにもかくにも、再建主義社会では、人は、一切の制約なく自由に経済活動を行うことが出来るようになります。

そうしますと、再建主義社会の特徴は、（１）社会的セーフティーネットの廃止、（２）所得税と相続税の廃止、（３）制約のない自由な経済活動、ということになります。

766 コモン・ロー再建主義とブリテッシュ・イスラエル主義

[山谷](#) - 2005/02/12 22:33 -

「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」というラッシュドゥーニーの発言を読みますと、もしかしたら、ラッシュドゥーニーは「ブリテッシュ・イスラエル主義者なのか？」と勘繰ってしまいます。

ブリティッシュ・イスラエル主義とは、「イギリス人がイスラエルの十部族の子孫である」と考える立場、あるいは、「本当のイスラエルはブリテン島に存在したのであり、スコットランドのエジンバラがエルサレムであり、聖書の出来事はすべてブリテン島で起きたが、その住民はローマ皇帝によってパレスチナに強制移住させられ、歴史が書き換えられた」と考える立場です。アメリカとイギリスの一部の超保守的・右翼的なキリスト者の中に信奉者が存在します。

ラッシュドゥーニーはブリテッシュ・イスラエル主義者であった、と考えるなら、「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」という発言も、容易に納得が行くのですが、しかし、ラッシュドゥーニーは、ブリテッシュ・イスラエル主義者ではありませんでした。それどころか、『世界の歴史 イスラムと西部開拓時代についての研究』と題する講演の中でラッシュドゥーニーは、「ブリテッシュ・イスラエル主義は神話に過ぎず、まじめな学者の中でそれを信じる者はだれもおらず、それは、救いが恵みによるものでなく、人種によるものであると主張するゆえに、とんでもない冒涔である」と、言葉をきわめて批判しています。

しかし、ゲイリー・ノースは『聖書経済学綱要』の中で、ラッシュドゥーニーが、ブリテッシュ・イスラエル主義者のカーティス・C・エウイングの著書から教えを受け、また、そこから、安息日の構造の概念を自著『聖書律法綱要』で引用している、と述べています。ノースによれば、エウイングはラッシュドゥーニーやノースの講演会にときどき出席し、また、エウイングもラッシュドゥーニーも、旧約律法食物禁忌規定を厳守していた、ということです。

そうしますと、ラッシュドゥーニーは、ブリテッシュ・イスラエル主義者と交流があり、一部にその思想的影響が見られるものの、ブリテッシュ・イスラエル主義そのものについては否定していた、ということになるであらうでしょう。

この点は、日本の「日ユ同祖論的再建主義」と、ラッシュドゥーニーの「コモン・ロー再建主義」が、根本的に異なる点です。

764 コモン・ロー再建主義

[山谷](#) - 2005/02/12 21:47 -

ラッシュドゥーニーやゲイリー・ノースの立場は、キリスト教再建主義と言うよりは、「コモン・ロー再建主義」とでも呼んだ方が、よいのかもしれませんが。

再建主義は、悪魔的な人本主義の「自然法」に徹底的に反対するわけですが、どうやら、この自然法というのは、＜ローマ法、大陸法、議会法、成文法＞のことを指しているようです。

そうして、小生などはごく常識的に、イギリスのコモン・ローもまた自然法のカテゴリーに入るのだろうと考えていたわけなのですが、どうやら、再建主義者にとっては、イギリスのコモ

ン・ローは「自然法ではない」ということのようなのです（！）

このことを、どう考えたらよいか、とまどっています、たぶん、ケースごとに過去の判例に照らして決疑論的に思考し、新たな判例を生み出すという「判例法」の法理が、ユダヤの律法学者の方法・つまり・タルムードの方法であるゆえに、（１）タルムードの方法は聖書的方法であり、（２）イギリスのコモン・ローはタルムードの方法と類似しているゆえに、（３）コモン・ローは聖書的方法である、ということになり、こうして、再建主義者の言う「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」という表現になるのでありましょう。

さて、問題は、再建主義者が、現代国家の成文法に対して、どの程度まで反対するのか、ということです。ある部分の成文法に反対するのか、それとも、すべての成文法に反対するのか？

すべての成文法に反対すると言うのであれば、それは、最右翼コモン・ロー再建主義、あるいは、エクストリーム・コモン・ロー再建主義、ということになるのでありましょう。

コモン・ローがく生き残った＜数少ない国家であるイギリスにおいてすら、全国的な法の統一と法の支配の確立のためには議会法を制定しなければならませんでしたし、また、コモン・ローの不足を補うために衡平法を導入しなければならませんでしたし、商法や海事法の領域では、大陸諸国家と「渡り合う」ためには、大陸諸国家の法であるローマ法を摂取して使用せざるを得ませんでした。

つまり、コモン・ロー国家であったイギリスですら、国家をうまく運営するためには、コモン・ローだけでは、やって行けなかったのです。

再建主義者が、すべての成文法を＜人本主義の法、非聖書的方法、悪魔の法＞であると非難するならば、来るべき再建主義社会では、あらゆる成文法を廃止して、聖書律法とコモン・ローのみによって、統治システムを一から再構成しなければならないことになります。

そのような社会を想像するのも難しいですが、おそらくは、コモン・ローを補う衡平法やローマ法や議会法を導入する以前のイギリス、つまり、中世のイギリスのような法制度に逆戻りする、というイメージになるのかもしれませんが。

それで果たして、車を支障なく道路の上を走らせることが出来るのかどうか。店で売っている栄養ドリンクに水銀が入っているというような事態にならずに済むのかどうか。3歳から5歳の子どもが危険な作業現場で長時間労働させられるという状況にならずにすむのかどうか。考え始めれば、あれこれと心配が付きません。再建主義社会は、自由放任主義の19世紀のイギリスのような「悲惨」を、聖書律法とコモン・ローだけで完全に回避できる自信が、あるのでしょうか・・・

それとも、「再建コモン・ロー裁判所」は、19世紀以降形成されてきた近現代国家の諸成文法を、「過去の判例」として使用するつもりなののでしょうか？

□763 細かい詰め

HB - 2005/02/11 07:13 -

細かい条文の詰め、法律文の詰めなどに慣れていない私などは大した事ではないと考えてしまうのですがね。

宣言と宣告は大違いだあ。

□762 異端宣言

HB - 2005/02/11 06:55 -

>756、ただのおじさん

確かにあの団体、あの主義は異端だ。権威あるところが宣言したのだからと言ってしまうのは楽ですよ。でもエホバの証人にしても見習ってもいいところもあるわけでしょう。（熱心な家庭訪問伝道とか信者同士仲がいいところなど）

再建主義にしてもいいところは取り入れたらいいと思うのですがね。一神教団体でこれを言っちゃあだめか。

□761 「コモン・ロー運動」なるもの（2）

[山谷](#) - 2005/02/10 22:32 -

このミリシアの動きを見てみますと、「コモン・ロー運動」というのは、アメリカ南部の農場地帯の中でも、とりわけ南部の伝統的価値観を重視し、連邦政府による規制や統制を非常に嫌う人たちで、その中でもさらに右翼的な人たちによって、支持されているようです。

「コモン・ロー運動」は、（1）自分を「自由人」と宣言し、（2）自由人であるゆえに、コモン・ローの下でのみ裁かれることを要求し、（3）それゆえ、コモン・ローに対立する法理論である衡平法と成文法を「ローマ法、大陸法、非聖書的法」として拒否し、（4）衡平法と成文法によるあらゆる法的規制と裁判制度に反対し、（5）その具体的行動として、納税拒否・地下銀行設立・車のナンバープレートの撤去・社会保障制度からの離脱・IDカードの破棄などを行っています。

ところで・・・

「本来の合衆国はコモン・ローによって治められていた」というラッシュドゥーニー。

「合衆国憲法は途中で理神論の陰謀結社によって奪取され、改変された」というゲイリー・ノース。

「アメリカ南部は、地上におけるキリスト教文明の最後の牙城である」とする再建主義者全般の立場。

「政府を縮小し、所得税と相続税を廃止し、聖書に記載されていない事柄はすべて完全自由化せよ」という再建主義アジェンダ。

・・・これらを重ね合わせて見ますと、キリスト教右翼／再建主義の思潮における「コモン・ロー」の位置づけが見えてくる気がします。

「現代社会の統治システムに聖書律法を適用せよ」という再建主義の主張は、結局のところ、「わたしたちは、連邦議会が制定した成文法や衡平法には従いたくない。わたしたちは自由になりたい」という反連邦主義の主張と直結しているわけです。

再建主義者の言う「法の支配の下での秩序と自由」とは、率直に言ってしまうと、「わたしたちは、成文法による＜司法専制政治＞の下で様々な規制を受けて来たが、もうたくさんだ。成文法から解放してくれるコモン・ローと聖書律法の下でなら、自分のやりたいことが自由に出来るようになる」ということなのであります。

果たしてこれは、再建主義者の言うような、本当の＜法と秩序＞への道なのでしょうか。それとも、全く正反対の＜無法と無秩序＞への道なのでしょうか。

IDカードを破棄し、社会保障番号を抹消し、車のナンバープレートを撤去し、所得税と相続税

の納税を拒否し、地下銀行を「コモン・ロー銀行」として合法化し、ウィンチェスター銃から突撃銃まであらゆる火器を制限なく携行できる「再建主義社会」。たしかにそれは「自由」な社会なのでありましょう・・・。

■759 「コモン・ロー運動」なるもの(1)

[山谷](#) - 2005/02/10 22:21 -

「米国南部は地上におけるキリスト教文明の最後の牙城である」と信じるキリスト教右翼の中には、憲法修正条項が保障する「人民武装権」に基き、ライフル銃はおろか重火器まで装備して日夜軍事訓練に励んでいる「ミリシア」（私兵組織）が存在します。

このミリシアの中に「コモン・ロー運動」を推進するグループが存在することを、「ミリシア・ウォッチング・サイト」が報告しています。

「コモン・ロー運動」を掲げるミリシアは、おおむね、次の主張をしています。

(1) 合衆国の統治システムは本来、コモン・ロー（不文法・判例法）によるものであった。

(2) しかし、＜ユニテリアン＝理神論＝人本主義の陰謀結社＞（フリーメーソン・イルミナティ・スカルアンドボーンズ）に結託した法曹界が「改変作業」を進め、その結果、合衆国の統治システムは、コモン・ローによるものから、衡平法と成文法（ローマ法由来の大陸法＝議会法）によるものに、変えられてしまった。この改変を仕上げたのが、合衆国憲法修正条項第13条及び第14条である。

(3) しかし、コモン・ローによる統治システムは、依然として合衆国本来の法制度として「隠れて」存在し続けている。ただ国民は、それが今も法的に有効であることを知らされていない。

(4) それゆえ、国民は「自由人」として、民事裁判のみならず、刑事裁判を含むあらゆる裁判について、「コモン・ロー裁判所」に訴えることができる「生得の権利」を有している。

ご存知のように現在の米国では、民事だけがコモン・ローで裁かれ、それ以外は衡平法と成文法によって裁かれているわけです。

「コモン・ロー運動」は、その特異な陰謀史観によって、＜合衆国は本来の姿から逸脱し、成文法による「司法専制国家」になってしまった＞と捉え、個人が「自由人」たることを宣言して、民事のみならず、すべての裁判を「コモン・ロー裁判所」に移すよう申し立てることこそ、「本来の合衆国を再建するための戦い」であるとしています。

実際、交通違反、軽犯罪、地下銀行設立、納税拒否などで地方裁判所の法廷に立たされた被告が、自分を「自由人」あるいは「至高の米国民」とであると宣言して、裁判を「コモン・ロー裁判所」に移すよう要求する、という奇妙な事態が、少数ながらも、南部の農村地帯を中心に続いて起きています。

テキサス州で起きた事例では、被告が法廷で「テキサス州のコモン・ロー裁判所に裁判を移すことを要求する」と申し立てたため、裁判所側が「テキサス州は1846年の州政府成立以来、コモン・ロー裁判所なるものは存在したことがない」と宣言しました。すると被告は今度は「合衆国最高コモン・ロー裁判所に裁判を移すことを要求する」と申し立てました。この「合衆国コモン・ロー裁判所に裁判を移せ」という要求スタイルは、その後、他州にも広がっているということです。

もちろん、合衆国コモン・ロー裁判所などというものは、建国以来一度も実在したことがないわけなのですが・・・。

■756 再建主義は異端である！

ただのおじさん - 2005/02/10 20:02 -

再建主義は異端宣告されたのです。異端に良いところがあるというならば、他の異端にだって良いところがあると言わねばなりません。

■755 イギリスのコモン・ローは聖書律法である！？

[山谷](#) - 2005/02/10 13:25 -

小論「再建主義社会に生きる？」において小生は

- (1) 再建主義社会はコモン・ローなしには無法・無秩序に陥る危険性があるから、コモン・ローを併用せざるを得ない。
- (2) そのコモン・ローは一般恩恵であり自然法である。
- (3) よって、再建主義社会は、再建主義者が言うような再建主義社会にはなり得ない。

・・・というジレンマを指摘したわけです。

ところが、ラッシュドゥーニーは、ちゃんと「逃げ道」を用意しておいたようです。

プロテスタント改革派教会の神学雑誌『コントラ・ムンドゥム』第13号（1994年秋号）に掲載されたインタビュー記事において、再建主義の父ジョン・ルーサス・ラッシュドゥーニーは、次のように述べています：

「ユージン・ローゼンストック・フュッシーが言うように、**イギリスのコモン・ローは単純に聖書律法なのです**。付加された部分もありますが、基本的には、**コモン・ローは聖書律法なのです**」

まったく驚くべきことですが、「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」というのです（！）

ラッシュドゥーニーがここで引用しているのは、ドイツ系ユダヤ人でプロテスタントのキリスト者であった法学者ユージン・ローゼンストック・フュッシーです。ナチスを逃れてアメリカに移り、ハーバード大学で教鞭を取り、平和部隊構想の原案をルーズベルト大統領政権のもとで練ったこともあるフュッシーですが、いったい、フュッシーがどのような文献のどのような文脈で「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」と言っているのか・・・

普通、イギリスのコモン・ローは「自然法」と考えられているわけです。だから、再建主義社会がコモン・ローを併用するなら、再建主義社会は再建主義社会ではなくなる、というのが、小生の主張であったのです。

ところが、ラッシュドゥーニーが言うように、「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」ということになってしまえば、たとえ再建主義社会がコモン・ローを併用しても、再建主義社会は再建主義社会であることが可能になるわけです（！）

こうなると、「イギリスのコモン・ローは自然法であるのか、ないのか」「イギリスのコモン・ローは聖書律法であるのか、ないのか」という議論になってきます。

もちろん、「コモン・ロー完全イクオール聖書律法」という話しにはならないわけで、おそらくは、＜旧約律法をケースごとに決疑論的に適用して判例を作り、判例法を形成して行くという、タルムード的方法＞と＜過去の判例をケースごとに決疑論的に適用して新たな判例を作り、判例法を形成して行くという、コモン・ロー的方法＞との間に、類似性があるのか・歴史的直接的つながりがあるのか・同一性があるのか、というような議論になるのでありましょう。

もっとも、カルヴァンは「自然法を明瞭に記述したのが聖書律法である」と言っており、大陸系改革派信条にも「神の指にて記された自然法と聖書律法」と言われているわけですから、それを受け容れるのであれば、イギリスのコモン・ローが自然法であってしかもそれが聖書律法であるとしても、矛盾はないことになるわけですが。

それにしても、「イギリスのコモン・ローは聖書律法である」という命題を、英米法史において証明することが、可能なのでしょうか？ また新たな悩みの種が生まれたようです。

■753 これも分かり易いのですが

HB - 2005/02/10 10:52 -

山谷さんのまとめ方のうまさには日頃から敬服しております。
でも再建主義については悪いところばかり強調し過ぎているのではないのでしょうか。

富井氏の「質疑応答エッセイ集 10」より

明るく前向きに生きられる終末論はどっち？

<http://tak0719.hp.infoseek.co.jp/qanda3/77n7Eq0CMOBc10808.htm>

今、日本のキリスト教界において、ポスト・ミレを大胆に主張している教会は少ない。

しかし、数が少ないからといって、それが間違いであるということにはならない。

■752 「再建主義社会に生きる？」

HN - 2005/02/09 01:41 -

(12) 段落の展開は、面白かったです。

結局そういう循環になる・・・

再建主義は、「どうにもならない教」ですね。

最後は、「西部劇のような社会」になってしまいますね。

その日のために、「早撃ち」の練習に励まなくては。(笑)

■751 再建主義社会に生きる？

[山谷](#) - 2005/02/09 00:50 -

再建主義社会が本当に実現し、旧約律法が現代社会に適用された場合、裁判制度はどのように変わるのでしょうか？ そして、その結果、社会は本当に、今よりも秩序ある安全な社会になるのでしょうか？

S F 的な思考シミュレーションをしました。お読みくだされば幸いです。

「再建主義社会に生きる？」

■750 読みました！

HN - 2005/02/08 23:33 -

「姦通の女の問題」を読みました！
ありがとうございます。

■749 姦通の女の問題

山谷 - 2005/02/08 23:08 -

ヨハネによる福音書8:1-11の「姦通の女」の記事についての論考をアップしましたので、お読みくだされば幸いです。

「姦通の女の問題」

■748 再建主義社会は幻想

HN - 2005/02/08 01:37 -

再建主義は、セクトとしては成り立つとしても、「再建主義社会」の実現は到底不可能と思います。

この圧倒的な世俗の力が、再建主義社会の実現を永久に拒否し続けるでしょう。

むしろ、処女降誕とか復活といった根本的な教義を、一般のアメリカ人がどれくらい本気で信じているか、ということのほうが問題かもしれません。

アンケートや統計では、いかにもキリスト教の教義を本気で信じている人が圧倒的に多いような印象を受けますが、ほんとうにそうでしょうか？

うちの牧師が「アメリカはクリスチャンの国だといわれているが、本当のクリスチャンは、どこの国でも少数です。日本のクリスチャン人口の割合と同じだと考えてもいいくらいだ」といっていました。

まして、そこへピューリタンの再建主義社会など、成り立つはずがありません。

もし再建主義社会が実現したとしても、宗教的な独裁政権が誕生してしまい、イランのようになるだけだと思います。

さらに、周辺国との戦争が絶えなくなると思いますね。

■747 再建主義社会は無法社会となる

山谷 - 2005/02/07 22:53 -

社会に秩序を確立するのは再建主義しかない、というのが、再建主義側の売り言葉であるわけです。

しかし、再建主義というのは、「旧約の司法律法を現代社会の統治システムに決疑論的に適用するが、司法律法が命じていないことについては、すべて自由化する」というアジェンダを掲げているわけです。

さて、現代社会は、自然法に淵源を持つ実定法によって、一般人の武装を禁止し、人身売買と奴隷制度を禁止し、麻薬の使用と取引を禁止し、ドメスティック・バイオレンスや児童虐待を処罰することにより、社会の秩序を維持しているわけです。

果たして、再建主義社会が到来した場合、現行社会の統治システムが行っている上記のような法的禁止を、純粹に旧約の司法律法だけから決疑論的に導き出して、実施することが可能なのでしょうか？

旧約の司法律法は、一般人の武装を容認しており、人身売買と奴隷制度を容認しており、聖書はアルコール以外の麻薬物質の存在には触れておらず、家庭内の暴力の行使には介入せず、むしろ、鞭を使って叩くことを容認しており、さらには、矯正不能な非行児童を処刑するようにと命じています。

再建主義者が言うように、「聖書で命じられていないことは、すべて自由である」のであれば、到来する再建主義社会では、一般人が何らの制限なく武器を携行し、人身売買が公然と行われ、麻薬の所持や使用や取引が問題とならず、家庭内の暴力の行使に公権力が介入や抑制をしない、という事態になるのではありませんか？

そうしますと、再建主義社会が実現した場合には、現行の社会の制度や秩序と比較して見て、明らかに再建主義社会は「無法と無秩序の社会」となる、と言えるのです。

746 HBさまへ

山谷 - 2005/02/07 12:05 -

新約聖書神学の時間論であるくすでに・しかし・いまだ>という「中間時の時制」を、契約神学的再建主義の立場から表現すると、「法的千年王国と实际的千年王国」というパラダイムになるのでありましょう。

さて、問題は、再建主義思潮では「旧約の司法律法は廃棄されていない」という立場に固執していることです。

ここから、「神の国を実現するためには、クリスチャンは旧約の司法律法を現代社会の統治システムに決疑論的に適用しなければならない」という再建主義アジェンダへと進むことになり、その結果として、堕胎者の公開処刑などという、恐ろしげなことになってくるわけです。

通常のカリクリス脱教神学では、「旧約の司法律法は廃棄されている」という立場ですから、再建主義のような結論にはなり得ないのです。

では、通常のカリクリス脱教神学は、どう考えるのでしょうか？

「神の国は、クリスチャンが聖化されて、その結果として、愛の奉仕を隣人に対して行うことにより、漸進的に実現されて行く」と考えるのです。それゆえに、カリクリス脱教会は、カリクリス脱の愛に基く他者への差別のない奉仕を行うことを、ミッションとして来たわけです（そのミッションを完全に達成できているわけではありませんが）

こうして、再建主義が目指す「神の国の実現」と、カリクリス脱教会が目指す「神の国の実現」は、まったく異質のものとなってくるのです。

前者は、律法に基づいて、公開処刑を実施し、公的福祉と医療と教育を完全に廃止し、所得税と相続税を廃止して、富裕層のみを優遇することにより。後者は、カリクリス脱の愛に基いて、受刑者を教誨し、公的福祉と医療と教育を推進し、所得税と相続税を累進課税することにより、困窮層を助け支えることにより。

「神の国」を希求しつつも、両者のアジェンダは、完全に異なっているのです。

745 日本人に分かりやすい解説

HB - 2005/02/07 06:54 -

富井氏のコラム
これなど分かりやすいのですがね。

<http://tak0719.hp.infoseek.co.jp/qanda3/59E5E11U222Mk44782.htm>

■744 ゲイリー・ノースの二律背反 [山谷](#) - 2005/02/06 22:34 -

ヴァンティルの弁証学は、その出発点を「神の三つの位格は、一つの位格である」という定式による<理性否定>に置いているために、その弁証学体系の最後の最後まで、「二律背反」がついてまわる、という展開になっています。

そうして、その前提主義に立って再建主義を説くゲイリー・ノースもまた、常に「二律背反」がついてまわる、という展開を余儀なくされています。

この「二律背反」が典型的に現れているのが、ノースの「律法論」です。

ノースは「人は律法に従うと祝福される」と言いつつも、「人は律法に従うと呪われる」と言っています。ノースは、<後千年紀王国論>の文脈で<再建主義社会>を提唱しているがために、不可避免的に、二律背反と理性否定へと、追い込まれてしまっているのです。

以下に、この問題を検討した過去ログNo.176を再掲します：

ゲイリー・ノースの一般恩恵論

ヴァンティルばかりか、再建主義の論客ゲイリー・ノースまでもが、一般恩恵を部分的に肯定していることがわかってきました。

こうなりますと、再建主義が「一般恩恵は存在しない」という看板を掲げているのは、再建主義内部におけるある種の誤解、ということになるのかもしれませんが。

しかし、ゲイリー・ノースの一般恩恵論は、通常の神学が言う一般恩恵とはかなり異なっており、言わば「呪いとしての一般恩恵」とでも言うべき体裁になっています。その問題性を、ミシガン州グランドラピッズのプロテスタント改革派神学校教授デヴィッド・エンゲルズマ博士が、神学雑誌『コントラ・ムンドウム』1992年冬季号で指摘しています。それは、次のようなことです。

1. 再建主義は国民の総意に基づく国民契約により、旧約の司法律法を統治システム（司法・立法・行政）に適用し、また、経済システム（民法・商法）や保障システム（社会福祉法）にも適用することを目指しています。
2. 上記が実現するためには「国民全員がキリスト者となり、国民契約に同意する」必要があります。これは、講解説教とホームスクーリングによって、実現可能だとされています。
3. しかし、改革派神学は、二重予定説と限定的贖罪を説きます。つまり、キリストの贖罪は選民だけのためのものであり、神意によって選民から漏れ、滅びに定められている人々が存在することになっています。
4. そうすると、「国民全員がキリスト者となり、国民契約に同意する」という事態は、理

論的に絶対に実現不可能である、ということになります。

5. そこで、ゲイリー・ノースは、一般恩恵を導入するのです。つまり、滅びに定められた非選民に対して、神は「呪いとしての一般恩恵」を与え、これにより非選民は、うわべだけの名目的なキリスト者となる、ということです。

6. この場合の「名目的なキリスト者」とは、有効召命を受けておらず、一般召命しか受けていないので、救われておらず、滅びる運命にあるが、一般恩恵に支えられているゆえに、再建主義に同意し、旧約の司法律法が適用された司法制度や社会制度に、従順に従い、善良な市民として生活を送る人々です。

7. この、「呪いとしての一般恩恵」を受けた人々は、再建主義が実現した社会において、旧約の律法を遵守して、善良な市民として生活をしていても、内心においては、神よりも自己を上には置いています。キリスト者としての信仰告白や、律法への服従は、それゆえ、本心から出たものとはみなされず、最終的には滅びるのです。

8. つまり、「呪いとしての一般恩恵」とは、滅びに定められた非選民が、再建主義に同意し、律法を忠実に守り、善良な市民として生活することを可能にさせる、神からの恩恵なのです。この場合、非選民は、律法を忠実に守れば守るほど、「神の怒りの炭火」を自分の頭の上に積むことになります。なぜなら、彼らは律法への服従を、本心から行っているわけではないからです。

このようにして、再建主義が実現した世界においては、有効召命を受けた本物のキリスト者は、たとえ罪を犯して律法による裁きを受けたとしても、限定的贖罪の適用を受けて、罪を赦され、永遠の命を得ることが出来ます。

これに対して、一般召命しか受けていない名目上のキリスト者は、たとえ律法を完全に守って、善良な生活を送ったとしても、限定的贖罪の適用から完全に漏れていますので、行為に現われない内面的な罪のゆえに、永遠の滅びに行くことになるのです。

これが、ゲイリー・ノースが説く、神学的に非常に特殊な、「呪いとしての一般恩恵」です。

742 使徒的宗教改革の現実的な背景（3）

[山谷](#) - 2005/02/01 16:28 -

・・・メガチャーチの急成長、王国神学／再建主義を抱きしめようとしている使徒的宗教改革、伝統的・教派的教会の衰退、米国政治におけるキリスト教右派の影響力の拡大・・・

これらのことを考え合わせるなら、2001年9月にスコットランド長老教会大会決議にみなぎる「緊迫感」が、にわかに、現実感をもって迫って来るのです。再建主義を異端として退けた同決議は、改革派陣営における再建主義の影響よりは、非改革派、特に、カリスマ派への再建主義の影響を、憂慮していました。

—以下引用—

スコットランド長老教会大会決議

セオノミー（再建主義）が（ウェストミンスター）信仰告白にも相いれず、信仰告白が根拠としている聖書教理にも相いれないということは、すでに述べてきた。それでは、スコットランド長老教会として、セオノミーにどのように答えるべきだろうか。セオノミー運動が、リフォームド（改革派）陣営のみならず、カリスマ運動にも影響を及ぼしはじめ、その勢力

が大きくなる気配をみせているということは、重大な事である。いろいろな意味で、我らの改革神学や、スコットランド長老教会の伝統である再臨前千年王国説（後千年期再臨説）や、我々の前提主義的な弁証学への傾向は、昨今のセオノミー趨勢に対して、一役かってきた。

かくして、教会内の各方面に、すでにセオノミーに共感する傾向があり、**もしもしこの見解を黙認するようなことでもあるなら、委員会報告書からしても、今後悲惨な影響がおりうるし、その兆候をすでにみせはじめている。**もちろん、もし、セオノミーが聖書と調和し、福音の本質的な部分と調和するなら、委員会報告書の問題提起は、二次的重要さをもつことになるだろう。そうであれば、かつて十字架への離反に対して立ち向かったあの宗教裁判の真似事のようなものを用意すべき事例ではない。我々は、無駄な裁定を下す必要もない。しかしながら、近年我々は、長老教会の名誉が傷つけられる数々の試練の時を過ごすのを余儀なくされてきた。**今般の長期にわたるセオノミー神学との論争によって、我々は信仰の生命線が絶たれ、そして生き残れないかもしれない。**

それゆえに、我々はあらゆる点で断固たる立場を要請したい。大会会議は、一般的にセオノミーもしくは、再建主義と呼ばれている教義は、信仰告白と矛盾しており、聖書教理とも相いれないと宣言する。大会会議は、この決議を地域諸教会に知らせつつ、大会会議の議決がねらうところが徹底されることを願う。この目的のために、委員会は報告書を添付した議定書を、関係する救済委員会と、すべての中会会議及び、キルク会議に推薦するものである。

—以上引用—

・・・同大会決議は「我々は生き残れないかもしれない」という、非常に緊迫感を持った言葉で、決議文の結末部分をしめくくっています。

これは、考えすぎなのでしょうか？

しかし、北米のメガチャーチの今後の動向、そして、それが及ぼす「神学的・政治的な地殻変動」の次第では、正統的キリスト教が生き残れない可能性が、なきにしもあらずなのです。

■ 739 使徒的宗教改革の現実的な背景（2）

[山谷](#) - 2005/02/01 16:00 -

使徒的宗教改革の動きというのは、このようなメガチャーチ（駐車場、レストラン、書店、ゲームセンター、託児所、各種サークル・セミナーの施設とサービスを持った<消費者=信徒>のニーズにどこまでも応える巨大教会）の成長と、連動しているわけです。

先のログNo.668で、C.ピーター・ワグナーの『リバイバル あなたの都市が変わる！』を書評して、<使徒的宗教改革とは、「グローバル資本主義の経営戦略を教会運営用に翻案したもの」という見方も、出来るのではないのでしょうか？>と書いたわけですが、「教会のウォールマート現象」というのは、実に的を得た表現だと思いました。

今後、北米のキリスト教において「教会のウォールマート現象」が進行するにつれて、次のような現象が世界的に展開されて来ることが予想されます。

1. <消費者=信徒>のあらゆるニーズに応えるメガチャーチの成長によって、（1）旧来型の教派的・伝統的地域教会は次々に閉鎖に追い込まれるか、（2）メガチャーチのフランチャイズチェーン店化するか、（3）「ある特殊な層の<消費者=信徒>のニーズ（ニッ

チ)」に特化した「小さな専門店的教会」となるか、三者択一を迫られる。

2. メガチャーチは、ほとんど非教派的・非伝統的であり、旧来の教派・制度・神学に対するコミットメントを欠いている。そればかりか、実践神学的勝利の事実によって旧来の組織神学や聖書神学を「書き換える」ことに、ためらいがない。このため、(1) 北米のキリスト教人口に対する教派的・伝統的教会の影響力が急激に薄れ、(2) これまで標準的とされて来た聖書解釈・教義・実行が、必ずしも標準ではなくなり、(3) 結果として、北米の新しいキリスト教の信仰と実行の体系が、正統派・リベラル派・福音派に対する意味での「第四世代のキリスト教」として台頭して来ることとなる。

3. 「第四世代のキリスト教」は、グローバル資本主義の展開と共に世界各地に波及し、多くの国々、特に英語圏諸国において「都市のリバイバル」という呼び名での「メガチャーチの急成長」を引き起こし、その結果、同様に、多くの国々においても、教派的・伝統的キリスト教の衰退現象が起きる。

4. しかし、アメリカとの文化的相違を自己同一性として堅持する傾向が強いヨーロッパ諸国（特にドイツとフランス）は、「第四世代のキリスト教」を拒否し、教派的・伝統的神学を防衛する「最後の牙城」となって戦うことが予想される。こうして、全世界のキリスト教は「カトリックとプロテスタント」「リベラルと福音派」というような従来の二分類法が意味をなさなくなり、「第四世代のキリスト教（新キリスト教）と旧世代のキリスト教（旧キリスト教）」に、新たに色分けされることとなる。

上記の流れと使徒的宗教改革は連動しており、この使徒的宗教改革が「王国神学／再建主義」を明確に選択して政治活動を行った場合には、「メガチャーチのキリスト教、すなわち＜第四世代のキリスト教＞が掲げる政治的アジェンダが、米国政治の実現可能な政治的日程に乗る」ということになります。

再建主義社会が北米で実現する、というのは、こう考えると、それほど「荒唐無稽なSF小説」とは思えなくなってきました。

737 使徒的宗教改革の現実的な背景（1）

[山谷](#) - 2005/02/01 15:58 -

疲弊した地域教会を財政的に再興するためのプロジェクトとして、教会の教育館を使ったビジネススクールを運営している、ロサンゼルス「萩原ビジネスセミナー」(HBS)のサイトに、「教会のウォールマート現象」という一文がありましたので、ご紹介します。非教派的・非伝統的教会のメガチャーチ（数千人から数万人の会員を擁する巨大教会）が全米各地で急成長している結果、地域社会に根ざした旧来の教派的・伝統的教会が会員を奪われ、次々と閉鎖に追い込まれているという状況が、「ウォールマート現象」という概念で、上手く説明されています。

—以下引用—

教会のウォールマート現象

オーストリアのGDPと匹敵するほどの年間売上で世界ナンバーワン企業である巨大雑貨店のウォールマート。

創立者のサム・ウォルトン氏は比較的土地の価格が安い郊外、地方を中心に、EVERY DAY LOW PRICEをスローガンに総合雑貨店を展開し、大成功しました。

但し、その一方アメリカ全国どこへ行ってもウォールマートばかりで、地方の町に昔からあった小さいハードウェアストアや雑貨店は消え去ってしまいました。

アメリカの教会も同様で、昔からあるコミュニティを中心とした小教会が、いわゆるメガチャーチ（巨大教会）に押され衰退しつつあります。
メガチャーチは別に小教会をつぶそうとしているのではなく、伝統より、人々のニーズに合わせた教会のあり方に注目し成功しています。
実際にメガチャーチに行くと、入り口はディズニーランドのようにスタッフがゲストをVIPのように扱ってくれます。

礼拝もプロの音楽家がジャズからクラシックまで見事な音楽を演奏する上、牧師の話もマルチメディアを使い、コメディーも入り、まったく飽きさせることがなく、子供の世話・クラスも子供のテレビ番組のようです（実際にテレビ中継しているところもあります）。

麻薬問題、青少年問題、離婚問題、ギャンブルの問題等に関するクラスやカウンセリングも充実し、人々のニーズにこたえています。

そんな中、昔からある伝統的な教会がどう生き延びていくのかが問われています。

http://www.hbsegg.com/about_vdrcc.html#History

—以上引用—

■736 使徒について

[山谷](#) - 2005/01/29 09:27 -

「使徒的宗教改革」を検討するにあたって、まず、新約聖書的な使徒の定義を、きちんと決めておきましょう。

新約聖書的な使徒とは：

（１）キリストの顕現に個人的に接した人であること。（十二使徒その他の使徒は、在世中のイエスに、パウロは、復活のイエスに、接した）。

（２）キリストによって直接的に使徒に任命され、かつ、他の使徒たちも、そのことを尊重していること。（パウロの使徒職の正当性は、ユダヤ人キリスト者共同体の伝道者たちによって絶えず問題にされたが、エルサレムの使徒団は、パウロの使徒職の正当性を認めていた）。

（３）使徒は、祈り（とりなし）、御言葉を説き明かし（説教）、福音を宣教し（伝道）、共同体を設立し（開拓）、弟子を訓練し（訓練）、共同体の信仰と生活を見張り（監督）、信仰と生活についての必要な指示を与え（回覧状）、信任できる者に共同体を治める権威を委任し（任命）、各地の共同体を巡回し（問安）、必要に応じて戒規を執行する（教会戒規）。

（４）使徒が、その指導を行うことができるのは、自分が開拓して設立した共同体に対してだけである（割り当てられた範囲）。

（５）使徒は、共同体の信仰と生活についての「全共同体的（オイクメネーの）取り決め」を、使徒全員の合議により決定する（使徒会議）。

・・・以上でしょう。

さて、使徒なき後の教会は、使徒なしで、どのようにその信仰と生活を維持したのでしょうか？

それは、次のようにです：

（１）使徒たちの信任によって立てられた「監督」と「長老」が、各共同体を治めることによって。

（２）使徒たちが、共同体の信仰と生活の正しい在り方について指示を書き送った回覧状、すなわち、使徒の手紙を、保存し・朗読し・学習し・注解し・適用することによって。後にはそれらを「新約聖書正典」に編むことによって。

（３）使徒たちが、各共同体に対して指導した信仰の正しい内容を、「新約聖書正典」に根拠させつつ要約した「信条」を編むことによって。

・・・以上でしょう。

すなわち、「監督」「正典」「信条」という三つの要（かなめ）によって、「使徒的信仰」は、その後も維持されることが出来たのです。

さて、現今の「使徒的宗教改革」は、（１）自称使徒が、割り当てられた範囲を超えて、自分の優位を主張することにより、「監督」を軽視し、（２）解釈的最大主義によって、「正典」を軽視し、（３）王国神学・再建主義によって、「信条」を軽視する、という、憂慮すべき内容を持っているのです。

732 リバイバル運動史に照らして検討する「使徒的宗教改革」

[山谷](#) - 2005/01/25 17:00 -

リバイバルの歴史を振り返りますと、過去に、「使徒的宗教改革」の形態に幾分類似したムーブメントが存在したことがわかります。類例として、18世紀英国におけるジョン・ウェスレーのメソジスト運動を挙げる事が出来るでしょう。

ウェスレーの場合、（１）既成の教派教団の枠組みの外で、（２）使徒的権威を持つ単独のリーダーが積極的伝道を全国展開し、（３）各地で得た回心者にスモールグループ／セルグループを形成させて、信徒訓練を施し、（４）そこから信徒伝道者を積極的に起用することによって、伝道を点から面へと展開した、という「典型」があったわけです。

上記、（１）から（４）の特徴のみを見て比較すれば、メソジスト運動と使徒的宗教改革は、類似している、ということが出来るでしょう。

しかし、大きく違っている点があります。

それは、使徒的宗教改革が、既成教会・制度的教会を「機能不全に陥っているゆえに不要のもの」「神の御心に反するもの」「解消され、消滅させられるべきもの」と考えているのに対して、ウェスレーは、既成教会・制度的教会を否定することを、まったくしなかった、という点です。

ウェスレーは、自分の足で行って福音を伝えた結果として設立されたスモールグループ／セルグループ（会と組）については、自分のリーダーシップを行使しました。それも、厳格に

行使しました。

しかし、ウェスレーは、聖パウロと同様、あくまで「自分の割り当てられた範囲内でのみ誇った」に過ぎなかったのです。

聖パウロが、ユダヤ人キリスト者共同体に対して「自分に従うように」とは決して要求しなかったように、ウェスレーもまた、既成教会・制度的教会に対して「自分に従うように」とは、要求しなかったのです。

ところが、「使徒的宗教改革」の場合は、自称「回復された使徒」と称する人々が、既成教会・制度的教会の役割の終焉を勝手に「御神意」として宣言し、「真の教会はすべて、＜回復された使徒＞のリーダーシップの下に入るべきである」と唱えるのです。

これですと、聖パウロやウェスレーの事例に反して、「自分に割り当てられた範囲外でも誇る」ということになってしまいます。

ところが、「使徒的宗教改革」を推進する人々は、ブラザレン／ウォッチマン・ニー／ウィットネス・リーの「ローカルチャーチ運動」の原理を都合よく用いることにより、自分たちを巧妙に正当化するのです。

すなわち、（１）神は、教会設立の基本単位を「都市」の範囲に定めており、（２）各都市にあるキリスト者共同体は、本来、「神が都市に任命した一人の使徒」によって治められるべきであり、（３）この使徒の地位は教会史で数千年に渡り失われていたが、（４）回復の時代にあって、神は、使徒を回復しておられ、（５）こうして、（自称）「使徒」は、神が自分に割り当てられた範囲である「都市」において、そこに住むすべてのキリスト者に、「このわたしに従いなさい」と主張することが出来る、というのです。

これですと、聖パウロ・ウェスレーの文脈で見れば、新約聖書的禁止である「自分の割り当てられた範囲外で誇る」というケースに明らかに該当するはずですが。

ところが、使徒的宗教改革の推進者は、「ローカルチャーチ運動」の原理を使うことによって、「いや、自分たちは、あくまで、自分の割り当てられた範囲内（すなわち、ひとつの都市の範囲内）で誇っているに過ぎないのだ」と、言い抜けようとするのです。

21世紀の教会は、いよいよ「新約聖書的状况」とでも言うべき状況に入ってきているのかもしれない。すなわち、使徒パウロが悩みに悩んだ、「ユダヤ人キリスト者共同体の伝道者による、『住み分け規定』を無視した、異邦人キリスト者共同体への食い込み活動」という状況が、現代において、再現されることになるのです。

731 日本の福音派の今後

[山谷](#) - 2005/01/25 00:16 -

日本の福音派は、米国政治におけるキリスト教右派の影響力拡大を「福音派のロビー活動による」と報じ続ける昨年来のマスコミの論調に、当惑させられっぱなし、というのが、現状です。

なぜ福音派の政治活動が米国で大きく進んでいるのか、その分析については、マスコミの従来通りの説明である「テレヴァンジェリストの影響」という見方に、日本の福音派の大方も立っているようです。

一方、リベラル派からは、組織神学者の栗林輝夫氏が「再建主義思潮の影響」を指摘する論

評を『福音と世界』において出されたわけですが、残念ながら、日本の福音派においては、（１）保守的改革派サークル内でコーネリアス・ヴァンティルが割合にスタンダードに近い位置を占めており、（２）非改革派の福音派内は（ウェスレアン・ホーリネス系を別にしても）ウェストミンスター神学校の流れの神学者が重鎮を占めているために、（３）結果として、再建主義の問題性・問題点が、ほとんど、あるいは、まったく不問にされている、という状況があるわけです。

さらに悪いことに、再建主義と接点を持ち得る「使徒的宗教改革」が、（１）その性質からして実践神学的異端であるために、組織神学的異端への対応のみに長けてきた福音派側の監視の目が、ほとんど、あるいは、まったく行き届いておらず、（２）しかも、使徒的宗教改革の原理を受け入れている層が、非伝統的スタイルを好むユースチャーチであった場合に、伝統的教会の生活圏の情報網に、ほとんど、あるいは、まったくひっかかることがなく、（３）結果として、気がついたときには、教会内外の若者層を中心に、かなりの数の人たちが、「使徒的宗教改革」の強い影響下に入ってしまった、という状況になりかねないのです。

これが、単なる杞憂であればよいのですが。

■ 729 救世軍の中の使徒的宗教改革？

[山谷](#) - 2005/01/24 23:46 -

王国神学という形態で「再建主義」との関連性を持ち得る「使徒的宗教改革」について、このウォッチング掲示板でも、その問題点を何度か指摘して来しました。

この「使徒的宗教改革」は超教派的・国際的なムーブメントですから、当然のことながら、福音派・聖霊派のあらゆる地域教会が、何らかの影響を被る可能性があるわけです。

これについては、救世軍も、けして例外ではありません。

カナダ・バンクーバーにある、救世軍のユースミニストリーの訓練学校「ウォー・カレッジ」では、『進撃的キリスト教ジャーナル』（Journal of Aggressive Christianity）というオンライン神学誌を刊行していますが、その第34号（2004年12月-2005年1月号）に、「フレッシュ・ファイアー・ミニストリー」主宰のトッド・ベントレーによる小論「使徒的革命の戦略的鍵」が掲載されました。その内容は、（１）神は現在、世界各地で使徒的宗教改革を推進しておられ、（２）それは、都市に使徒的センターを設立することによって起こっており、（３）そこでは、新約聖書的リーダーシップ・スタイルが回復されつつあり（使徒・預言者・伝道者・教師・牧師）、（４）そのリーダーシップのもとで全都市規模の「いやし」のリバイバルが導き入れられつつあり、（５）その結果として、道徳的罪のみならず、教団教派の伝統に固執する罪についても、徹底的な悔い改めが起こり、（６）既成教会は除去されて、「回復された使徒と預言者」を土台にした「新しい教会」が設立されることになる、というものです。

トッド・ベントレーは、犯罪と麻薬に染まっていた十代後半の時に、劇的回心を体験し、今は、いやしの伝道者として、カナダのバンクーバーを拠点に、アフリカや北米など各地でリバイバル集会を展開しています。救世軍の「ウォー・カレッジ」も、バンクーバーにありますので、同じ街でユースミニストリーを展開していることから、接点があり、今回の論文掲載という経緯に至ったものと思われます。

このウォッチング掲示板でも指摘しましたように、使徒的宗教改革が目指すのは、「回復された使徒と預言者」へのリーダーシップの移行による既成の教団教派の諸教会の解消であるわけです。そうしますと、都市のリバイバルの結果として、救世軍を解消・解体する、とい

うことが、当然のこととして、予想され・前提されているわけです。

救世軍のような、強固な監督政治の教会が、そうした路線を行くとは、とても考えられないわけですが、伝統的方法を好む「伝統派」と、非伝統的方法を好む「非伝統派」との事実上のくすみ分けが進みつつあるカナダの救世軍では、「非伝統派」のユースミニストリー従事者の中で、この「使徒的宗教改革」に共鳴する人たちが一部に存在する、ということのようです。

こうなりますと、両者の不要の衝突を避ける手段として「くすみ分け」を行ったものの、「非伝統派」の中の一部が、「伝統派」の将来的な解消・消滅を「神の御意志」として是認している、という構図になり、実践神学的に非常に大きな問題だと言えるでしょう。

『進撃的キリスト教ジャーナル』の今後の号に、「使徒的宗教改革」の問題性を指摘する立場の論文が掲載される可能性があるのか、どうか、今のところ不明ですが、関心をもってウォッチングして行きたいと思います。

北米など英語圏の「非伝統派」の救世軍人の中で、この「使徒的宗教改革」の信奉者が今後増加した場合には、救世軍も、ほかの福音派の諸教会と共に、非常に困難かつ苦しみの多い対応を迫られることになるかもしれません。

「使徒的宗教改革」を推進する人たちは、そうした苦しみと困難を経てく神の御心に適った教会>が出現する（「地が振るわれる」）と考えているようですから、むしろ、そうした苦渋を望んでいるのかもしれませんが・・・

もちろん、「非伝統派」の中でも、オルタナティブ・ワーシップを実験しているような「エマージング・チャーチ」（新しく出現したユースチャーチ群）は、教会成長や大規模集会や権威的リーダーシップを嫌う傾向が強いですので、「使徒的宗教改革」とは明らかに方向性を異にするものがあります。

おそらくは、「非伝統派」の中から、より急進的グループが「使徒的宗教改革」に向かい、スピリチュアリティ（霊性）を追求するグループが「オルタナティブ・ワーシップ」に向かい、その結果、「非伝統派」の中にある相違がいよいよ大きなものになっていくであろうと予想されます。

727 HNさまへ

[山谷](#) - 2005/01/19 23:19 -

イギリスの福音派の神学者であるアリスター・マクグラスの『キリスト教神学入門』という神学校用教科書を想定して書かれた本を読みますと、残念なことに、ヴァンティルはおろか、コッツェユスも、契約神学すらも、出て来ません。『キリスト教の将来と福音主義』の中には、根本主義の発生の叙述の中で、ウェストミンスター神学校設立のくだりに、かろうじて、括弧付きでヴァンティルの名前が言及されています。括弧をつけたかった理由については、わたしは、自分なりに、あれこれ想像していますが・・・

ヴァンティルどころか、契約神学についてすら、まず、アメリカとヨーロッパとの間では、温度差が存在するように思われます。

ピューリタンが入植して建国されたアメリカは、契約神学を原動力として政治と文化を展開して来たわけですから、契約神学を抜きにして、アメリカという国家を考えることは出来ないわけです。このあたりは、ラインホルト・ニーバーが取り組んだテーマであり、また、日本の組織神学の大家である大木英夫教授が『組織神学序説 プロレゴメナとしての聖書論』

の後半部分で取り扱っている問題でもあります。

（再建主義者は、独立革命が途中でフリーメイソン・ユニテリアンに奪取されたと考えていますので、米国史の原動力は契約神学ではなく、ヘーゲル主義である、それゆえ、アメリカ南部を除いて、米国史は悪魔的である、と考えています。が、わたしは、ヘーゲルの歴史哲学は、世俗化された契約神学が淵源であると考えていますので、ニーバー・大木のセオリーは、正しいと思います）

これに対して、オランダやイギリスの長老派を除けば、ヨーロッパでは、契約神学は「忘れ去られた神学」となってしまっていたのですが、それを現代神学の文脈において再発見したのが、カール・バルトであったわけです。バルトは、ピューリタンの著作を通じて再発見した契約神学を、自分の教義学体系の根幹部分に取り入れました。それゆえ、バルト神学の照射で契約神学の意義を見る、ということが、現代神学では行われているわけです。

もちろん、アメリカの神学界とヨーロッパの神学界の間には、交流が行われているのですから、それぞれの特色を出しつつも、お互いに影響し合っているわけです。

しかし、アメリカの福音派の中でも、再建主義サークルにおいては、まず、（１）ヴァンティルが理性能力を否定し、（２）ラッシュドゥーニーが非根本主義の神学教育を否定し、（３）再建主義が大学教育および公教育全般を否定したことによって、再建主義においては「閉じた殻の中への引きこもり」とでも言うべき状況に至りつつあると、わたしは見ています。

こうして、再建主義者は、現代のイギリスの神学者やドイツの神学者の議論を参照することは、ほとんど、あるいは、まったくないばかりか、現代のアメリカの福音派の神学者の議論を参照することすら、非常にまれになっているのです。

例外的に、オランダの改革派の神学者の議論に言及することがありますが、それにしても、一般恩恵と自然法を認めない立場であるわけですから、「批判的引用」に留まるのは、当然でありましょう。

726 あちらの状況がよくわかります

HN - 2005/01/18 23:20 -

山谷先生のお話によってヴァンティル神学を取り巻く、米国の状況がよくわかります。大陸ヨーロッパのプロテスタントになると、（オランダはどうか知りませんが）ヴァンティル自体、あまり知られていないか無視されているのでは？南ドイツの改革派教会がヴァンティル主義を説くなんてことは、ちょっと想像できませんよね。（笑）

725 アンドリュー・J・バンドストラ博士（２）

[山谷](#) - 2005/01/18 23:10 -

博士自身は、＜ストイケイアを天使的諸力とする解釈法＞には、いくつかの難点があるゆえに積極的に採用しないものの、結論として、＜パウロ神学においては、「律法」と「肉」と「ストイケイア」が同一視される関係に置かれている＞と分析しています。

以下に、＜パウロ神学における「律法」と「肉」と「ストイケイア」の同一視される関係＞について述べている部分を、ご紹介します。

ストイケイアの「パウロ書簡の広範な文脈における用法」

パウロ書簡より採取した以下の言明は、律法・肉・ストイケイアについての言明と、見事な整合性を持っている。これらの言明は、ストイケイアが律法および肉と同一視されている証拠であると考えられる。

1. キリスト到来以前・また・キリストの外にあって、人間は、**ストイケイア**に対する隷属状態にある（ガラテヤ4:3、9）。人間は、**律法**の下に閉じ込められ、囚われている（ガラテヤ3:23、ローマ7:6）。**肉**によって生まれた現今のエルサレムおよびその子らは、奴隷状態にある（ガラテヤ4:23、25）。

2. **ストイケイア**は、弱く、無力である（ガラテヤ4:9）。**律法**は、肉において無力である（ローマ8:3）。**肉**の弱さは、判断と努力における弱さの原因である（ローマ6:19、二コリント10:3、4）。

3. キリストにあって、キリスト者は、**ストイケイア**に対し、十字架につけられて死んだ（コロサイ2:20）。キリスト者は、**律法**に対して死に、律法から贖い出された（ガラテヤ2:19、4:5）。キリスト者は、**肉**のからだを脱ぎ捨てた（コロサイ2:11）。

4. キリスト者は、**この世**に対して、十字架につけられて死んだ。この世は、キリスト者に対して、死んだ（ガラテヤ6:14）。キリスト者は、キリストと共に十字架につけられて、**律法**に対して死んだ（ガラテヤ2:19）。キリスト者は、**肉**を、その情と欲と共に、十字架につけられた（ガラテヤ5:24）。

5. **ストイケイア**は、キリスト到来前における、イスラエルの後見人であり管理人である（ガラテヤ4:2、3）。**律法**は、キリスト到来前における、イスラエルの養育係である（ガラテヤ3:24）。人間は、**肉**に従って生きなければならない義務を負っている（ローマ8:12）。

キリスト教改革派教会の神学教育機関であるカルヴィン大学は、コーネリアス・ヴァンティルの母校でもあります。そのカルヴィン大学の新約聖書神学教授が、「律法」と「肉」と「ストイケイア」が同一視される関係にあることを、詳細な釈義に基づいて論述しているわけです。このことは、ヴァンティルの弁証学に根拠して司法律法有効論を展開している再建主義思潮に対して、ひとつの反駁となるであります。

■723 アンドリュー・J・バンドストラ博士（1）

[山谷](#) - 2005/01/18 22:57 -

改革派エキュメニカルセンター発行の神学誌『セオロジカル・フォーラム』1994年3月1日号（第22巻1号）に、米ミシガン州グランドラピッツのカルヴィン大学の新約聖書神学名誉教授であるアンドリュー・J・バンドストラ博士が、「この世の諸要素からの救済」と題し、パウロ書簡におけるストイケイア概念について小論を寄せています。これは、オランダの改革派の神学者ヘンドリクス・ベルコフが第二次世界大戦後にその著『キリストと諸権力』において明らかにしたく中間時の中間領域を占め・キリストに使役されている・天使的諸力としてのストイケイアを考究する神学的作業を、改革派サークルにおいてさらに発展させることが必要であるとの同誌編集者の招きに応じて、バンドストラ博士が寄稿したものです。博士には、「律法とこの世の諸要素 パウロ神学についての釈義的研究」（1964年）と題する博士論文があります。

この小論の中で、博士は＜ストイケイアを天使的諸力とする解釈法＞について、次のように紹介しています。

ストイケイアの「人格的-宇宙論的解釈」

この解釈は、20世紀における多数派の見解となった。この解釈によれば、「タ・ストイケイア・トゥ・コスムウ」は、物質的諸要素と諸天体を通して活動している人格的な霊的存在を指すもの、となる。

パウロはガラテヤ書3章19節において「天使」を律法授与者と見ており、ガラテヤ書4章3節と9節で、ストイケイアを人格的存在としており、さらに、コロサイ書において「主権と位」に言及していることから、この解釈法のあるものは支配的見解となるに至った。

これら人格的な霊的存在の特異な性格の中には、多種多様な範疇が入れられる（たとえば、「諸力」「天使」「天の諸霊」「宇宙の構成に関わる諸霊」「悪鬼」など）。いずれにせよ、人格的な霊的存在であるという点が、この見解の中核となる概念である。

この解釈は、改定標準訳聖書に採用され、「宇宙の構成に関わる諸霊」として訳出された。

720 西方教会の三位一体の定式

山谷 - 2005/01/18 16:00 -

“三つの位格が、ひとつの位格”である、というコーネリアス・ヴァンティルの定式は、単純に「サベリウス主義」として論難できるものではありませんが、しかし、西方教会の系統で保持されている三位一体論の定式とは、明らかに異なるものです。

三位一体についての西方教会の見解を簡潔に提示している、675年のトレド公会議にて採択された定式には、次のように言われています：

これが聖なる三位一体の記述である。
三重の神ではなく、三位一体の神と呼び、信ずる。
一つの神の中に三位一体の神があるのではなく、
一つの神が三位一体なのである。
父と子、子と父、聖霊と父と子との関係がある。
この関係において三つの位格であり、
本性または本質は唯一である。
三つの位格は三つの本質ではなく、
一つの本質であり三つの位格である。
父は自身に対して父でなく、子に対して父である。
子は自身に対して子ではなく父に対して子である。
同じように聖霊は自身に対してではなく、
父と子との関係において、父と子の霊である。
神という時、父が子に対し、子が父に対し、
聖霊が父と子に対する関係という具合に他に対してではなく、
自身に対して神である。

上記の第六文節において：

「三つの位格は三つの本質ではなく、一つの本質であり三つの位格である」と言われています。

これに対して、「三つの位格は一つの位格である」とするヴァンティルの見解は、古い西方の定式から明らかに異なっているのです。

しかし、キリスト教弁証学者が、キリスト教の教義体系を弁証するに際して、どうして、古い定式をあえて崩して弁証しなければならないのか。ヴァンティルの意図を理解しかねます。神学校の教理の試験の答案に、学生が「三つの位格は一つの位格である」と書いたら、大方の採点者は×をつけるはずでありましょう。

おそらくは、ヴァンティルには、あえて古い定式を変えなければならない、よほど深い理由

があったのかもしれませんが・・・

それにしましても、逐語靈感の問題でプリンストン神学校を割って出た人々が設立したウェストミンスター神学校であるわけですが、その弁証学の教授が、こうした考え方を『組織神学緒論』で開陳できるのですから、プリンストンほどではないにせよ、案外ウェストミンスターも、自由な校風であったのだろうか、と想像してしまいます。

717 ヴァンティルの三位一体論

[山谷](#) - 2005/01/16 22:59 -

改革派サークル内で問題とされているコーネリアス・ヴァンティルの三位一体論は、その著書『組織神学緒論』の229ページに記されています。そこでは、「神の三位一体性」を論じる文脈で、次の言明がなされています：

神格の全体が、ひとつの位格である、と、われわれは断言する。存在論的な三位一体論の文脈においてさえ、神は数的に単一である、と、われわれは主張せねばならない。神は、単一の位格なのだ。人格的な神を信じる、と言うとき、そこで意味されるのは、神の属性としての「人格的性質」のことではない。神は、「人格的性質」という属性が有する、ひとつの本質、というようなものではない。神は、絶対的な人格的存在そのもの、であるのだ。

上記の言明は、もちろん、ヴァンティル特有の、＜人間の理性能力の否定＞という文脈において解釈するのであれば、単に、「ここが、信仰による飛躍の地点だ。理性は退場し、ここでジャンプせよ」と言っているのに過ぎないことになります。

しかし、そのような親切な見方をしないで、厳密に文言で受け取ろうとしたならば、そこには「半サベリウス主義」と言われても仕方のないものがある、とされます。

いったい、ワネス神学的再建主義者が、上述のヴァンティルの『組織神学緒論』を根拠に自身の正当性を主張して来た場合、三位一体的再建主義者は、どう返答するのでしょうか？

715 一般恩恵・政治・文化の問題

[山谷](#) - 2005/01/16 22:27 -

既述のように、米国のプロテスタント改革派教会は、一般恩恵の概念を否定しているわけです。

このプロテスタント改革派教会の指導的な人物であったヘクセマは、オランダの神学者クラス・スキルダーと教義論争を戦わせたのですが、それは、「一般恩恵」をめぐる議論ではなく、「契約理解」をめぐる議論でした。

この「契約理解」をめぐる議論は、契約共同体加入の＜しるし＞である「割礼」が、新約において「洗礼」となったのか、どうか。契約共同体成員を規制する＜律法＞は、外的律法としての「聖書律法」なのか、内的律法としての「心に記された律法」なのか、という議論です。スキルダーの「契約理解」においては、＜洗礼によって加入した契約共同体成員は、外的律法としての「聖書律法」によって断罪され刑罰を受ける＞となっていますから、これは、文脈的に再建主義へとつながって来るわけです。これに対して異を唱えたのが、ヘクセマであり、プロテスタント改革派教会でした。

ところで、「契約理解」については議論を戦わせたヘクセマとスキルダーでしたが、「一般恩恵」の概念を否定するという点では、二人は共通の立場にあり、二人の間に何ら異論はなかったのです。

普通、キリスト教神学では、政治や文化を成立させているものは、神の「一般恩恵」である、と考えるわけです。ところが、ヘクセマやスキルダーやプロテスタント改革派教会は、「一般恩恵を否定しつつも、政治や文化を意味あるものとして肯定する」という道を行っているわけです。

再建主義は、「一般恩恵」を否定するがゆえに、＜聖書律法によって構築されない政治や文化は、すべて、悪魔的である＞と主張しているわけです。いったい、「一般恩恵」を否定しつつも、政治と文化を肯定して、再建主義者と袂を分かち、というようなことが、可能なのでしょうか？

スキルダーと同じオランダの神学者、アブラハム・カイパーの場合は、人間の「全的墮落」を非常に深刻なものとして捉えたために、人間の理性能力・社会形成能力・創造的能力なども、道徳的能力と共に、罪性によって完全に破壊されてしまった、と考えます。このため、人間が法感覚をもって社会を形成するためには、神からの「一般恩恵」が必要だ、という論理的帰結になったわけです。（一般恩恵を要請する悲観的徹底的全的墮落論）

これに対して、「一般恩恵」を否定するヘクセマとスキルダーの場合は、カイパーのように「全的墮落」を深刻なものとしては捉えないようです。つまり、＜人間は墮罪していても、依然として人間である＞のであり、＜墮罪によって、人間と世界の「構造・本性」が破壊されたり異質なものに变化したりしたわけではなく、単にその「方向性」が变化したに過ぎない＞と考えるようなのです。

この考え方であれば、人間が「全的墮落」の状態に落ちているとしても、依然として人間には、その法感覚をもって社会を形成し、秩序ある生活を営み、創造的活動を行うことが可能である、ということになるのです。つまり、＜人間は全的に墮落していても、有効に機能する政治と文化を構築することが可能である＞ということになります。（一般恩恵を要請しない楽観的限定的全的墮落論）

このように考えるのであれば、「一般恩恵」の概念を否定しつつも、政治と文化を肯定する、ということが、確かに可能になるであります。

たとえば言うなら、政治と文化は人間の眼球のようなものだ、ということになるでしょうか。

人間の眼球は、「全的墮落」によっても、本性的・構造的に変化をしたわけではありません。ですから、墮罪後においても人間の眼球が正常に機能し続けるための「一般恩恵」は、不要である、ということになります。そうしてまた、墮罪の影響を被った人間の眼球を、＜聖書律法に決疑論的に根拠して製作し直した人工眼球を移植して取り換える＞というような必要も、ないことになります。

政治と文化を、人間の眼球と同じような次元のものとして捉えるのか。それとも、政治と文化は、身体性以上・霊性以下である「中間領域」の次元のものとして捉えるのか。

ここの定義の仕方によって、「一般恩恵」を否定しつつも、再建主義にならないのか・なってしまうのか、の違いが出てくるようです。

713 一般恩恵を否定しつつも再建主義者にならない道

[山谷](#) - 2005/01/15 12:24 -

2004年5月13日のログNo.172「北米改革派と一般恩恵（1）」の中で、わたしは「『一般恩恵否定派』であるプロテスタント改革派教会の中に、再建主義の信奉者が割合多く見られるようです」とコメントしました。

ところが、同教会の神学雑誌『スタンダード・ベアラー』を読みますと、プロテスタント改革派教会は、再建主義を異端として批判するばかりか、コーネリアス・ヴァンティルをも異端として批判する立場にあることが、よく判って来ました。

このプロテスタント改革派教会は、元はキリスト教改革派教会（ヴァンティルの出身教会）であったわけですが、1924年のカマラズ大会において「市民的善行を可能にする一般恩恵」を公式教義とする決議がなされたことに反対し、ヘルマン・ヘクセマを筆頭に「一般恩恵反対派」として分離して、プロテスタント改革派教会を設立した、という経緯があります。

そうしますと、一般恩恵を否定するという教義的立場にありながら、再建主義を否定し、さらに、ヴァンティリズムをも否定するという「行き方」が神学的に可能であることを、このプロテスタント改革派教会は、見せてくれているわけです。

さらに興味深いことに、プロテスタント改革派教会のヘルマン・ヘクセマは、「文化命令」の教義を唱えたオランダの神学者クラス・スキルダーにも異論を唱え、神学的議論を戦わせていることです。

スキルダーは、一般恩恵を否定する点では、ヘクセマやプロテスタント改革派教会と同一の立場にあるわけです。しかし、ヘクセマは、スキルダーの「契約理解」を問題として、反駁しました。

この「契約理解」についての議論は、＜人を、新約における契約共同体（契約社会）の成員となすのは、割礼に代る外的しるしとしての幼児洗礼によるのか、それとも、信仰によるのか＞、さらに、＜契約成員を規制し断罪するのは、外的な律法によるのか、それとも、心に記された律法によるのか＞という、再建主義の「契約神学的前提」に深く関わる議論となっています。

ヘクセマがスキルダーの契約理解を誤謬として退けていることが、今日のプロテスタント改革派教会が再建主義に反対する、ひとつの神学的基盤となっているのかもしれませんが。

712 認識論の問題

[山谷](#) - 2005/01/14 22:05 -

ヴァンティルのキリスト教弁証論は、次のように考えます。

1. 無力な人間の理性能力によっては、「神の存在」、「聖書の記述内容の真正性」、「キリスト教教義体系の真正性」を直接的に証明することはできない。（理性による直接的証明の不可能性）

2. 証明する唯一の方法は、間接的な証明法である。そのためには、まず、（1）聖書の原理に根拠した人間の社会的行動をシミュレートし、次に、（2）人本主義的原理に根拠した人間の社会的行動をシミュレートし、その上で、（3）二つのシミュレーションの結果を比較検討し、どちらが成功したかを判定すればよい。（社会的行動による間接的証明の有効性）

このようなヴァンティルのキリスト教弁証論を、政治の領域において実地に展開しようとする

るのが、ラッシュドゥーニーの「再建主義」であるわけです。

つまり、キリスト教の真正性が実証されるためには、＜聖書原理に根拠しない統治システムを採用する政府は、必ず失敗しなければならない＞ということになります。

もし仮に、人本主義的・文化多元主義的・宗教多元主義的な国家機構が、うまくものごとを推し進めてしまうと、それは、「キリスト教の真正性が反証された」ことになってしまうのです。

そのように考えるなら、再建主義者がなぜあれほど、世俗的国家を徹底的に攻撃し批判するかが、よくわかります。彼らの認識論と弁証学の体系においては、「世俗的国家の成功は、即、神の非存在の証明」になってしまうからです。

これは、政治の領域に無理やり持ち込まれた、キリスト教神学の「神の存在証明」の企てだ、と言うことが出来るでしょう。

■711 なぜそうなるのか？

[山谷](#) - 2005/01/14 21:43 -

通常の改革派神学においては、キリスト高举の出来事以降は、世俗的かキリスト教的か異教的かを問わず、地上の諸国家とその政府はすべて、「キリストの王権的・頭首権的統治」の下に置かれており、それらは例外なくすでに「キリストに仕えるしもべ」となっていると捉えます。「天使的国家権力論」を言う救済史神学も、これと全く同様のパラダイムです。

ところが再建主義は、聖書律法を決疑論的に統治に適用しない国家は「悪魔的人本主義（ヒューマニズム）」に支配されていると見ることから、諸国家の政府はすべて、キリスト者が征服すべき対象とみなされることになります。国家機関の征服は、必ずしも全国民の「再建主義的キリスト教への改宗」によらずとも実現が可能であると考えられています。つまり、人口の八割を名目的キリスト者が占める合衆国においては、「神政政治的キリスト教右派」に共鳴する10パーセントのキリスト者が、よく組織された政治的行動に挺身するだけで、米国民の無関心による棄権票に大いに助けられて、親再建主義的議員を議会に送り込み、多数派を形成することが可能なのです。こうして、議会内再建主義グループは、聖書律法に決疑論的に根拠した法案を提出すると共に、聖書律法と合致しない現行法令・条例の廃止に向けて活動することになるのです。たとえば「相続税の廃止」については、すでに実現可能な政治日程の上に乗っているとされています。

■710 再建主義とキリスト教右派

[山谷](#) - 2005/01/14 21:42 -

米国東部の名門六大学“アイビーリーグ”のひとつ、ニューヨーク北部のコネル大学は、宗教間対話・人権擁護・倫理思想を推進する「宗教・倫理・社会政策センター」（CRESP）のプロジェクトの一環として「セオクラシー・ウォッチ」（神政政治推進派への監視活動）を行っています。下記は、「セオクラシー・ウォッチ」が提供する、米国政治における再建主義についての情報です。

合衆国に神政政治国家を樹立することを目指す「神政政治的キリスト教右派」は、1980年代にその政治的アジェンダを実現させる器として、共和党を標的に定めた。今日「神政政治的キリスト教右派」は、連邦政府と議会に対する影響力を伸ばしつつある。

「神政政治的キリスト教右派」は、銃の自由所持と死刑の厳格な適用を重視する。貧困層と個人に犠牲を強い、富裕層と大企業を優遇する。環境保護・労働安全・公衆衛生に関する法令と条例の撤廃を目指す。国際条約と国連に反対する。再建主義者として「地の支配」の回

復を目指し、諸国家を「キリスト教国家」とするため、急進的外交政策を重視する。政教分離原則を「神話」とみなし、絶対的道德原理を保持し、いかなる反対者も容赦しない。

コーラルリッジ・ミニストリーの主催者で、教育者・作家であるジョージ・グラントはその著書『守りを変える 政治活動のための聖書の原理』で、こう述べている。

「キリスト者は、イエス・キリストのために『地の支配』を回復する義務・使命・任務・聖なる責任を負っている。政府もまた、人生の全領域と同様に、キリストの支配の下に置かれるべきだ。

声を上げるだけではない。われわれは『地の支配』を目指す。

影響力を広げるだけではない。われわれは『地の支配』を目指す。

時間を費やすだけではない。われわれは『地の支配』を目指す。

『地の支配』をこそ、われわれは目指すのだ。

世界征服。それこそ、キリストがわれわれに遂行するよう命じたもうたことだ。福音の力によって、世界を勝ち取らなければならない。それ以下では決して満足してはならない。かくて、キリスト者の政治活動は、その第一目標を『地の支配』の回復に置く。人間・家族・諸機関・官僚機構・裁判所・政府を征服し、キリストの王国とするのである。」（『守りを変える 政治活動のための聖書の原理』50-51ページ）

「神政政治的キリスト教右派」にとって、有権者の無関心・無気力による棄権が、大事な推進力となっている。有権者の無関心のゆえに、よく組織された小さなグループが、選挙候補者の選定に驚くべき影響力を及ぼすことができる。

1989年に刊行され、キリスト教学校とホームスクール運動で教科書として使用されている

『アメリカの摂理的歴史』の中で、マーク・ベリーズとステファン・マクドウェルはこう書いている。「アメリカ国民の無関心・無気力は、キリスト者にとって祝福となり、有利に働くことになる。アメリカのキリスト教人口のわずか10パーセントが目覚め、事が容易であることに気づき、不退転の決意で取り組むなら、アメリカを完全に変革するのにそれほど時間はかからないはずである」（『アメリカの摂理的歴史』266ページ）

709 カルヴァン～カイパー～ヴァンティルが、正統派のラインか？（2）

[山谷](#) - 2005/01/14 16:25 -

返書

貴兄が『スタンダード・ベアラー』誌において最近読まれたという、ヴァンティルとホクセマについての文章は、キリスト教改革派教会の牧師から寄せられた手紙によるものです。もちろんその手紙の部分は、当『スタンダード・ベアラー』誌の立場を反映するものではございません。

当誌においてヴァンティル批判が欠如している、という貴兄からの御批判は、まったくの見当違いであります。『スタンダード・ベアラー』誌1996年5月15日号におきましては、ジョン・フレイムの研究書『コーネリアス・ヴァンティル その思想の分析』（1995年刊）を批判する長い論文を、わたくしが書いております。その書評において、わたくしは、ヴァンティルの神学が全般的に言って矛盾しており、特に、三位一体論において顕著である、と批判いたしました。以下の通りです：

（フレイムが述べるように）神は、三つの位格であるように、一つの位格でもある、そして、三つの本質であるように、一つの本質でもある、と言うのであれば、大方の三位一体論者を当惑させるであろう。「神は三つの位格にして一つの位格であり、三つの存在にして一つの存在である」という教えが、今や、長老教会の三位一体の教義だと主張されているのである。このような定式をフレイムは、「人間の知的高慢を抑制するのに価値がある」と言

う。実のところ、このような矛盾した言説は、無意味なのだ。これこそは、聖潔られたキリスト者の理性を小馬鹿にし、神学的諸命題を台無しにし、三位一体なる神についての信仰による知識を、破壊するものである。かような悪しき神学の源は、「明らかに矛盾した思想」にある。

(『スタンダード・ベアラー』1996年5月15日号、379-381ページ)

当誌がヴァンティル問題にあてるページが何故少ないのかといえは、それは、プロテスタント改革派教会においてはヴァンティルの影響力が皆無であるからです。もし、ヴァンティルの矛盾した神学が、特定の誤謬をもって、他の教派に問題を引き起こしているのなら、その教派の方々が反撃に立てばよいのです。わたしが憂慮するのは、次のようなことです。すなわち、ある人々は、健全な教えに多大な関心を示し、活発な教義論争を好んで見物しつつも、自分たちが反対していると言うその「誤れる教義」に満ちた諸教会に、そのまま留まり続けて、喜んでいることです。当プロテスタント改革派教会では、真理を、真剣に取り扱います。それはつまり、わたしたちが、真理を告白する教会に帰属しているのであり、ヴァンティルのごとき誤謬が得る場所は、わが教会の中には存在しない、ということなのです。

編集者より

■708 カルヴァン～カイパー～ヴァンティルが、正統派のラインか？(1)

[山谷](#) - 2005/01/14 16:22 -

以下に引用するのは、米国プロテスタント改革派教会の隔月刊神学雑誌『スタンダード・ベアラー』2002年7月1日号(第78巻18号)に掲載された投書と、それに対する編集者からの返答です。

批評の欠如に対する批評

小生は、改革派自由出版協会(RFPA)刊行の書籍を数年来読んでいる者です。そしてまた、貴『スタンダード・ベアラー』誌をこのところ購読しても居ります。お尋ねしたい点は、かのコーネリアス・ヴァンティルの異端説を問題として論じる書物を、なぜプロテスタント改革派教会の牧師方は書かれないのか、ということです。オランダ系米国人の神学者ヴァンティルを批判する論文は、貴『スタンダード・ベアラー』誌においても、いまだかつて、目にすることがありません。逆に、これまで貴『スタンダード・ベアラー』誌に現われたものと言えは、ヴァンティルをほめたたえ、ヴァンティルとホクセマがいかに親友同志であったかを論じた数行の文章でしかありません。これでは、読者の中に、ヴァンティルの神学が正統だと思う人が出るかもしれません。ことによれば、オランダ人だと思える人さえいるかもしれない。

もちろん、貴誌におかれては、ヴァンティルが正統的三位一体論から逸脱していることを、ご承知のことでしょう(神は、三つの位格における一つの位格だとする謬説です)。ヴァンティルは、その恩恵論によって全的墮落を否定しました。予知によらずに提供される有効召命を、事あるごとに軽蔑しました。不可抗的恩恵を攻撃しました。特に、理性によって神を理解することは不可能であるとした主張は、二十世紀における最悪の異端説であり、聖書を読むことを不可能にするばかりか、すべての知識を無意味にするものです。

ヴァンティルの主張を二律背反的無意味だと批判したホクセマの論文が(最初『スタンダード・ベアラー』誌に掲載され)一冊に集成されて、トリニティー・ファウンデーションから出版されております。小生は、これにとどまることなく、プロテスタント改革派教会が、カルヴァン主義的異端説の長老派版と言えるヴァンティルの主張を、もっと力を入れて真剣に反駁してくださるのを、心から期待しております。小生の在住の地方では、多くの人がヴァ

ンティルの名を聞いて、オランダ系カルヴァン主義だと思っております。今日、プロテスタント改革派教会は、オランダ系カルヴァン主義の最も純粋な教会だと目されているのですから、貴誌におかれましては、ヴァンティルを真っ先に取り上げて批判する神学的責務がおありだと存じます。ヴァンティルの誤りを貴誌が論じるなら、多くのヴァンティル支持者が群がり集まって反論するであろうと思われますが、しかし、それは、問題でしょうか？ ヴァンティルの思想体系は、その支持者を非改革派陣営において広げつつあります。それゆえに、この厭うべきものから、きっぱりと決別せねばならぬ必要性が、いよいよ大きくなりつつあるのです。願わくは、神が、ペンを取ってこの異端に立ち向かう勇気を、貴誌にお与えくださいますように。改革派信仰を書き続け、出版し続けてくださいますように。

テネシー州キングSPORT在住、モンティー・L・コリアー

704 <被造世界の契約的構造>と<中間領域としての
の天使的秩序>

[山谷](#) - 2005/01/11 13:16 -

さて、<被造世界の契約的構造>を前提としつつ、そこに<中間領域としての天使的秩序>という概念を導入することが可能かどうかを、次に考えて見ましょう。

まず、<被造世界の契約的構造>は、(1) 絶対主権者である神によって制定され、(2) 世界及び世界内存在の一切を根源から規定しており、(3) 世界内存在はこれを変更することが出来ず、(4) 絶対主権者である神すらもこれを変更できない、という四点を掲げることとしましょう。

その上で、<被造世界の契約的構造>は、次の五つのクリテリアによって記述される、とします。

- (1) 超越 (主権者の宣言)
- (2) 上下関係 (統治のシステム)
- (3) 規範 (守るべき掟)
- (4) 制裁 (掟に伴う賞罰)
- (5) 相続 (支配の継続)

上記の記述の中に首尾よく<中間領域としての天使的秩序>を導入することが出来れば、再建主義の「二項図式の世界観」を反駁することが出来ます。

ただし、<天使的秩序>を外部から挿入するとなると、それは、「契約的構造を途中で変更した」ことになりますから、その方法は禁止しなければなりません。そうでないと、古典的な自然法の定義に反することになります。

そこで、あくまで、<被造世界の契約的構造>の『内部作動』による展開として<天使的秩序>が導入された、と考えるのでなければなりません。

このためには、第一番目のクリテリアにおいて、「絶対主権者である神は、アダムが被造世界を統治するよう、宣言した」としておいて、第四番目のクリテリアにおいて、「アダムの契約違反によって、制裁としての呪いが人類に下った」とし、さらに、「呪い」のカテゴリーの中に<中間領域の天使的秩序>を入れて、その上で、「アダムに対して留保されたく地の支配権」が、<中間領域の天使的秩序>に一時移行された」とします。

これで、<被造世界の契約的構造>の『内部作動』による展開として<中間領域の天使的秩序>が導入されることとなり、なおかつ、<被造世界の契約的構造>そのものには、何ら書

き換えによる変更がない、と言うことが可能になります。

以上を踏まえた上で、＜天使的秩序としての諸国家・諸民族・諸文化・諸宗教・諸言語＞を論証することが出来たなら（これはおもに、申命記・詩篇・イザヤ書・ダニエル書・パウロ書簡・ペテロ書簡の詳細な注解に基く旧新約聖書神学の研究に拠ることとなりますが）、結論として、「＜被造世界の契約的構造＞に参照して、中間領域は真空ではない」と言うことが可能になります。よって、リベラル神学やヒューマニズム（人本主義）の学問に一切拠らずに、純粋なファンダメンタリストの立場だけに拠って、再建主義が反駁されたこととなります。

残りの仕事は、ガラテヤ書の詳細な注解を出発点として＜律法の悪鬼的天使的性格＞を論証した上で、使徒行伝15章の「ノアの四戒」の公会議決定を＜自然法の是認＞として論証することが出来たならば、＜被造世界の契約的構造＞を単純に「モーセ律法」と同一視しようとする再建主義が、完全に反駁されたこととなります。

703 ＜被造世界の契約的構造＞と自然法

[山谷](#) - 2005/01/11 11:59 -

再建主義思潮は、コーネリアス・ヴァンティルの「前提主義」によるキリスト教弁証論から決定的な影響を受けています。

そのヴァンティルにしても、キリスト教弁証論を展開する以上は、＜信者と未信者の間の何らかのコミュニケーション可能性＞を「前提の前提」としないかぎり、そもそも、キリスト教弁証論が成り立たなくなる恐れがあります。

というのも、ヴァンティルは、＜神の認識と、墮罪した人間の認識は、完全に異なる＞としており、それゆえ、＜聖書正典を認識の出発点としない限り、人間は何事も正しく認識し得ない＞という「前提主義」を採るわけです。そして、そこから出発してキリスト教弁証論を展開しようとする、それは、「特別召命を受けて回心し、聖書正典の権威を認めるようになった人にのみ通ずる弁証論」ということになってしまいます。

これでは、サークルの内側に対してだけ意味を持つ弁証論ということになってしまいますから、＜異教徒と未信者に対してキリスト教を弁証する学＞としてのキリスト教弁証論（Apologetics）としては、ナンセンスになってしまうのです。もしそう考えるのだとしたら、ヴァンティリズムも再建主義も、キリスト教弁証論という看板を降ろさざるを得ないでしょう。

そこで、ヴァンティルは、「一般恩恵」という概念を慎重に避けつつも、「イマゴ・デイ」の概念の限定用法を導入することによって、＜信者と未信者との間の共通基盤＞を想定する、という解決方法を取ろうとしたわけです。

この場合の「イマゴ・デイ」は、ブルンナーの言う「結合点」とも、バルトの言う「関係性としてのイマゴ・デイ」とも異なる、言わば、「＜被造世界の契約的構造＞に根ざした＜宗教的感覚＞としてのイマゴ・デイ」とでも言うべきものとなっています。

その内容は、（１）絶対主権者の存在、（２）絶対主権者への畏怖の念、（３）絶対主権者の法による支配、（４）絶対主権者への服従義務、（５）絶対主権者に違反した場合の裁きの正当性、に対する生来的宗教的感覚を万人は持っているが、それは、墮罪の結果として抑圧されており、万人は、その感覚に従って意志決定することが出来ない状態にある、と説明されています。

ここから考えたとしても、「＜被造世界の契約的構造＞によって、世界及び世界内存在としての人間の在り方が、すべて根源的に規定されている」と見る「創造の秩序としての契約的世界観」は、＜自然法＞の概念に相当近い、ということが出来るでしょう。

古典的な自然法の定義としては、（１）被造世界を根源的に規定する永遠法・普遍法であり、（２）絶対主権者である神によって制定され、（３）人間がそれを変更することは出来ず、（４）神すらもそれを変更することは出来ない、という四点があります。

問題は、第四番目のクリテリアですが、もし再建主義者が「神は、被造世界の契約的構造を途中で変更する主権的な自由を、絶対主権者の意志決定として、自ら放棄した」と考えるのであれば、これはいよいよ、＜自然法＞に近づいた、ということになります。

701 科学と文明、そして文化

HN - 2005/01/08 22:10 -

一般恩恵というのは、理性的キリスト者（ファンダメンタリストも含む）にとって、捨てることのできない考え方だと思います。なぜなら、それによってのみ、我々は自分たちの信仰を唯一最高のものとしながらも、他宗や他民族の人々に対して偏見無く接することができるからです。

再建主義者やアメリカ南部の保守的な人々は、今日の科学と文明の成果をすべてキリスト教に帰しています。

しかし、イスラム教徒たちの中には、今の文明は、イスラム圏における学問的・文化的伝統をも受け継いだものであると言います。

確かに、ギリシャ数学ひとつをとっても、そうです。ヨーロッパでは戦乱などのため失われていたギリシャ数学の伝統が、中東ではその後も継承され研究されており、代数学の大家もイスラム世界から出ています。これらは再びヨーロッパに輸出されていき、そこで新たな実を結ぶことになりますが、このような例はほかにもたくさんあります。

イスラム教徒であれ、仏教徒であれ、彼らが神以外の存在によって創造されたということは有り得ないことです。

確かに永遠の救いや、最高度の教えは、キリストから来るものですが、やはり異教徒のうちにも神は働きたまいて、「一般恩恵」を推進力として世界をより幸福なものにされているのだ、と思います。

その恵みの多くは地上的なものでしょうけど、我々はそれを感謝して受け取るべきだと思うのです。

再建主義の方は、このHPを見ておられるのでしょうか？

もし見ておられたら、質問します。

「キリスト教圏以外では、一切の有益な文明は誕生せず、また誕生し得なかったのでしょうか」と。

700 素朴な疑問

山谷 - 2005/01/08 19:29 -

再建主義は、一般恩恵と自然法を否定するわけですが、しかし、「被造世界の契約的構造」という概念を、つらつらながめてみると、これは、＜創造の秩序としての一般恩恵＞であ

り、＜創造の秩序としての自然法＞だと言えるのではないのでしょうか？

699 被造世界の契約的構造について（2）

[山谷](#) - 2005/01/06 21:23 -

6. キリスト高举は、＜キリストのからだ＞なる教会を生み出した。教会は、キリスト初臨と再臨の間である＜中間時＞において、＜聖化のプロセス＞を進行中である（すでに・しかし・いまだ）。＜中間時＞の世界においては、終末論的聖化の共同体である教会に加えられた人々と、未信者とが、混在して、生活している。

7. ＜中間時＞においては、＜未信者が、その全的墮落にもかかわらず、秩序ある安寧な生活を送れるよう保障するが、救いを与えはしない「一般恩恵」＞としての＜中間領域の天使的秩序＞の必要性が、なおも、存続している。こうして、いまや、キリスト高举によって打破され、キリストの頭首権に服属させられ、キリストに仕えるしもべとされたく中間領域の天使的秩序＞が、キリストの全宇宙的・王権的支配のエージェントとして、引き続き、「地の支配」を委託されている。

8. 「地の支配」は、いまや、アダムの手の中に回復されている。なぜなら、高举のキリストは＜第二のアダム＞として、すでに、全宇宙の支配権を御自分の手中に収めておられるから。ただし、＜中間時＞においては、高举のキリストは、「地の支配」の実行を、引き続き＜中間領域の天使的秩序＞に委任しておられる。こうして、＜中間時＞の世界においては、キリストの宇宙的・王権的・頭首権的支配のもとにあって、国家と社会と教会とが、並存することになる。

9. キリストの再臨をもって、＜中間時の中間領域としての天使的秩序＞は解消され、キリストが直接に「地の支配」を実行することとなる。キリストの再臨に際して、終末論的聖化の共同体である教会は「栄化」され、＜聖化のプロセス＞が完成する。こうして、諸聖徒は、キリストと共に「地の支配」を実行する。かくして、＜被造世界の契約的構造＞から＜天使的秩序＞が抜き出され、本来の原初的宇宙構造が回復されることとなる。これが「新天新地」である。

10. してみると、二契約論パーシャルプレテリズム再建主義の誤謬は、（1）アダム契約に随伴する「呪い」の範囲を狭小化しおり、ために、（2）呪いとしての天使的秩序を見落とすこととなり、ために、（3）中間領域の天使的秩序が挿入されたことによる被造世界の契約的構造の変化を捉えておらず、ために、（4）呪いの職務を遂行するために旧約律法の制定に関与した天使的秩序を勘案しておらず、ために、（5）旧約律法の本質を捉え損ねる結果となっている、ということができる。

697 被造世界の契約的構造について（1）

[山谷](#) - 2005/01/06 16:28 -

古典的契約神学に忠誠を尽くす「二契約論パーシャルプレテリズム再建主義」は、ラッシュドゥーニーの『聖書律法綱領』に従い、＜被造世界の契約的構造＞というパラダイムを提示しています。

これは、被造世界が、神と人間との間の契約関係によって根源的に規定されているために、「万物及び個々の事象は、契約的構造という＜存在の秩序＞において在らしめられている」と見る世界観です。

この＜被造世界の契約的構造＞は、次の五つのクリテリアで構成されます。すなわち：

- (1) 超越（主権者の宣言）
- (2) 上下関係（統治のシステム）
- (3) 規範（守るべき掟）
- (4) 制裁（掟に伴う賞罰）
- (5) 相続（支配の継続）

さて、再建主義者は、＜被造世界の契約的構造＞のパラダイムにおいて＜契約とは旧約律法である＞とすることにより、「旧約律法による国家と社会の再構成こそ、キリスト者の使命であり目標である」と主張するわけです。

この考え方を、「反再建主義」の立場に立って、＜アダム契約に伴う祝福と呪い＞という観点から始めて、以下の順序で反駁したいと思います。

1. ＜業の契約＞である「アダム契約」には、それを遵守した場合の「祝福」と、それに違反した場合の「呪い」が伴っている。

2. アダム契約の「呪い」の内容は、(1) 死、(2) 楽園からの追放、(3) 苦役としての労働、(4) 中間領域としてのケルビムの設置、という四点である。

3. 世界創造の当初に意図されていた＜アダムによる「地の支配」の実行＞は、アダムの契約違反により、人間に代わって「ケルビム」に委託されることとなり、それに伴って、＜被造世界の契約的構造＞の中に、＜中間領域としての天使的秩序＞が挿入されることとなった。これが、「墮罪後の経緯」である。＜中間領域としての天使的秩序を挿入された契約的構造＞は、「モーセの幕屋」において絵画的に示されている。

4. かくて、＜被造世界の契約的構造＞の五つのクリテリアは、＜中間領域としての天使的秩序＞を挿入された結果、次のように再記述されることとなる。すなわち：

(1) 超越としての＜天使的秩序を介した主権者の宣言＞

これには、「主の御使い」「天使」を媒介とした神の顕現及び律法制定が含まれる。

(2) 上下関係としての＜天使的秩序を介した統治のシステム＞

これには、位、主権、支配、権威、ストイケイアに委託された「国家の絶対主権」と「社会の分散主権」による統治のシステムが含まれる。

(3) 規範としての＜天使的秩序に規定された守るべき掟＞

これには、位、主権、支配、権威、ストイケイアによって委任統治されている＜15の法領域＞に即した、それぞれの法、自然法、律法が含まれる。

(4) 制裁としての＜天使的秩序が執行する賞罰＞

これには、天使的秩序が執行する＜国家の絶対主権の行使としての賞罰＞及び＜社会の分散主権の行使としての賞罰＞としての、国家的制裁、社会的制裁、悪鬼的制裁が含まれる。

(5) 相続としての＜天使的秩序による支配の継続＞

これには、天使的秩序が、神から指定された「領域」において支配を行うという、＜「主権領域」における支配＞あるいは＜「領域主権」の行使としての支配＞が含まれる。

5. <被造世界の契約的構造>に挿入された<中間領域としての天使的秩序>は、キリスト高挙の出来事によって打破された。キリスト高挙によって、<中間領域の天使的秩序>は、キリストの頭首権に対して服属させられ、<キリストに仕えるしもべ>とされた。

■696 山谷先生

HN - 2005/01/04 13:42 -

レス、ありがとうございました。

「陰謀論」がアメリカでは、ポップカルチャーとして楽しまれている面があると聞いて、少し安心しました。この点、アメリカ人は、大人なんですね。

これがナチスの時にみたいに、人々を誤った道に扇動することになれば、大変ですけど、今のアメリカ人はそこまで幼稚ではないということですね。（再建主義者は別として。）

これからも、山谷先生の記事を楽しく読ませていただきます。

ありがとうございました。

■695 HNさまへ（2）

[山谷](#) - 2005/01/03 23:40 -

さて、テレヴァンジェリストの中でも宗教右派に大きな影響力を持ち、自身も大統領選挙に出馬したパット・ロバートソン師ですが、残念なことに、あらゆる非難中傷合戦が許容される大統領選挙において、パット・ロバートソン陣営は「反キリスト勢力の陰謀」を唱えてキャンペーンを行いました。その内容は、フリーメーソン・イルミナティ陰謀論でおなじみの<NWO（新世界秩序）>や<バビロンとしての国連>といったものです。NWOとか、バビロンとしての国連というモチーフは、あのベストセラーの黙示録小説『レフトビハインド』でも物語の骨組みとして使われているので、よくご存知でしょう。

このような、宗教右派の選挙キャンペーン用の誹謗中傷の系統から出てきたのが、<クリントン大統領＝反キリスト説>です。宗教右派の中の狂信的な人たちの中には、「クリントン大統領こそ聖書に預言された反キリストであるに違いない」と真剣に信じていた人たちが相当数おり、その人たちは、不倫スキャンダルを利用して大統領を失脚させるために、大々的なキャンペーンを行いました。

なぜ、合衆国の大統領選挙において、これほど過激な選挙キャンペーンが戦われるのかというと、次のような説があります。

理由としては、まず、強大な権限を持つ大統領のポストが、勢力が完全に均衡した二大政党の間で争われるために、選挙戦が不可避免的に極度に白熱したものとなり、しかも、選挙戦中の誹謗中傷合戦が「運動スタイル」として文化的に許容されているために、あらゆる種類の怪情報が飛び交うということ。

次の理由として、アメリカ国民の「陰謀好き」という文化的土壌。初期の大統領選挙の時代に行われた「イルミナティ陰謀論」による敵対陣営への誹謗中傷から始まって、その後も、「フリーメーソン陰謀論」、「ユダヤ人陰謀論」、「黄色人種陰謀論」、「ローマカトリック陰謀論」、「共産主義者陰謀論」と、その時代時代に、さまざまな陰謀論が流布され、激しい選挙戦が行われて来たわけです。第二次世界大戦直後に吹き荒れた「赤狩り旋風」などが、現代のものとして有名ですね。あのときは、連邦議会、裁判所、マスコミ、大企業、映

画産業に至るまで、あらゆるものが「隠れた共産主義者によって支配されている」と、多くの人が信じ込んでしまいました。日本国憲法を起草したGHQの進歩的・社会民主主義的な高級将校たちも、この「赤狩り旋風」で左遷されてしまったわけです。

「陰謀好き」というのは、人気テレビドラマシリーズ「Xファイル」に典型的に見られるように、もはや、「アメリカ文化」であると言っても、けして過言ではないでしょう。

もちろん、大多数のアメリカ国民は、このような「陰謀論」を、ポップカルチャーとして楽しんでいる傾向があるわけです。しかし、中には、真剣に憂慮して、自身の投票行動に誠実に反映させる人たちもいるわけです。宗教右派というのは、そのような、投票行動に結びつきやすい層、ということになります。

そうして、その宗教右派が大統領選挙のキャスティングボードを握っている以上は、これまでもそうであったように、今後もまた、大統領選挙のたびに、さまざまな「陰謀論」が再生産されていくことになるであらうでしょう。なぜなら、選挙運動を展開する側は、選挙民の投票行動を左右する関心事であるならば、陰謀論であろうが、何であろうが、あらゆることを利用しようとするからです。それが、商業主義的合理主義であるわけですね。

おそらくは、均衡する二大政党制が続く限りは、陰謀のネタというのは、尽きることがないのです。

なお、近年のアメリカで流布されている陰謀論には：

前千年期再臨説のパラダイムによる、フリーメーソン・イルミナティー陰謀論

後千年期再臨説のパラダイムによる、ヘーゲル主義・スカルアンドボーンズ陰謀論

ジョン・バーチ協会の50年代のニュースレターを起源とする宇宙人陰謀論

・・・などがメジャーです。

■ 694 HNさまへ (1)

[山谷](#) - 2005/01/03 23:39 -

リベラル人口と、保守層人口が、ほぼ均衡している現在のアメリカ合衆国においては、宗教右派の票が、大統領選挙におけるキャスティングボードを握っているわけです。

この「宗教右派」と呼ばれる投票者集団は、レーガン政権を誕生させた勢力として、当時のマスコミから大きな注目を浴びました。80年代のマスコミの分析によれば、＜宗教右派を誕生させたのは、テレヴァンジェリスト（テレビ伝道者）であった＞ということになっています。

しかし、再建主義最大の論客、ゲイリー・ノースによれば、宗教右派を誕生させたのは、テレヴァンジェリストではなく、故ジョン・ルーサス・ラッシュドゥーニーの再建主義シンクタンク「カルケドン財団」であった、ということです。これは、ノース自身が、ラッシュドゥーニーの逝去に際してのコラムに、自分自身で記していることです。

ラッシュドゥーニーの再建主義は、＜合衆国の政治と文化は、真空の中間領域になっており、悪魔的な自然法と人本主義（ヒューマニズム）によって支配されているのが現状であるから、キリスト者は合衆国の政治と文化を合法的に征服して、旧約律法に決疑論的に根拠した政治と文化を形成することにより、後千年期王国を実現するべきである＞という、再建主

義テーゼを提唱するものです。

この再建主義テーゼが、宗教右派のキリスト者に対して、キリスト者が政治変革・文化変革に邁進するための理論的根拠を与えたわけです。そうして、政治変革と文化変革に着手するための前段階として、教育変革としての<公教育批判>と<ホームスクーリング運動>を行ったわけです。

テレヴァンジェリストとして大統領選に出馬したパット・ロバートソン師だけでなく、あの『レフトビハインド』を著したティム・ラヘイ師、さらに、教会成長運動の推進者であるC. ピーター・ワグナー師らも、再建主義テーゼの影響を受けています。そうして、<合衆国の政治と文化（17の法領域）をキリスト者が征服し変革する>という政治文化綱領なども起草されています。

ただし、本来の再建主義が<後千年期再臨説+セオノミー>という組み合わせであるのに対して（古典的再建主義）、宗教右派の再建主義は<前千年期再臨説+セオクラシー>（新再建主義）という体裁を取っていることから、古典的再建主義者は、新再建主義者の宗教右派を「異端」あるいは「贋物」として徹底的に批判する傾向があります。

■ 693 HNは福音派

HN - 2005/01/03 21:22 -

申し遅れましたが、私HNは、救世軍ではありませんが、福音派の教会に名を連ねているものです。
ウエスレー大好き人間です。

■ 692 再建主義は悪魔である

HN - 2005/01/03 21:18 -

山谷先生。

いつも、すばらしい記事をありがとうございます。

あまりにも興味深い記事が多いので、以下のHPに引用させていただきました。断りのほうが後に回ってしまって、すみません。

以下は、イラク問題・ブッシュ政権などを扱っている掲示板です。

私は、右翼は嫌いです。特にアメリカの右翼は。。。

<http://www.1ch.tv/thread.php?th=1079&ar=7&ca=2>

■ 691 ヘーゲル問題（4）

[山谷](#) - 2004/12/28 20:07 -

6. カルヴァンは、二重予定説を言うことにより、「恩恵」の絶対優位を確定させ、「自然」を従属位置に置いた。しかし、<神の指によって記された律法と自然法>をも説くことによって、「一般恩恵」の場所をきちんと確保した。ただし、一般恩恵は、<墮落した人類が自滅することがないよう、社会の秩序と安寧を可能にさせる恩恵であるが、永遠の救いは与えない>という但し書きを付けられた。

7. カルヴァン没後の古典的カルヴァン主義が、二重予定説を非常に強調したために、「決

定論的世界観」へと傾き、世界史における＜自律＞の場所が消滅しかねない事態となった。これに対処するため、コッツェーユスは、「自然」と「恩恵」の動的な展開を、「業の契約」と「恵みの契約」の展開として聖書把握に投影させ、契約神学を提案した。厳格な二重予定説は、契約神学と抱き合わされることによって、そのバランスを回復し、「恩恵」と「自然」の対立が「神の栄光」に向かって時間軸を進行して行くという契約神学的歴史理解が誕生した。

8. 「自然」と「恩恵」の対立が動的に展開して「神の栄光」へと終局する契約神学的歴史理解は、ヘーゲルに継承され、二つの対立項が動的に展開して止揚に向かうという「ヘーゲルの歴史哲学」へと世俗化された。

9. 一方、「決定論的世界観」に傾きつつあった古典的カルヴァン主義に対して、コッツェーユスとは別の案を提示したのがアルミニウスである。アルミニウスは、「恩恵」と「自然」の対立を回避する中間項としての「一般恩恵」を再提案し、一般恩恵の内容を＜聖霊の光によって照明された理性＞とした。このことは、『キリスト教綱要』でも大陸系改革派諸信条でも述べられていることであるから、アルミニウスにしてみればこれは、行き過ぎたカルヴァン主義をカルヴァン本来のラインに連れ戻す行為でしかなかった。しかし、古典的カルヴァン主義が大勢を占める状況の中で、アルミニウスの提案は排斥されることとなった。

10. 歴史に「もし」は、あり得ないが、もし、古典的カルヴァン主義が、コッツェーユスとアルミニウスという二つの選択肢のうち、後者を選んでいたら、その後の流れにおける「ヘーゲルの歴史哲学」の登場は、＜なかったかもしれない＞。なぜなら、アルミニウスの回答においては、「一般恩恵」が接着剤として「恩恵」と「自然」をつなぎとめてしまうので、歴史における「恩恵」と「自然」の対立による動的展開を求める必要性が、解消されてしまうからである。

以上のようなわけで、＜コッツェーユスかアルミニウスか＞という選択が、近代史を決定した、とも言えるわけです。そこまでは言えないとしても、少なくとも、ヘーゲル問題に対して責任を負うべきなのは、契約神学の方なのであって、ウェスレアン・アルミニアン神学には、関係のない話なのです。

689 ヘーゲル問題（3）

[山谷](#) - 2004/12/28 20:02 -

歴史神学的には、契約神学のラインからヘーゲルの歴史哲学が生み出された、という、「因果関係」が言われているわけです。

そこで、再建主義側から、ヘーゲル哲学といっしょくたにされて非難を受けている「ウェスレアン・アルミニアン神学」の＜位置づけ＞ということが問題になります。

ヘーゲル問題に対して、何らかの責任を負うべきであるのは「契約神学」のほうなのであって、「ウェスレアン・アルミニアン神学」は、ヘーゲル問題については、まったくの無罪潔白であることを、以下、弁証してみましょう。次のような構図になります。

1. 東方教会が、「神が人となりたるは、人が神となるため」という大雑把な定式を立てることで不毛な恩恵論争を回避し、さらには、恩恵論争を止めない聖職者の舌を切る措置まで取ったのに対して、西方教会では、ペラギウスとアウグスティヌスが徹底的な恩恵論争を展開した。これにより、西方教会の神学的パラダイムに、相対立する「恩恵」と「自然」という二項図式が、非常に強調されたかたちで入ってくるようになった。

2. 「恩恵」と「自然」の二項図式は、アウグスティヌスが『神の国』で開陳した歴史神学により、動的に展開する「神の国」と「地上の国」という図式で、時間軸上に投影された。

3. 「恩恵」と「自然」、さらに、「神の国」と「地上の国」という二項図式は、「一般恩恵」の概念、さらに、「天使的秩序」の概念を<接着剤>にすることにより、衝突と空中分解を回避することを得た。しかし、中世全期を通じてたびたび「恩恵論争」が再燃した。多くの場合、恩恵論争は、恩恵の絶対優位を言う「二重予定説」と、恩恵を注入された自然の協働を言う「予知説」との対立として戦われた。

4. 宗教改革は、スコラ学を徹底排除したために、「一般恩恵」の概念範疇が縮小され、「天使的秩序」に至っては根絶された。これにより、中世全期を通じてバランスを保ってきた「恩恵」と「自然」の対立、さらに、「神の国」と「地上の国」の対立という争点が、非常に激しいかたちで燃え上がることとなった。

5. ルターは、政教分離を言うことにより、「神の国」と「地上の国」の<住み分け>を定めた。これに対して、あくまで「神の国」の絶対的優位を説いたのが、ミュンスター千年王国派であった。ミュンスター千年王国の惨劇は宗教改革者を震え上がらせ、結果として、実践神学上の解決策が採られ、「神の国」と「地上の国」の対立は、ルターの<神の国の見えざる左方の支配>、カルヴァンの<政治的一般恩恵>の概念を使って「中間領域」を確保することにより、政教分離へと収まった。

688 ヘーゲル問題（2）

[山谷](#) - 2004/12/28 19:43 -

さて、再建主義者が目の仇にしているヘーゲルの歴史哲学が、実は、再建主義者の金科玉条としている「契約神学」に起源を持つ、と言ったら、いったいどうことになるでしょう？

日本における組織神学の大家、大木英夫教授はこう述べています。

「コッツェーユスの契約神学は、敬虔主義者ベンゲルやエーティンガーの聖書主義的救済史思想にうけつがれ、やがてその系統から第19世紀のヘーゲルやマルクスの世俗的歴史哲学が生み出されることになる」

687 ヘーゲル問題（1）

[山谷](#) - 2004/12/28 19:37 -

再建主義の特徴のひとつに「陰謀史観」があります。再建主義の父ラッシュドゥーニーは「歴史とは、陰謀の歴史である」という名言（？）を述べていますし、その女婿ゲイリー・ノースは『聖書的陰謀論』という本を著しているほどです。

再建主義の陰謀史観は、言わば「ヘーゲルの陰謀」とでも呼ぶべきものです。

再建主義の歴史観は、その掲げる「オプティミスティックな後千年期王国論」という売り看板と裏腹に、<近代史とは、輝かしい宗教改革の勝利の果実が、ヘーゲルの陰謀結社によって毒され、腐敗変質し、坂を転げ落ちて行く歴史である>ということになります。

そして、この陰謀の主役は、アメリカ東部の名門エール大学の中に公然と設立された、ヘーゲル主義の学生秘密結社「スカル・アンド・ボーンズ」である、と言うのです。

再建主義によると、スカル・アンド・ボーンズは、合衆国政府を牛耳っているのみか、20世紀の一連の共産主義革命、さらに、国連までも、背後から操っている、という話になってい

ます。

こうして、再建主義による「現代社会批判」は、共産主義批判、連邦政府批判、国連批判、ヘーゲル哲学批判、という形態で展開されて行くことになります。

そうして、どういう論理的連関であるのかはまったくもって不明ですが、再建主義者によれば、＜再建主義に共鳴しないキリスト者は、ことごとく、ヘーゲル主義の加担者である＞という汚名を着せられることとなってしまうのです（！）

□ 686 オープンティズム

[山谷](#) - 2004/12/27 17:45 -

＜非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義＞のサークルは、最近、「オープンティズム」という神学説に対して強い関心を示しているようです。

オープンティズムとは、神の視座を時間概念の枠組みの外に位置づけることによって、古典的カルヴァン主義の厳格な二重予定説を否定し、人間の自由意志による選択を担保しようとする、近年福音主義神学界に出てきた神学説です。（しかし、この考え方は、オックスフォード大学教授のC.S. ルイスが第二次世界大戦中にBBCのラジオ放送で行ったキリスト教弁証論を本にまとめた『キリスト教の精髓』の中で、すでに開陳されており、それゆえ、けして新しい神学説とは言えません）

非二契約論パーシャルプレテリズムが、なぜ「オープンティズム」に対して強い関心を示すのでしょうか？

非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義は、古典的二契約論の契約神学が、アダム契約を「業の契約」と捉えていることを、問題視しています。つまり、「業の契約」が非聖書的な概念である＜自律＞の侵入視点として機能してしまっているために、古典的二契約論を異端的であると見ているのです。

そこで、非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義は、アダム契約をも「恵みの契約」であった、と見ることによって、自律の侵入地点を排除しようとするわけです。

ところが、＜古典的カルヴァン主義の二重予定説＞と＜契約神学＞の枠組みにおいて、＜キリストの新契約＞のみならず、＜アダム契約＞をも「恵みの契約」として捉えてしまうと、それは、「恩寵」＋「恩寵」の組み合わせとなってしまう、これで確かに自律の侵入地点は断つことは出来るわけですが、結果として、「神の恩寵による絶対的決定論的世界」となってしまうこととなります。

つまり、わたしたちの宇宙は、人間の自由意志から素粒子の動きに至るまで、すべての現象が、神によって完全に決定されており、それゆえ、宇宙には「神が征服すべき真空の中間領域は存在しない」ということになってしまい、これであると、キリスト者が中間領域を征服して悪鬼的な自律の解消を目指すという、再建主義パラダイムが、足元から崩壊することになりかねません。

これでは、自分の手で再建主義の首をしめることになりますから、非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義は、古典的カルヴァン主義の厳格な二重予定説を緩和させ、墮罪前予定説（スーブラプサリアニズム）ではなく、墮罪後予定説（インフラプサリアニズム）を採用することによって、かろうじて、宇宙内に＜自律＞の地点を確保しようとするわけです。

ところが、「オープンティズム」が出している提案を見てみると、それは、非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義にとって、まことに好都合な内容を持っているのです。

すなわち、（１）時間は被造物の一部であり、（２）神は絶対他者であるゆえに、時間の枠組みの外部に位置しており、（３）人間にとっての過去も現在も未来も、神にとってはすべて現在であり、（４）アダムの意志決定も、キリストの意志決定も、過去・現在・未来のすべての人類の意志決定も、神にとってはすべて現在の出来事であり、（５）神は、神にとっての「現在」における人間の自由な意志決定を見た上で、全宇宙の動きを摂理的に決定しており、（６）それゆえ、神は人間の自由な意志決定の内容にまで関与しないとしても、なおかつ、神は、全宇宙の動きを完全に支配することが可能である、というのです。

このような「オープンティズム」は、宇宙から自律の地点を完全に消し去って再建主義を崩壊させかねない古典的カルヴァン主義の二重予定説に代って、再建主義を救ってくれる可能性が、大いにあるわけです。

非二契約論再建主義は、世界信条やウェストミンスター信仰告白に必ずしもこだわらないく非信条派であるわけですから、扱いにくい二重予定説の有望な代替案である「オープンティズム」が、たとえ二契約論再建主義から異端として批判されたとしても、さほど気に病まずに、将来的には「非二契約論パーシャルプレテリズム・オープンティズム再建主義」として公式に旗を掲げる可能性があるでしょう。

しかし、こうなりますと、非二契約論パーシャルプレテリズムの恩恵論は、いよいよ、ウェスレアン・アルミニアンの恩恵論と大差ないものとなってしまいます。

非二契約論パーシャルプレテリズムがその方向に進むことを選ぶなら、結果として、ウェスレアン・アルミニアンの恩恵論が、そもそも正しかったことをあかししてくれることになる、と言ったら、言いすぎでしょうか？

684 歴史修正主義と再建主義

山谷 - 2004/12/19 23:52 -

歴史修正主義とは、近現代史の通説を、政治的に偏向した視点に立って書き換えようとするムーブメントであるわけですが、米国の政治結社ウォチャーの中では、再建主義を「歴史修正主義」として捉える見方が強いようです。

その際、指摘されるのは、再建主義についての、下記のような特徴です。

1. 再建主義の創始者ラッシュドゥーニーが、米右翼団体「ジョン・バーチ協会」のメンバーであったこと。また、その著作において、ジョン・バーチ協会を「初代教会に比肩する優れた組織」として高く評価していること。さらに、再建主義の論客の多くが、ジョン・バーチ協会の現役メンバーであること。
2. ジョン・バーチ協会が掲げる「反連邦主義」と「陰謀史観」が、ラッシュドゥーニーにもゲイリー・ノースにも顕著に見られること。
3. ラッシュドゥーニーもゲイリー・ノースも、ナチによるホロコーストについて、偽証説・誇張説を採り、犠牲者数を大幅に少なく見積もっていること。（通説が600万人とされているのに対して、80万人程度としている）
4. ラッシュドゥーニーが、「白人キリスト教徒は、聖書に根拠した文明を数千年にわたって営んで来たことにより、結果として、優秀な遺伝的形質を獲得することになった」と主張

していること。これに対し、有色人種の文化は、魔術と呪術に根拠しており、劣っている、としていること。

5. ラッシュドゥーニーは、南北戦争の意義を、南部の<キリスト教文明>と、北部の<ユニテリアン・理神論・フリーメーソンの文明>との間における<文明の衝突>として見ており、「聖戦」であったと位置づけていること。南部が敗北した原因は、北部が文明として優れていたからではなく、南部が聖書の原理に対して徹底的に忠実ではなかったため、としていること。

6. 再建主義者は、合衆国憲法が、聖書の原理に根拠して作成されたものではなく、独立革命を途中で奪取したユニテリアン・フリーメーソンが掲げる「理神論」に根拠して作成されたゆえに、異教的である、と捉えていること。

以上の特徴のゆえに、再建主義は「歴史修正主義」と見られているわけです。

再建主義の特徴は、神と人間との間の「中間領域」の存在を否定する「二項図式」の世界観にあります。

この「二項図式」の世界観においては、諸国家の憲法の精神や統治システムは、「聖書に根拠した神的なもの」であるか、「ヒューマニズムに根拠した悪魔的なもの」であるか、どちらかしか、あり得ません。

そこで、「二項図式」の世界観に立つ再建主義は、当然のことながら、近現代の諸国家の憲法の精神や統治システムを、すべて例外なく「悪魔的」と断定しなければならないことになります。

これにより、民主主義は「ヘーゲル主義の陰謀結社スカルアンドボーンズが流布させたもの」という見方が生まれることになり、さらに、自由や人権は「ユニテリアン・理神論の陰謀結社フリーメーソンが流布させたもの」という見方が生まれることになります。（陰謀論的近代史観）

注意しなければならないことは、たとえ再建主義ではなくても、「二項図式」の世界観に立ってしまうと、近現代の憲法の精神・人権思想・統治システムを「悪魔的」と断定してしまう傾向が見られることです。

683 登録商標だった！？

山谷 - 2004/12/16 18:31 -

フルプレテリズムに対して、インターネット上で精力的に反駁を試みているディー・ディー・ウォレン氏は、プレテリスト推進サイト「プレテリスト・コム」の主催者であるヴァージル・ヴァドゥヴァ氏から次のようなメールを受け取った。

「『プレテリズム』は、アメリカ合衆国の登録商標第78224061号となっています。貴姉は、わたしたちの許可を得ずに、御自分のサイトにおいて、契約神学に関連した教育資料として意図的に『プレテリズム』という語を使用し続けておられ、しかも、プレテリズムという語を含んだドメイン・ネームをも使用しておられます。それゆえ、わたしは、貴姉に対して、今後、『プレテリズム』『プレテリスト』という語、及びそれを含んだドメイン・ネームを使用しないよう、公式に要求します。再度の要求はいたしません。速やかな措置が取られない場合には、当方の弁護士を通じて御連絡差し上げることとなります。」

これに対して、ディー氏は、「わたしを訴えるなら、訴えなさい！」と言って、太字フォントで「プレテリズム、プレテリスト、プレテリズム」と連呼している（笑）

しかし、その一方で、プレテリズムを「ネオ・ヒメナエアニズム」（NeoHymenaeism）と呼びかえる防衛策も取っている。

大変なことである・・・

682 薄い境界線

[山谷](#) - 2004/12/13 15:01 -

家父長政治的再建主義の主張を読んで、いまさながらに考えさせられたことがあります。

再建主義は、国家権力が家庭から奪取した「教育権」を、再び家庭に取り戻すべく、「ホームスクーリング運動」を推進して来たわけです。

ところが、もし、神がアダムに「地を支配せよ」と命じた時点で意図していた権力形態が「家父長政治」であったのならば、諸国家は、家庭から「教育権」を奪っただけではなく、司法権、立法権、行政権、さらには、防衛権をも、奪ったのだ、ということになるはずで

す。

そうしますと、ことは、家庭における教育権の回復で済むだけの話しではありません。家庭における防衛権の回復にまでも話しが及ばなければ、本当の再建主義ではない、ということになります。

かくして、各家庭が個別に武装して、防衛のための軍事行動を行うべきだという、アメリカの白人分離主義団体「ミリシア」（武装民兵集団）の主張と、紙一重の世界に入っていくわけです・・・。

681 天使的国家権力論と再建主義

[山谷](#) - 2004/12/13 14:47 -

再建主義を論駁するために、これまで、新約聖書神学に根拠した「天使的国家権力論」を使って反論して来たわけです。

ところが、なんと、再建主義陣営の中に、「天使的国家権力論」を主張するグループが存在していました（！）

彼らは、家父長政治的再建主義・キリスト教的無政府主義の立場に立つ人たちです。

その主張によると、神がアダムに「地を支配せよ」と命令した時点では、まだ＜墮罪後の経綸としての国家権力＞が存在しておらず、＜墮罪前の経綸としての家父長政治＞が存在していただけだ、ということです。

それゆえ、来るべき再建主義社会においては、キリスト教国家・異教国家・世俗国家の区別を問わず、あらゆる形態の国家権力を解消・解体して、＜司法・律法・行政・教育・防衛・文化＞などの領域主権をすべて家族の手に取り戻し、律法に基づいた自治を各家族が行うべきである、ということです。

このような主張を展開するにあたって、彼らは、後期ユダヤ教と新約聖書神学における「天使的国家権力論」についての現代神学の最新の研究成果を採用して、次のような要点を述べ

ています。

1. すべての国家権力は、天使的かつ悪鬼的である。
2. キリストの勝利の出来事によって、天使的・悪鬼的国家権力は打破された。
3. 現経緯において、国家権力の主体は勝利者キリストであり、諸国家は、キリストにつかえるエージェントとなっている。
4. その諸国家は、今や、キリストに対して謀反を起こし、バビロン化しつつある。
5. それゆえ、キリスト者は、すみやかに諸国家を解体・解消して、家父長政治的再建主義社会を建設すべきである。

以上の議論を読みつつ思ったことは、「ローマ書13章」の取り扱いについて、相当苦しい議論を迫られている、と見たことです。いろいろなことを述べてはいるのですが、それが、なぜ「現時点においてローマ書13章に文字通り従う必要はない」という結論に至るのか、どうもじっくりしていないのです。

おそらく、「ローマ書13章」が、彼らのアキレス腱となるでありましょう。それにしても、もし、新約聖書正典からローマ書13章が抜けていたら、と思うと、ゾッとします。

さて、再建主義陣営の側が「天使的国家権力論」を使って持論を展開するに至っている以上、それを反駁するこちら側は、これまでの「天使的国家権力論」を再度総点検して、戦いに臨まなければならないでありましょう。なにしろ、ついに、＜同一のパラダイム＞を土台に戦わなければならないわけですから。

その場合、こちら側としては、ガラテヤ書の＜律法・天使・仲介者＞の問題、エフェソ・コロサイ書の＜キリストの頭首権的・王権的支配＞の問題を、「天使的国家権力論」との関連から、詳細に見直さなければならないことになるでありましょう。

なかなか油断はできません。

参考サイト：<http://members.aol.com/Patriarchy/definitions/patriarchy.htm>

☐ 679 情報を感謝です

通りすがりの者 - 2004/12/11 20:30 -

いつも情報をいただき感謝です。

678の内容は凄いことになっていますね。アメリカでこんな過激な運動が進められているとは、知りませんでした。

大尉殿の働きがますます用いられますように。

☐ 678 悲観的な再建主義？

山谷 - 2004/12/09 23:23 -

ルイジアナ州のオーバンアベニュー長老教会のスティーブ・J・ウィルキンズ牧師は、白人優位主義に立つ「南部同盟」の理事であり、また、再建主義の立場から奴隷制度を肯定するひととして知られています。

ウィルキンズ牧師は、歴史修正主義者として、南北戦争の意味づけの見直しを進めており、「聖書を憎む北部の異教的文明が、聖書を尊重する南部のキリスト教文明を粉砕しようとしたのが、南北戦争の要因であり、奴隷解放問題は、二次的要因に過ぎない」と主張しています。その上で、「異教化が進む世界において、アメリカ南部だけが、地上におけるキリスト教文明の最後の牙城である」とも述べています。

そのウィルキンズ牧師は、南部のアメリカ長老教会において、大会や中会に対して「再建主義を正統性の保障の条項に加えること」を議題として繰り返し提出し、大会や中会で再建主義論争が起きるように仕向ける工作を行っているということです。さらに、再建主義に否定的なリベラルな教職者については、教会戒規の執行を求める訴えを繰り返し起こし、そのため、女性信徒が説教壇上で話しをするのを許可した牧師の教会に、教会規律調査委員会が入って、調査が行われたりしています。

ウィルキンズ牧師は、再建主義がアメリカを制覇する前に、まず宗教多元主義・文化多元主義である現状のアメリカ社会が崩壊しなければならない、と考えているようです。これは、ゲイリー・ノースが「Y2K問題」によってアメリカ社会が崩壊すると警告していたのと、基本的には同じ考え方でありましょう。

ただし、ウィルキンズ牧師のサークルにおいては、近い将来、アメリカ社会において人種間対立が深刻化し、そこから「人種間戦争」が起きて、アメリカ社会が崩壊し、その後、再建主義社会が建設される、と見ています。

実際に、ウィルキンズ牧師のオーバンアベニュー教会では、教会員に対して、体を鍛え、武術や武器の使い方を学んで、来るべき「人種間戦争」に備えるように、という勧めが行われているということです。このため、自分の子弟に武術を学ばせたくない親たちの中には、やむなく、他の教会に移る選択をした人もいる、ということです。

以上は、アメリカにおける「ヘイトグループ」のリストを作成し、監視を行っている、南部アラバマ州のNGO「南部貧困法センター」の報告書によるものです。

☐ 677 デイビッド・ウィルカーソン師、曰く

[山谷](#) - 2004/11/30 12:56 -

ニューヨークのタイムズスクエア教会牧師であり、『十字架と飛び出しナイフ』の著者として知られているデイビッド・ウィルカーソン師と言えば、雑誌『ハーザー』に毎号そのメッセージが掲載されている方です。この方が、使徒的宗教改革について、2003年1月13日の説教で、次のように触れています。

(以下引用)

エゼキエルは記しています。「その魚は、大海の魚のように、その種類がはなはだ多い。」
エゼキエル47:10

ここで何を言っているか解りますか。主の臨在の水が増す中、泳ぐ「信徒たち」が居ることです。そして、神の臨在は、御民のただ中に、終わりの時まで増え続けます。

しかし、悲しいことですが、ある教会とクリスチャンに嘆かわしい傾向があります。その人たちは自分たちの教会や群に、果ては、場所に神の幻を限らせています。彼らの考えはこうです。「私たちは神の新しい動きです。神が末の日に行われる業は、まさにここから、私たちの中から始まり、流れ出ます。ですから、皆さん、私たちに加わって下さい。私たちに幻があります。私たちは神がこの地でなさることの中心です。この動きは私たちから外へ繋(つな)がります。」

この考えは利己的だけではなく、神様を制限しています。これは、昨今大きな教団・教派がしてきた事、神様の御働きを妨げた事と全く同じです。この人たちは、この地で彼らだけが神を代弁する印象を与えました。そして、今、その悲劇の歴史は繰り返されています。

現実に私はその偽りの教理が甦（よみがえ）っているのを見ています。簡単に、彼らの教理を言うところですよ。「神はその働きの為に、ある地域、都市に一つの教会だけを選び、その地域の霊的権威を治める。」こんな間違った教理を広めようとする人々は、ある地域を治める使徒役や指導者を選びます。私もこのニューヨークで、何人かこんな自称使徒・預言者を知っています。彼らは、自分たちだけが霊的次元での権威を持つと考えています。

また、教会には神を制限する、他の動きもあります。それは、「初めの使徒や教会の人たち」が私たちよりイエスキリストの御体のあり方をよく啓示されたと思い、初代教会や使徒たちを顧みる事です。その人たちは初代教会の方法を修得しようと、力を注いで研究し、黙想します。

しかし、主は必ずしも初代教会の方法に戻って欲しいとは思っていません。主はこの終わりの日に、御民のために、もっと良いものを計画しています。今、泳げるほどの水があるのに、初代教会の「せせらぎ」に戻るのですか。

(以上引用終わり)

676 使徒的宗教改革 七つの識別ポイント

[山谷](#) - 2004/11/30 11:25 -

聖霊派のオピニオン雑誌『ハーザー』12月号が、使徒的宗教改革を特集記事で取り上げています。

今後、使徒的宗教改革の流れは、再建主義社会の建設を目指す<王国神学／王国現在論>と、使徒的リーダーシップの回復による<新約聖書のリーダーシップ論>と、二つに分岐して行くことになるでありません。

使徒的宗教改革が後者のレベルで完結するのであれば、それは、この時代における新しいリーダーシップ論という枠組みの中で収まることになります。

しかし、それを越えて、再建主義社会を目指すのであれば、全世界の諸教会は、スコットランド長老教会が大会決議で警告しているように、現代における<異端>との、長く困難な対決に直面することになるでありません。

使徒的宗教改革が、右に行くのか、左に行くのか、その分岐点となるのが、次の七つの識別ポイントです。

使徒的宗教改革を推進している自称<回復された使徒>の方々への質問

第一の質問 あなたは、<回復された使徒の肉体において、キリストがすでに再臨している>と信じておられますか？

第二の質問 あなたは、<携挙とは、キリストによる王国嘉納の際の喜びと興奮であって、キリスト者が文字通り空中に引き上げられるわけではない>と信じておられますか？

第三の質問 あなたは、<ローマ8:19に記されている「神の子たちの顕現」とは、回復され

た使徒を指している>と信じておられますか？

第四の質問 あなたは、＜黙示録2:26-27に記されている「鉄の杖をもって諸国民を統治する神の勝利者」とは、回復された使徒を指している>と信じておられますか？

第五の質問 あなたは、＜コリント前書15:25に記されている「すべての敵を足の下に置くまで国を支配するキリスト」とは、キリストのからだなる教会を指しており、「キリストの足」とは、万人のしもべである回復された使徒を指している>と信じておられますか？

第六の質問 あなたは、＜黙示録12:5に記されている「鉄の杖をもって諸国民を統治する男の子」とは、神の勝利者、すなわち、回復された使徒たちによって構成される、集合的人格としての「男の子」を指している>と信じておられますか？

第七の質問 あなたは、＜諸教派に分裂したキリストの教会は「バビロン」であって、キリストに立ち返る「回復された教会」は、すべて必ず「回復された使徒」のカバーリングの下に入らなければならない>と信じておられますか？

今後、わたしたちは、わたしたちの教会にやって来て「使徒的宗教改革」を推奨する人たち、特別な聖会や大会やセミナーを開いて「使徒的宗教改革」を教える人たち、雑誌や論文で「使徒的宗教改革」を宣揚する人たちに対して、上記の七つの質問を投げかけ、答えを聞くべきであります。

上記の七つの質問に対して、五つ以上が「はい」であるならば、わたしたちは、大いに警戒すべきです。

❑ 673 当分の間、再臨はない？

[山谷](#) - 2004/11/16 10:45 -

再建主義は、後千年期再臨説とセオノミーのコンビネーションであるわけですが、その場合、「世界の全人口がキリスト教に改宗し、国家の統治システム及び文化の全領域に旧約律法を決疑論的に適用した『再建主義国家』が誕生する」までは、キリストは絶対に再臨しない、ということになります。

ここから、「いつまでは、キリストは絶対に再臨しない」ということを、確言することが可能になります。

つまり、ある国のある地域の選挙人名簿を任意に選び、選挙人の宗教がキリスト教であるか否かについて、マークします。マーク数が選挙人の100パーセントに達しない限りは、キリストは（少なくともその地域に関して言えば）再臨しない、ということになります。

あるいはまた、ある国の国会議員名簿、裁判官名簿、高級官僚名簿を任意に選び、議員・判事・官僚の宗教がキリスト教であるか否かについて、マークします。マーク数が議員・判事・官僚の100パーセントに達しない限りは、キリストは（少なくともその国に関して言えば）再臨しない、ということになります。

そこで、たとえば、宗教についての世論調査を毎日行って、キリスト者の対人口比を円グラフで示すならば、ちょうど、天気予報のように＜明日キリストが再臨するかどうか＞について、確実に予測することが可能になるわけです。

新約聖書正典文書は、中間時の時制を＜前提＞として書かれているゆえに、どの部分を採用しても「終末論的緊張」があるわけです。それは、マタイによる福音書24章42節以下の主の御言葉に典型的に表れています。

「目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。・・・あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」

このような「終末論的緊張」を除去してしまう再建主義は、前提主義を標榜しつつも、もはや、新約聖書正典に立脚していない、と言うことが出来るでしょう。

わたしたちは、二つの極端に気をつけるべきです。
それは、悲観的前千年期再臨論者が言うような「1997年にキリストが再臨する」と確言するような誤謬。
そうして、再建主義的後千年期再臨論者が言うような「再建主義社会が到来するまではキリストは絶対再臨しない」と言うような誤謬。

そのどちらもが、新約聖書的ではないのです。

672 ニューパースペクティヴ

[山谷](#) - 2004/11/04 17:07 -

米国の改革派神学サークルでは、パウロ書簡の厳密な釈義に基いて「信仰義認」の教理を紀元一世紀の神学的文脈から再検討し、従来の改革派神学の「不可抗的恩恵」や「二重予定説」を批判するという、＜ニューパースペクティヴ＞という神学潮流が進行中で、議論の的となっているようです。

これは、改革派神学を「セミペラギウス恐怖症」から解放するもの、と解されているようです。

こうなりますと、改革派神学はウェスレアン・アルミニアンのパラダイムに接近することになるのでしょうか？

いずれにせよ、再建主義陣営からも、何らかの反応が期待されるところです。

671 ありがとうございます

[山谷](#) - 2004/11/04 13:42 -

谷口先生のご指摘を感謝してお受けいたします。

ゲイリー・デマーは、フルプレテリズムを異端とはみなしておらず、フルプレテリズムに好意的な立場にあるようでしたので、つつい「フルプレテリストなのであろう」と速断してしまっていました。

ログNo.669の次のくたり：

>ゲイリー・デマーの『新約聖書の終末論』は、フルプレテリズム再建主義の立場で書かれた本です。

・・・は、以下のように訂正いたします。

ゲイリー・デマーの『新約聖書の終末論』は、フルプレテリズムを必ずしも排除しないパーシャルプレテリズムの立場で書かれた本です。

よって、同ログの以下のくたり：

>流れとしては、<聖霊の第三の波の影響によって始まった、「AD2000とその後」運動において、翻訳の働きを通して関わっていた南雲行夫氏が、いまや、フルプレテリズム再建主義を日本に紹介するために、翻訳の働きを進めている>ということになります。

・・・を、下記のように訂正いたします。

流れとしては、<聖霊の第三の波の影響によって始まった、「AD2000とその後」運動において、翻訳の働きを通して関わっていた南雲行夫氏が、いまや、パーシャルプレテリズムを日本に紹介するために、翻訳の働きを進めている>ということになります。

ご指摘によって情報の精度を高めることが出来たことを、感謝いたします。

・・・ところで、フルプレテリストの谷口先生が<ウォッチング掲示板をウォッチング>しておられるということがわかりましたので、僭越ながら、フルプレテリストの聖書解釈に関する小論をお目かけます。ご笑覧ください。幸いです。

「ストイケイア問題」

☐ 670 訂正をお願いします

谷口明法 - 2004/11/04 10:18 -

山谷様

プレテリスト・ジャパンの谷口明法です。

私、再建主義ウォッチング掲示板をウォッチングさせていただいております。本当は書き込みたくなかったのですが、どうしても書き込まなければならないと思い、投稿いたしました。（できるだけこれで最後にしたいと思います。）

明らかな間違いがありますので、訂正をお願いします。

(1)

「ゲイリー・デマーの『新約聖書の終末論』は、フルプレテリズム再建主義の立場で書かれた本です。」

デマーがフル・プレテリストとも親交をもっているものの、彼の立場は現在のところ一貫してパーシャルです。これは本を読めば（また私のサイトを覗いていただければ）明らかなことなので、ぜひ読んでから発言をしていただきたかったと思います。

また、確かにデマーは再建主義者ですが、それはすぐに翻訳者と結びつくとは限りません。

上記の誤解がありますので、

(2)

「・・・南雲行夫氏が、いまや、フルプレテリズム再建主義を日本に紹介するために・・・」

この誤解が生じます。

これは「新約聖書の終末論」を読めば、最初の訳者のことばで、南雲師がフル・プレテリス

トではないことは明らかなですが、そこも読まずに書き込まれたことを大変残念に思います。正当な問題提起や情報提示、また批判はあっても良いと思っていますので、ぜひ慎重になさってください。

また、訳者のことばのところで、この本は翻訳出版権を福音総合研究所のスミス先生から譲り受けたと書かれていますし、翻訳のために福音総合研究所の諸氏からアドバイスを受けたということも記載されています。ですから、南雲師はフル・プレテリストとのつながりよりもスミス師とのつながりが大きいのです。

私は個人的に何度も南雲師と電話でやりとりしましたが、明らかにフルではありません。

また、後説やプレテリズムと再建主義は必ずしも結びつくものではありません。以前、南雲師とお話ししたときに、南雲師は再建主義はよく知らないと言っておられました。

ですから、山谷様の言われるその後のことばですが、

「ただちに、「使徒的宗教改革とフルプレテリズム再建主義の結合」と即断できるわけではありませんが、・・・」

そうです、南雲師はフルプレテリズムでも再建主義者でもないの、南雲師を通してのこの2つの結合は、南雲師がフルになり、かつ再建主義者になるまでありません。

山谷先生、公にご自身の意見を出されるときはぜひ慎重をお願いします。

□ 669 本の紹介四点（3）

[山谷](#) - 2004/11/03 23:10 -

デイヴィッド・チルトンの『復樂園』は、チルトンがフルプレテリストに転向する前に書いた、終末論の本です。「ゲネア問題」が要点となっており、結論は、セオノミーを実現することが神の命令であり、司法律法を厳密に適用する社会を実現することこそが、正しい聖書的終末論である、ということです。

訳者の床田亮一氏は、再建主義最大の論客の一人グレッグ・バーンセンの『現代に生きるための旧約律法』を訳して聖恵授産所から出している、神学関係の翻訳家です。出版元の福音総合研究所は、東京・三鷹にある、非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義の立場のシンクタンクです。

ゲイリー・デマーの『新約聖書の終末論』は、フルプレテリズム再建主義の立場で書かれた本です。やはり「ゲネア問題」が要点となっており、＜陰謀論的前千年期再臨論者＞の「トンデモ言説」を揶揄している部分もあります（ワールド・ワイド・ウェブ、バーコード、インプランティング、反ユダヤ、外れ預言、等々）。

訳者の南雲行夫氏は、かつて、国際とりなしの会日本の世話人をしておられた方でした。わたしも1990年代中頃に、国際とりなしの会日本に入会していて、「10/40の窓 とりなしの祈り」についてのニュースレターを読むのを、毎号楽しみにしていたのです。聖霊派のオピニオン雑誌『ハーザー』でも、トロント・ブレッシングについての南雲行夫氏によるレポートを読んだ記憶があります。

ところが、この「国際とりなしの会日本」は、気がつくといつの間にか、「C I アジア」というグループになってしまい、ニュースレターも「使徒と預言者の回復の運動」についてのニュースレターになってしまいました。C I アジアは、ロナルド・サーカ氏が佐野を基地

に展開している働きであり、C I インターナショナルは、(自称)使徒ビル・ハモン氏が総裁を務めている「回復された使徒」の運動です。このビル・ハモン氏は、ピーター・ワグナーが主催する「使徒円卓会議」のメンバーの一人でもあります。つまり、使徒的宗教改革の推進者ということになります。

そうしますと、流れとしては、＜聖霊の第三の波の影響によって始まった、「AD2000とその後」運動において、翻訳の働きを通して関わっていた南雲行夫氏が、いまや、フルプレテリズム再建主義を日本に紹介するために、翻訳の働きを進めている＞ということになります。このことが、C I アジアと国際とりなしの会日本との関連から、ただちに、「使徒的宗教改革とフルプレテリズム再建主義の結合」と即断できるわけではありませんが、今後も、関心をもって注目して行きたいと思います。

□ 668 本の紹介四点 (2)

[山谷](#) - 2004/11/03 23:09 -

『リバイバル あなたの都市が変わる!』には、そうしたワグナー独特のコンサルタント的「感覚」が、より強く出ています。

32ページ以降41ページまで、次のような感じで展開されて行きます。以下は、山谷流の、幾分アイロニーをまじえたパラフレーズです。

1. 多くの牧師は、所属教団の指導者と、意味ある関係を築けない、と思っている。
2. だから、多くの牧師は、所属教団の同僚牧師と関係を築く方がましである、と感じている。
3. つまり、＜遠方の教団本部の官僚たちが策定した計画＞より、現場の牧師たちの協力の方が、はるかにましである。
4. ところが、多くの牧師—つまり、たいがい中小教会の責任を持っている牧師たち—は、所属教団内のメガチャーチの牧師と会って話すとき、「嫉妬心と警戒心」から逃れることが、まったく不可能である。これは、社会学的に不可避免的な心理反応である。
5. メガチャーチの牧師の立場からしてみると、中小教会の牧師と会って話しをしても、ほとんど話題が合わず、気まずい沈黙が漂うことになる。なぜなら、メガチャーチの牧師と、中小教会の牧師とでは、「目が向いている場所」が、まったく違うからである。
6. そこで、メガチャーチの牧師は、おのずと、所属教団内の他のメガチャーチの牧師たちと関係を築くことを好むようになる。その方が、気楽だし、お互い心が通じるから。
7. ところが、教団本部は、そうした動きに対して警戒して来る。「教団内のメガチャーチの牧師たちが寄り集まって、本部とは別の『力の中核』を築こうとしているのではないか?」と勘ぐられるわけである。
8. だから、所属教団内のメガチャーチの牧師の寄り集まりは、おのずと、秘密会合的な性格を持ってしまう。
9. それならむしろ、他教団のメガチャーチの牧師と関係を築いた方が、よほど、よいではないか、ということになる。そうして、現に、メガチャーチの牧師たちは、すでに教団教派を超えて、他のメガチャーチの牧師たちと、親密な関係を取り結んでいる。彼らは、自分の所属教団に対するよりも、他教派のメガチャーチの牧師に対する忠誠と責任と絆を、第一に

優先させる。

10. こうして誕生する「世界的なメガチャーチの牧師たちの提携」（世界的使徒ネットワーク）は、中小教会の牧師たちにとって、重要な貢献をすることになる。メガチャーチの牧師は、実践神学的成功事例を中小教会に教えて、中小教会をメガチャーチのフランチャイズ・チェーンにしようとする。中小教会の牧師たちを集めて「教える」ための「大会」には、莫大な経費がかかり、当然のことながら、貧しい中小教会の牧師たちでは費用を負担し切れない。だから、気前の良いメガチャーチが全額出して面倒を見てあげる、ということになる。

以上、なかなか現実を鋭く見えて、さすがだなあ、と、興味深く読ませてもらいました。これが、使徒的宗教改革の方向性であるとしみますと、使徒的宗教改革とは、「グローバル資本主義の経営戦略を教会運営用に翻案したもの」という見方も、出来るのではないのでしょうか？

■667 本の紹介四点（1）

[山谷](#) - 2004/11/03 23:06 -

最近、使徒的宗教改革と再建主義関連の書籍を入手しました。以下の通りです。

C.ピーター・ワグナー編著、訳者不詳、『使徒的教会の到来 神が今日の教会に望まれている新約聖書的リーダーシップの型を再発見する』、2000年、マルコーシュ・パブリケーション刊

C.ピーター・ワグナー著、訳者不詳、『リバイバル あなたの都市が変わる！』、2001年、アノイント・ジャパン

デヴィッド・チルトン著、床田亮一訳、『復楽園 聖書全体の読解から導き出された聖書的終末論への入門書』、出版年未記載、福音総合研究所出版部刊

ゲイリー・デマー著、南雲行夫訳、『新約聖書の終末論 今は輝くキリストの統治の時代（現代人を終末恐怖症から解放する書物）』、2003年、とりなしミニストリー刊

『使徒的教会の到来』は、ワグナーから「回復された使徒」と認定された世界のメガチャーチの牧師たちが、自分たちの実践神学的勝利の成果を列挙している本です。

16ページに、「神に祝福された教会」と、そうでない教会、という表現が出てきます。祝福された教会というのは、もちろん、礼拝出席数700人以上のメガチャーチ。そうでない教会、というのは、伸び悩んでいる中小の教会のことです。

ピーター・ワグナーは、教会成長学者として長年研究をして来たわけですから、彼の関心は、メガチャーチにしか向いていない、というのは、ある意味、いたしかたのないことでしょう。それはちょうど、巨大ショッピングモールの経営コンサルタントが、町の小さな雑貨店に存在意義をまるで見出せないのと、似ています。人口13万人の町で、礼拝出席1万人のメガチャーチが成長しているのなら、礼拝出席30人の小教会は、あっても、なくても、同じこと、というわけです。

■666 再建主義の見取り図

[山谷](#) - 2004/11/01 22:01 -

再建主義の見取り図に、新たに「無政府主義的再建主義」あるいは「家父長政治的再建主義」を加えることが出来るようです。

家父長政治的再建主義は、神が人類に「地を支配せよ」と命令した時点で意図していた人類の在るべき姿を<家父長政治>であったと考えます。そこから決疑論的に思考して、旧約の司法律法を適用した来るべき再建主義社会においては、<父権的家族を社会の基本単位とすると同時に、政治の単位ともする>という、「家父長政治的再建主義社会」を目指します。

これは、神政政治か世俗政治かを問わず、あらゆる形態の国家の廃止を目指していることから、「キリスト教的無政府主義」とも言われています。

この「家父長政治的再建主義」は、ラッシュドゥーニーの一連の再建主義の著作を、自説の証明と補強に使用するのみならず、自分たちが再建主義者であると名乗っています。そうして、国家と政府の解消に伴う、あらゆる国税の廃止のみならず、旧約の族長たちの結婚生活に倣い、現代において一夫多妻制を復活させることをも目指しています。

国家と政府の解消、国税の廃止、一夫多妻制の導入は、いずれも、16世紀の「ミュンスター千年王国派」において見られた実行です。これは、<中間領域を認めない再建主義のパラダイム>が、三項図式に立脚していないがために、再建主義の一形態が「ミュンスター千年王国派」に極めて類似して来る場合があるという、興味深いケースでしょう。

この「家父長政治的再建主義」を全体の図式に加えますと、現時点での再建主義の見取り図は、下記のようになります。

フルプレテリズム再建主義

パーシャルプレテリズム再建主義

二契約論パーシャルプレテリズム再建主義（信条派）

非二契約論パーシャルプレテリズム再建主義（非信条派）

王国神学／王国現在論（無教派・非教派カリスマ派再建主義）

家父長政治的再建主義（無政府主義的再建主義）

665 再洗礼派について

[山谷](#) - 2004/10/31 22:32 -

通常、歴史神学では、再洗礼派とバプテスト派を同一視することはないのですが、気分を害された方が事実として出て来られましたので、誤解を避けるために、今後は、<中間領域を否定する再洗礼派>を「16世紀のミュンスター千年王国派」と呼ぶようにしたいと思います。これまでの掲示板での議論で出て来た「再洗礼派」につきましても、すべて、「16世紀のミュンスター千年王国派」と読み替えてご理解いただければ幸いです。

バプテスト派の方なら十分ご承知だと思いますが、普通、バプテスト派の起源を求める場合は、16世紀末のイギリス国教会の司祭ジョン・スミスを挙げることになります。スミスは、清教徒の会衆を牧会した経験が転機となって、17世紀初頭に国教会を離脱し、非国教派の牧師となりました。そのために当局からの弾圧を受けて、オランダに亡命し、滞在地にて、メノー派に接触して、幾分かの影響を受けたとされています。

メノー派は、広義の再洗礼派の中のひとつとして数えられますが、「16世紀のミュンスター千年王国派」とは大きく異なり、キリスト者の世俗政治への関与を禁止すると共に、兵役を

拒否し、絶対非戦主義を唱える、極めて＜平和的・非政治的・脱政治的＞なスピリチュアリティを特色としていました。アメリカのアーミッシュ派は、フッター派と共に、メノー派の分派です。

これに対して、わたしがこれまで掲示板で言及して来た「16世紀のミュンスター千年王国派」は、武装革命によって政府を打倒し、教会法と国家の公法を廃止し、預言者の啓示に基づいた「新しい法」を施行し、神政政治による千年王国の実現を目指した運動でした。

改革長老教会の文脈においては、恩恵論をめぐる議論をする場合に「再洗礼派の異端」と言うと、普通はこの「16世紀のミュンスター千年王国派」のことを指すことになっています。これは、神学的議論における了解された約束事のようなものです。

この掲示板では、再建主義への駁論を展開するために、これまでもたびたび改革長老教会における神学的議論を取り上げて来たわけですが（たとえば、米国プロテスタント改革教会における1920年代の「市民的善行を可能にする一般恩恵」をめぐる論争など）、その流れから、特に説明を付けることなく、そのまま「再洗礼派」という用語を使って来ていました。しかし、この掲示板には、当然のことながら、改革長老教会以外の多様な教派の方が来ておられるわけですから、＜再洗礼派という用語をもって何を指すかについての、了解された約束が、そもそも最初から存在していなかった＞という点に、気づくべきでありました。

今回、「ただのおじさん」さまからのご指摘がありましたので、今後は、誤解を招きやすい「再洗礼派」という用語を使用しないことによって、議論の明確化を図りたいと存じます。

なお、通常の歴史神学では、バプテスト派の起源を再洗礼派にまで求めることはないものの、一部のバプテスト派の史家の中には、まれに、バプテストの起源を再洗礼派、ワルドー派、カタリ派、ドナティスト派にまで求める立場も存在していることは、当方も認知しておりますことを、付記しておきます。

■ 662 勘違いするといけないので補足

ただのおじさん - 2004/10/30 22:09 -

再洗礼派とは言わずもがなバプテスト派です。

バプテスト派にはバプテスト派の歴史があります。

その歴史を理解をしようともせずに類似しているとは軽率です。

今は21世紀です。再洗礼派の時代とは時代背景が違います。

宗教改革の時代、再洗礼派の信徒をルター派も改革派も水に沈めて死に至らしめました。

バックには政治と宗教の今と違う密接な関係があります。どこの国も王政の時代です。そんな時代に、改革派に殉教させられた時代の再洗礼派に、中間領域があるなどという発想は出てくるわけがありません。

でも今は民主主義という制度が、良かれ悪しかれ国家を支えています。その様な時代に出てきた再建主義とどこが類似しているのですか。

今の時代の尺度で再洗礼派の時代を見ることは誤りのもとです。時代背景が違えば類似性など成立しません。

■ 661 私の立場（三項図式＋バプテスト派）

ただのおじさん - 2004/10/30 16:14 -

><再建主義>も<再洗礼派>も、「中間領域を認めない」という点で、類似したパラダイムです。

>

>このようなパラダイムに対して、正統的キリスト教神学は、いずれも、中間領域の存在を肯

定する<三項図式の世界観的パラダイム>に立っています。

私の立場を正統的キリスト教神学ではないというのはいかなるもののでしょうか？
三項図式とバプテスト派の立場は両立します。現実ここに存在しているでしょう。
三項図式を認めて再建主義を批判したバプテスト派の人間を再建主義と類似したパラダイムなどと言わないで下さい。しばらく掲示板を見ないうちに見損ねた文章にとんでもないことが書いてありましたので訂正を訴えます。私の立場が正統的でないとは何事ですか！！！！！！！！！！
バプテスト派と再建主義が類似しているとは何事ですか！！！！！！！！！！
三項図式をバプテスト派がとれないとは何事ですか！！！！！！！！！！
やはりあなたは自分の考え（神学）が絶対化しています。単純な図式化をしがちなのもあなたのその傾向ゆえです。

■ 660 王国神学のリーダーはサタンの手先

ただのおじさん - 2004/10/30 15:52 -

久しぶりでございます。
王国神学の問題が掲示板の方に挙がってきたので横レスします。
初めから再建主義に対してより手厳しく批判します。
どぎついよ！

はっきり言って再建主義より王国神学の方が私からしたら問題の多い気がします。
端的に言えば、王国神学は、再建主義さえしなかった使徒の復活を宣言しています。王国神学の問題点は、使徒の復活は「聖書のみ」から正当化できるのかということに尽きます。今までのほとんど全てのプロテスタントの主張をひっくり返して彼らの使徒職を正当化できるのか、これが問題の全てです。他の問題点など気にすることはありません。それが出来なければ、王国神学のリーダーたちをサタンの手先と判断出来るからです。そもそも使徒職は主が直接の任命者です。ですからパウロが使徒なのかがコリント書で問題になったのです。王国神学の主張を少し読んだ限りでは、王国神学のリーダーたちは直接主から任命されたということになります。それは最低でも、パウロの使徒職の弁明に王国神学のリーダーたちが完全に当てはまらなければなりません。そうでなければ、全プロテスタント教会が彼らの使徒職を承認することはないからです。それが出来なくても使徒職を全うしようとするならば、神様の御心で存在している教会を破壊しようするわけですから、それはサタンの手先しか出来ない仕業です。そして、全プロテスタント教会が彼らの使徒職を承認することは不可能です。聖書を読めば一目瞭然です。ですから結論として、王国神学のリーダーたちはサタンの手先あり、サタンの手先が人気を得るのはごく当然です。私にさえ、王国神学のリーダーは自分たちの使徒職を全プロテスタント教会に承認させられなければ彼らはサタンの手先、と単純に言えてしまいます。私にとっては難しい問題ではありません。使徒職の回復というのは大きな彼らのネックになります。いかなる詭弁を用いてもそれは不可能です。

>このような主張が多数派をしめるとは本当におそろしく感じさせられますです。

サタンの手先が人気を得るのはごく当然です。
既存の教会が存在しているのは神様の御心なのです。肉の思いで勝手に使徒となった偽キリストが神様の御心で存在している教会を破壊しようなんて神の御心にかなう主張ではなくサタンの手先として働いているだけです。この様な主張は一時的には流行っても、神の御心ではありませんから、神様が介入されて廃れ、つぶされてしまいます。
神の御心がなりますように。
アーメン。

■ 659 使徒的な働きとは

JOG - 2004/10/29 22:27 -

私が理解する使徒的な働きとは「父の心」すなわち、子供が自分よりも優れた大人になることを望み、子供のために命をすり減らして仕える心をもって弟子を育て、派遣することのできる人といったイメージがあります。パウロはそのようにテモテや弟子たちを育てたと思いますし、イエス様も12弟子をそのように育てたと思います。今までの文章を読むと使徒というよりも「独裁者」、または、「ボス」といったほうがいいのではないのでしょうか？

■658 まことにおそろしい主張でございますね。 JOG - 2004/10/29 22:21 -
このような主張が多数派をしめるとは本当におそろしく感じさせられますです。

■657 使徒的宗教改革と<シティーチャーチ> (2) 山谷 - 2004/10/29 17:42 -
デイヴィッド・オートン師履歴

1996年より 宣教団体ライフメッセンジャー創立者
1996-1998年 オーストラリア祈りのサミット会長
1996-1999年 メルボルン牧師ネットワーク指導者
1999-2000年 フランクストン宣教ネットワーク指導者
1997年より ライトハウス宣教学院講師
1992-1999年 フランクストン・ペニンスラ・シティーチャーチ牧師
1993-1996年 フランクストン・ペニンスラ聖書学院校長
1991-1992年 ヴィクトリア・クルセード宣教学院講師
1986-1990年 ブルーマウンテン・ロゴス聖書学院講師
1981-1983年 ロゴス・ファウンデーション、聖約教会統治評議会委員
1981-1983年 ロゴス・ファウンデーション、『レストア・マガジン』誌編集委員
1981-1983年 ロゴス・ファウンデーション、ブルーマウンテン全国担当委員
1972-1980年 シドニー・クリスチャン・フェイス・センター青少年伝道担当者
1974-1980年 シドニー・クリスチャン・フェイス・センター宣教訓練学院聖書教師
1972-1973年 シドニー・クリスチャン・フェイス・センター宣教訓練学院・宣教学修了
1984-1985年 バンクーバー・ロゴス聖書学院・宣教学修了
1988-1991年 メルボルン・パシフィック神学校卒・文学士号取得（聖書学）

オーストラリア・クロスリンク・クリスチャン・ネットワーク認定伝道者

■656 使徒的宗教改革と<シティーチャーチ> (1) 山谷 - 2004/10/29 17:41 -
使徒的宗教改革が目指すものは、「震われない御国が到来するために、震われるものをすべてふるいにかけて、除去すること」にあるようです。

オーストラリアの宣教団体「ライフメッセンジャー」の創立者であり、非教派カリスマ派の聖書学院・宣教学校の講師や校長を歴任して来たデイヴィッド・オートン師は、「使徒的戦略」と題する論文の中で、概略次のような方向性を述べています。括弧内太字は、山谷のコメントです。

震われないで永遠に残る御国とは、キリストに結びついた「回復された使徒」と「回復された預言者」を土台とした「回復された教会」を意味します。「回復された教会」とは、より具体的には、都市のリバイバルによって形成された<シティーチャーチ>すなわち、都市を単位とする地方教会／都市にあって合一の立場に立つ地域教会です（**ここには、都市単位で**

伝道を進めるというシティーワイド宣教、都市のリバイバルを狙う都市レベルの霊の戦い、ウォッチマン・ニー／ウィットネス・リーの地域教会主義という、実践神学的な三つの要素の結合形態が見られます）。

現在は、各都市に、それぞれの教団教派ごとの教会が分立・乱立・混在していて、それぞれの教会で、それぞれの神学と伝統に忠実な牧師が、それぞれカラーの異なる会衆を牧しているわけです（王国神学／王国現在論の立場からすれば、教団教派が分立する都市の教会こそ、バビロンの状況です）。

しかし、使徒的宗教改革によれば、それらは、使徒と預言者という土台の上に立てたのではない、「偽りの土台」の上に立てられた、「偽りの教会」ということになります。なぜなら、真の教会は、回復された使徒と預言者によって指導される＜シティーチャーチ＞（都市を単位とする地方教会／都市にあって合一の立場に立つ地域教会）だけだからです。

そこで、都市のリバイバルが目指すものは、第一に、その都市における使徒と預言者の務めを回復することです（通常、回復された使徒と目されるのは、その都市において最も急速な教会成長を指導している非教派カリスマ系の教会の牧師ということになります）。

次の段階として、「回復された使徒と預言者という土台」に立たない教団教派の諸教会と諸伝道団体・諸宣教団体を、除去してしまう、つまり、解散し、閉鎖してしまう、ということになります（使徒的宗教改革が目指す教会の在り方は、ピーター・ワグナーによれば、会衆が協議して教会の方向性を決定する「会議制」ではなく、使徒と預言者の声によって一切を決定する「独裁制」です。そうして、回復された使徒と預言者の独裁的な命令に従わない教会は、当然のことながら、「回復された使徒と預言者という土台」に立たない「偽りの教会」ということになり、「除去」の対象となるわけです。もちろん、「除去」と言っても、使徒と預言者の命令でやってきたブルドーザーが、教会を破壊するということではなく、都市のリバイバルから完全に取残され自然消滅することによって、あるいは、使徒と預言者の権威に伴う神の超自然的な力の顕現によって、超自然的に消滅させられることとなります）

このような主張を読みますと、今後、＜シティーチャーチ＞＜シティーワイド宣教＞＜都市のリバイバル＞という概念の背後に、いったいどういう「使徒的宗教改革の意図」が込められているのか、慎重に判断しなければならないと考えさせられます。平成の御世になってあまり聞かなくなった「教会に仕える」という、いささか古びたモットーを掲げている伝道団体や協力伝道方策なら、その点、なんの心配もないわけです。「教会に仕える」を試金石として用いるのは、見分けのためのひとつの方法でしょう。

655 今後のキリスト教の流れ（2）

山谷 - 2004/10/29 10:02 -

現に存在しているニードに対して、入手可能な選択肢は＜再建主義＞と＜王国神学＞しかない、というのが、その看板を掲げる人たちの「売り言葉」であるわけなのですが、わたしは、そのようなことは決してないと考えています。

たとえば、福音派の人たちにとっては、依然としてカルヴァン／カイパー神学の「キリストの王権的・頭首権的支配」の概念に基く「国家と社会と教会の神学」という選択肢が、有効なものとしてあるわけです。宇宙論的な15の法領域という概念を使えば、国家のみならず、複雑化しつつある現代社会のすべての領域を包含させることができます。この場合、ウェストミンスター信仰告白に見られるような「神の指で記された自然法」の概念をより明確にした、神学的自然法論をきちんと確立しておく必要があります。

また、カリスマ派の人たちにとっては、その大多数が奉じている「前千年期再臨説」と「国家と社会に働く悪鬼的勢力」という概念に対して、パラダイムの非常に近似しているオスカー・クルマンやヘンドリクス・ベルコフの救済史神学を足がかりとすることによって、リベラルな諸教会と共有することが可能な「国家と社会と教会の神学」を構築することが出来るであろうと思われます。また、カリスマ派が重視する「異言」や「いやし」については、異言に対して理解を持っているルドルフ・ボーレンや、バルトに影響を与えたブルームハルト親子の存在が、神学的な足がかりとなり得るでしょう。

こうした方向に進むことが出来るかどうかは、諸教会がいかに関与し、「二元論的」な短絡思考を回避することができるかに、ほとんどかかっていると思われます。

すべてのものごとを「霊的キリスト者の思考」と「魂的キリスト者の思考」に分断して、前者のみを尊重し、後者を無用の長物として切り捨ててしまう、ウォッチマン・ニー／ウィットネス・リーの＜切り離す思考＞が、カリスマ系諸教会のある部分に相当な影響力を持っているから、ここを克服できなければ、「国家と社会と教会の神学」の構築は、難しいことになるでしょう。

魂の働き、精神の働き、良心の働き、その良心に記された自然法・・・こうしたものが、聖書神学的に見て、どう価値づけられるのか。そうして、ウォッチマン・ニー／ウィットネス・リーの影響を受けているカリスマ派の一部の人たちに、魂の機能にも価値がある、ということ、どう説得的に提示できるのか。

これもまた、もうひとつの課題であろうと思われます。

654 今後のキリスト教の流れ（1）

[山谷](#) - 2004/10/29 10:02 -

ご指摘のように、日本福音同盟が、いわゆる「カリスマ条項」と呼ばれていた規制を撤廃したことから、日本福音同盟が今後、穏健なペンテコステ・カリスマ・第三の波派の諸教会の受け皿として機能する可能性が十分にあるだろうと思います。

また、世界教会協議会も、ペンテコステ・カリスマ派との対話を熱心に続けています。というのも、「AD2000とその後運動」の流れで開催された南アフリカのGCOWE（世界福音化会議）において明らかにされたように、今や、世界のキリスト教人口の多数が、カリスマ的な強調点を何らかのかたちで持っているキリスト者で占められているからです。

世界教会協議会は、70年代より、社会正義の問題に精力を集中して来たために、「伝道と社会正義」のバランスが傾いた状態となっていました。

一方、福音派の諸教会は、その反対に、伝道にのみ精力を集中して、世界教会協議会とは逆方向にバランスが傾いた状態となっていました。

しかし、世界福音同盟とローザンヌの流れにおいては、これまでの歩みに反省がなされ、「伝道と社会正義」のバランスが取れた新しい神学的理解が構築されつつあります。

今後、福音派が社会正義の問題を考えようとする場合、最終的に行き着くのは、国家権力というものを、どのような「聖書世界観的パラダイム」で捉えるのか、ということでありましょう。

そこで要請されることになるのが、「教会と国家の神学」とでも言うべきものでありましょう。そこから派生的に必要なになってくるのが、「教会と経済の神学」さらに「教会と多国籍

企業の神学」さらに「教会とグローバル社会の神学」です。これらは総称して「国家と社会と教会の神学」と言ってもよいでしょう。

もちろん、リベラル派をはじめ、福音派の中でも、こうした課題に取り組み始めている神学者がおりますが、しかし、カトリックの自然法学体系やカルヴァン／カイパーの政治神学を別にすれば、この領域ではまだ、十分に確立された神学体系が出来上がっていないというのが、現状であろうと思います。

おそらくは、この「神学的間隙」を突いて出てきたのが、再建主義であり、王国神学／王国現在論であろうと思うのです。そうして、聖書世界観的パラダイムに基く「国家と社会と教会の神学」を切実に求めていたファンダメンタリストは再建主義に飛びつき、同様なニードを持っていた非教派カリスマ派は王国神学に飛びついている、というのが、現在の状況でしょう。

あるいは、そうしたニードに別のかたちで応えることが出来る「陰謀論」に飛びついている、という状況も、観察されます。

653 理由

JOG - 2004/10/29 00:16 -

古典的ペンテコステやカリスマの若手の教職者の中には逸脱的な面の目立つ第三の波よりもむしろ、歴史的な福音主義神学の必要性に向かう人が増えているように思います。

なぜかという、二世、三世の世代になっているからです。

自分が開拓したり、初代牧師であったり、小教会を大教会に成長させた牧師であったりすると自分の理念で教会形成すればよいだけです。

しかし次の世代の場合はそうはいきません。

個人的な理念だけで教会が形成されていると、その個人が倒れると、教会も倒れてしまうのです。そうなれば、体験主義の聖霊派であっても、個人の理念ではなく「聖書」によって考え、行動する人間がいなければ教会は世代交代の嵐をのりこえられないことに気づき始めているのです。

第三の波は、まだ十数年の歴史しかないので、二世、三世はまだ子供なのでしょう。

652 リベラルとペンテコステ

JOG - 2004/10/29 00:05 -

J E Aがカリスマ条項をなくしただけではなく、リベラルもペンテコステに近づいているようです。

アメリカではすでにリベラルがペンテコステを迎え入れようとやっきになっているそうですね。

ペンテコステの若手牧師のなかでは同志社大学の大学院で神学を学びなおしたり、リベラル派の教授を講壇に招いたりしている人もいます。

ちなみに私は、保守的福音主義の立場にいたいと願っています。

651 友情の欠如

JOG - 2004/10/28 23:58 -

大川牧師がセカンドチャンスのメッセージを語ったとき、強かに批判したのは福音派ではなく、むしろ、ペンテコステ・カリスマの牧師のような気がするのです。

普段は日本最大の牧師、日本一のメッセンジャーと持ち上げていましたのに。いっせいに批判の声があがりました。

ひとつには大川牧師の影響力を身近に感じているので、信徒が影響を受けることを恐れたのでしょう。

しかし、私が思うに、大川牧師にむきあって友情をもって諭すことのできる人がいたのかなと思うのです。

普段したくしているような牧師仲間がある日、雑誌などで自分への批判を繰り広げ始めるとどんな気持ちがするのでしょうか。

私はセカンドチャンスを信じませんし、メガチャーチも好きではないのですが、そのことをさびしく思うのです。

■650 ネットワーク

JOG - 2004/10/28 23:51 -

山谷大尉様、丁寧な応答をありがとうございます。

私はが「友情」や「ネットワーク」という言葉を使いまして、イメージにありましたのは、「日本リバイバル同盟」よりも、「日本セルチャーチネットワーク」や「世界セルチャーチネットワーク」です。

山谷大尉様も、「ユースチャーチネットワーク」のホームページにご自身のホームページのリンクをはっておられますよね。

「日本リバイバル同盟」は内実はあまり機能していないのではないかと思います。

第一の理由に初期に第三の波以降の人たちが主導的であったと思うのですが、古典的ペンテコステやカリスマの立場から見ると、やや、逸脱的な面が目立ったり、内容的にこれといった魅力に欠ける面があったと思うのです。

第二に、NCC、JEAに対抗する第三の組織をというニードがあったのですが、JEAがカリスマ条項を無くしたため、そのニードが薄れてきたと思うのです。アッセンブリー教団はカリスマ条項があるときかJEAに加入していますが、さすが成熟した教団だなと思わされます。

古典的ペンテコステやカリスマの若手の教職者の中には逸脱的な面の目立つ第三の波よりもむしろ、歴史的な福音主義神学の必要性に向かう人が増えているように思います。

最近いのちのことば社から出たエリクソンの組織神学はスウェーデン・バプテスト・系ペンテコステのJECの教職者が翻訳しています。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)

